

東国における中世在地系土器について

——主に関東を中心にして——

浅 野 晴 樹

はじめに	Ⅳ 調理具について
Ⅰ 画期の設定について	Ⅴ 煮炊具について
Ⅱ 供膳具について	Ⅵ その他の瓦質土器
Ⅲ 北関東の瓦質の壺について	Ⅶ 結 語

はじめに

1984年「古代末期～中世における在地系土器の諸問題」のテーマでシンポジウムが行われた。⁽¹⁾このシンポジウムで東日本と西日本の中世土器の相違について、かなり整理がなされ、問題の所在が明確にされ始めた。それ以前における東国の中世土器研究は、搬入品の年代と産地の探求に主眼がおかれ、遺跡の中でかなりの割合を示す在地土器と推測される土師器の皿、瓦質の土器類に積極的な検討を加える者は少なかった。西国では畿内を中心に同期の研究は進展が見られ、幾つかの編年操作、土器生産の歴史的背景などかなり具体的な研究がなされている。⁽²⁾このような研究を見たとき、東国の在地土器についても分類操作を含め正当な評価を進める必要があると考えた。

小文では、東国の在地系土器の存在の把握を第一義とし、次いで、特徴的な供膳具、貯蔵具、煮炊具、調理具について、主に関東の資料を中心に出現の背景と変遷などについて検討を加えたい。

Ⅰ 画期の設定について

中世成立期に関する論文は多くあり、その成立に関する考えは、ほぼ11世紀中頃とさらに12世紀中頃から終末に画期を設定することが多い。その評価に多少の異なりはあるが、多くの研究者の共通認識と捉えることができる。東国における在地土器の生産を見たとき12世紀中頃か

ら後半にかけてのあり方が、その後の土器生産を考える上に極めて大きな存在と思われることから、ここでは12世紀以降についての検討を加えることとした。

植崎彰一氏は、平安時代の各地の須恵器窯や東海地方の白瓷窯において焼かれていた様々な器物が、壺・甕・播鉢の三者を主とする生産に転換する時点を12世紀代をもって中世窯業の始まりと考えるものであるとした。そして、各地の生産地の製品の広域的な広がりの特徴を見出すことができると考えた。東国では、11世紀前半代以降不明確に成りつつあった貯蔵具等に対して、甕・壺などの貯蔵具、さらに新たに加わる調理具が東海諸窯製品から多量の搬入されるのがこの時期以降である⁽³⁾。

畿内を中心とした土器のあり方については橋本、宇野、菅原氏等により、中世成立期の画期⁽⁴⁾の設定が行われている。各人の視点の異なりから、多少の評価の違いはあるが、この時期の畿内では瓦器碗を中心に鍋・釜などの瓦質の製品の出現が認められ、基本的に生産体制の変化を認めるとともに、さらには消費地における複合的な食器の構成の確立した時期であり、それを可能にした流通の発達を背景として想定できる時期として、12世紀中頃から12世紀後半を設定している。

13世紀末から14世紀初頭について、吉岡氏は量的拡大再生産期として評価している⁽⁵⁾。東国に大に関わる古瀬戸の生産においては、藤沢氏は従来の宗教的色彩の濃かった壺類などの生産に加えて、新たに花瓶・水滴・香炉さらには平碗・天目茶碗等古瀬戸の全器形が揃う段階としている。そして、この時期、工人は施釉陶器専業の集団として確立するとされ、古瀬戸工人の農業生産から分離することを意味するとした。この背景として、13世紀の農業生産力の増大に伴い、余剰物資を商品化することが行われ、次第に貨幣媒介とする商品経済の進展があるとされる。このような古瀬戸の変化に、生産地における体制の変化を認めることができる⁽⁶⁾。さらに吉岡氏が指摘するように、古瀬戸さらには常滑などの生産を見れば、明らかに量産体制への動向と生産地間における器種の淘汰と生産分業の進展を見ることができる。

14世紀末から15世紀初頭にかけての時期も汎日本的に土器生産・流通に変化を認めることができる。古瀬戸においては、前代においてほぼ古瀬戸の製品が出揃い、この時期さらに供膳具、調理具などの量産に見られるように日常雑器の大量生産に体制が移行する古瀬戸後期様式の成立にあたる。また、この時期に消滅する山茶碗について、藤沢氏は在地の農民向けに製品をより粗悪化させていった山茶碗工人は、まもなく消滅して行くと規定している。山茶碗の消滅という点に関しては、同時に畿内の瓦器碗の消滅とも呼応する現象である。菅原氏は基本的に14世紀から15世紀に奈良や大阪における瓦質の鉢・甕などの生産は瓦器碗工人による生産の可能性を述べている⁽⁷⁾。生産工人の評価、さらには系譜上の相違で多少意見を異にする研究者もいるが、基本的に同様な変化を認め得るものが多く、菅原氏は瓦器生産の確立期としての評価を与えている。

最後に、15世紀後半ないしは16世紀には、前代の画期以降、基本的に近世の土器様相に連動する新たな社会的分業関係への転換期として捉えられる、と吉岡氏は指摘する。⁽⁸⁾大窯への変化に見られる生産効率の増大は近世的窯業生産体制の確立と推測した井上喜久男氏の考えがある。⁽⁹⁾近世的な土器生産の確立とは評価できなくともほぼこの時期に土器生産に画期を認めることはできる。荻野氏は、主に西日本の播鉢の生産を通して、この時期広域流通の近国窯に対して、一国ないしは半国程度の狭域経済圏を基盤とした在地窯の存在を強調した。⁽¹⁰⁾これらの生産体制は須恵器系、瓦器埴工人の変質など様々の可能性があり、当然前代から派生し、この時期に隆盛を迎えると言う。

主に東海と畿内の土器生産における画期を整理すると、12世紀中頃から12世紀後半、13世紀末から14世紀前半、14世紀末から15世紀初頭、15世紀末から16世紀初頭の4期が想定できる。

以上の画期は、次のような東国の在地系土器生産に呼応するものと想定できる。

12世紀中頃から後半に京都系の手づくね土器が東国全域に広がる極めて斉一的現象の出現することが知られている。それは、従来の東国の土器生産のあり方とは異なる画一的な動きであった。この動向は非ろくろ土師器の性格にも関わり、東国の中世前期における土器生産のあり方を規定する問題が所在すると考える。

次いで、13世紀末から14世紀にかけての中世中頃、東国では在地系の瓦質土器の壺が北関東で生産され始め、また、北関東や信濃の一部で瓦質の片口鉢・播鉢が、東北で瓷器系の片口鉢等が生産され始めた。この出現は地域的に限定されたものであるが、東国の瓦質土器生産のあり方を特徴づけるものと考ええる。

14世紀後半以降の時期になると、地域間でその組成に異なりはあるが東国全域に瓦質土器の生産が開始され始める。東北では、資料の集積が十分でないこともあるが、概して他地域に比して在地系瓦質土器の発達の少なさを指摘できる。その器種は内耳鍋・片口鉢・播鉢・風炉・火鉢・茶釜などの器種である。

15世紀後半から16世紀にかけては、瓦質土器の組成の変化が出始める。例えば関東などでは、従来瓦質製品であったものが土師質化し始めるとともに、器種に淘汰が進み始めた。同時期東海では、土師器に新器種の出現などもある。

各時代とも、地域的に在地土器の発達に疎密が認められるが、これは広域流通品である陶器、または鉄製品、漆製品などが流通することにより、在地土器生産にも大きな影響を与えたと考える。一方、在地土器の解明が十分でない一面もある。

この在地土器生産も16世紀代に至ると、地域間格差を示しながら土製鍋の消滅に見られるように、次第に器種の淘汰が伺える。このことは土器生産のみならず、消費形態にも次第に変化が出始めたものと推測できる。

東海や畿内の土器生産における画期と比較したとき、生産のあり方、土器組成などの東国独

特のものを示すことができるが、ほぼその画期のあり方は同様な時期を設定できるものと考えた。そこには、東国の流通のあり方、生産構造のあり方等に畿内等とは異なるものを指摘できる点もあり、また、東海諸窯の生産動向は在地土器の生産に多大な影響を与えたものと評価できる。このような点に留意しながら東国の在地土器について説明を加えたい。

註

- (1) 神奈川考古同人会 シンポジウム「古代末期～中世における在地系土器の諸問題」『神奈川考古第21号』 1986
- (2) 中世土器研究会では第6・7回の研究会で、全国の在地土器について検討が行われその成果は、中近世土器の基礎研究Ⅳ・Ⅴ(1988・1989)に詳しい。
また、菅原正明氏の研究により、西日本の広域的な比較検討がある。
菅原正明 「西日本における瓦器生産の展開」『国立歴史民俗博物館研究報告』 第19集 1989
- (3) 植崎彰一編 『日本の陶磁第3巻』 1974
- (4) 橋本久和 「中世成立期の土器様相」『日本史研究』330 1990
宇野隆夫 「後半期の須恵器」『史林』第67巻第6号 1984
鋤柄俊夫 「畿内における古代末から中世の土器」『中近世土器の基礎研究』Ⅳ 1988
菅原正明 「西日本における瓦器生産の展開」『国立歴史民俗博物館研究報告』第19集 1989
- (5) 吉岡康暢 「中世陶器の生産と流通」『考古学研究』第27巻第4号 1981
吉岡康暢 「中世陶器の生産と流通(2)」『考古学研究』第28巻第2号 1981
- (6) 藤沢良祐 「古瀬戸中期様式の成立過程」『東洋陶磁』8 1980
- (7) 前掲註2 菅原論文
- (8) 吉岡康暢 「15・16世紀の窯業生産」『東日本における中世窯業の基礎的研究』 1989
- (9) 井上喜久男 「美濃陶磁研究の現状」『月刊考古学ジャーナル』297号 1988
- (10) 荻野繁春 「摺鉢から見た中世の生産と流通について―西日本を中心に―」『国立福井工業高等専門学校紀要』20 1986
荻野繁春 「『財産目録』に顔を出さない焼物」『国立歴史民俗博物館研究報告』第25集 1990

Ⅱ 供膳具について

東国の古代から中世に移行する段階で、西国とりわけ京都を中心とした畿内と大きく異なる点は、供膳具の中で碗形態が欠落することである。古代末期に各地で多少の相違を示しながら、11世紀後半から12世紀前半には、東国から土器製の碗形態は姿を消していく。そして、近世まで東国では供膳形態の中に在地産の土器製の碗形態は基本的に確認されなくなる。

但し、近世にまで土師器の皿形態のみは連面と継続する。とりわけ、東国の中世社会の成立を考える上で、京都系の手づくね土師器の存在が極めて重要な役割を担ったものと考えられる。そして、非ロクロ土師器とともにロクロ土師器の存在も東国の大きな特徴の一つと言える。この非ロクロ土師器の出現する12世紀中頃から12世紀後半が、従来の古代的な土器のあり方から大きく脱却した段階と指摘できる。

1 古代末期の土器

最近の東日本の古代末期の土器研究から、幾つか問題点を取上げたい。

須恵器が10世紀後半もしくは11世紀前半に消滅して、その後、ロクロ土師器を主体とした土器構成となっていくわけであるが、様々な工人が想定される土器組成が成立する。その中で、福田健司氏は以前から「須恵器系土師質土器」なる土器の定義を主張されてきた。⁽¹⁾ 11世紀代における氏の主張する「須恵器系土師質土器」は、8世紀以来須恵器を模倣する土師器を指しており、それが11世紀に入り須恵器消滅以降、木器・灰釉陶器・緑釉陶器碗等を模倣した器形に転換し始めると述べており、その終焉では山茶碗に集約されると言う。山茶碗に集約されると言う意見には同意できないが、多器種模倣の動向は従来にない生産動向と指摘できる。基本的には東国の中世土器生産を特徴づける大きな要素かもしれない。

笹生氏は、土器自体の変化もさることながら、11世紀中頃が制度史的な相違から後期王朝国家体制の成立期であるとされることから、この時期を中世的な土器様相の確立期とすべきと述べている。⁽²⁾ その中で11世紀中頃の土器の名称は土師質土器との名称が妥当と考えている。東国と言う地域性と、制度的差が果して土器生産に明確に反映されるものか疑問が残るし、この11世紀中頃から以前の同種の土器をロクロ土師器と呼び、その後の土器を土師質土器と呼ぶことは土器生産のあり方を無視するものであり賛成しかねる。

群馬県においても大江正行氏の研究以来、⁽³⁾ 一貫して土師質土器とするロクロ土師器の存在が11世紀以降ある。一方、東北においてはF群土器とする古代後半の一群の土器があるが、⁽⁴⁾ 関東の同種の土器と思うと著しく年代的開きがあり、編年的な操作の必要性があるようだ。

このように様々な名称があるが、いずれにしても、11世紀代に古代的土器様相に変化が認められることは多くの研究者の共通する点である。ここでは、主に12世紀以降を問題にすることから、京都系の手づくねの土師器を便宜的に非ロクロ土師器と呼び、回転を加えて器面の成形を行っているものをロクロ土師器とした。⁽⁵⁾ 土器の成立過程には単純な模倣だけでは語れない面もあり、一概にその名称に固守すると本質的なものが見失われる心配もある。

さて、このようなロクロ土師器を主体とする供膳具は東国の大半の地域で11世紀後半に姿を消してしまい、12世紀中頃に突然非ロクロ土師器の製品とともに再登場するが、一般的には11世紀段階のロクロ土師器と同一系譜の上にあるものと考えられている。そして現在のところ12世紀前半代に空白が生ずるところが多く、確実にその系譜が辿れる地域を見出すことができないのが、研究の現状である。この非ロクロ土師器の出現期を中心に、それ以降、16世紀までの土師器の供膳具についての各地の状況を述べてみる。

2 各地の供膳具について

(1) 東北地方

11世紀後半段階以降には供膳具が欠落する事が確認される。最近、青森県内の遺跡に於て木
地製品の未完成品と思われる遺物が検出された例があり、そのような状況から、須恵器消滅後、
次第に土器製の供膳形態は消滅して行くと言う⁽⁶⁾。このような状況は中世に至っても一時期を除
き継続して行き、東北北部の中世土器は、供膳形態がないとする考えが定着している⁽⁷⁾。

12世紀前半から12世紀後半に継続的に存在した遺跡として、蓬田大館等の遺跡がある⁽⁸⁾。この
遺跡では、12世紀中頃以降の非ロクロ土師器の検出が確認されている。その他、浪岡城、矢館
廃寺⁽¹⁰⁾、中崎館⁽¹¹⁾などの遺跡が確認されている。非ロクロ土師器製品については大形のものが口径
15cm前後、小形のものが10cm前後であった。それにロクロ土師器のものが加わる。ロクロ土
師器は大形製品が口径15cm前後、小形のものが7～10cmほどの法量であった。非ロクロ土師
器のものは京都のものと形態、整形とも12世紀段階に位置づけられるものに近似することから、
この年代が与えられている。

土師器以外の供膳具には、例えば中崎館遺跡では12世紀中葉から13世紀前半にかけて存続し
たと推測される館跡で、出土遺物は貿易陶磁（白磁Ⅲ類、同安系碗など）、国産陶器（珠洲、渥
美）、土師器類がある。供膳具は土師器以外は中国陶磁のみである。

この地域の特徴として最も顕著なことは、13世紀以降の遺跡における土器組成である。遺跡
としては尻八館⁽¹²⁾、境関館⁽¹³⁾、根城⁽¹⁴⁾などが14世紀から16世紀段階に存続しており、供膳具として国
産陶器、中国陶磁等の検出は認められるが、非ロクロ土師器、ロクロ土師器を問わず、土師器
製品の検出例はほとんど認められない。

東北南部においては、比較的関東に類似した状況を指摘できる。非ロクロ土師器が主体的に
搬入されるのは12世紀中頃を中心とする段階である。主な遺跡としては平泉柳之御所・毛越寺⁽¹⁵⁾
などでまとまりをもって出土している。藤原清衡が平泉に進出したのは12世紀前半のこととさ
れ、遺物の中には12世紀前半と推測されるロクロ土師器の小皿、柱状高台製品も含まれている
が、現在調査中であり、今後詳細な分析がなされるであろう⁽¹⁶⁾。しかし、大方の地域では12世紀
の遺跡の検出自体が少ないことも考慮する必要があるが、基本的に12世紀前半に非ロクロ土師
器・ロクロ土師器の製品は見出せない⁽¹⁷⁾。福島⁽¹⁸⁾の桜木遺跡、白水阿弥陀堂、御前清水遺跡等では
ロクロ土師器製品を主体としており、その中には高台を有する碗や柱状高台などがあり、11世
紀末から12世紀後半にかけての時期と把握がなされているが、量的にも少なく、資料の分化が
十分になされていない⁽²⁰⁾。

13世紀になると非ロクロ土師器の出土量が目立ってくる。福島県郡山市周辺⁽²¹⁾、多賀城周辺⁽²²⁾
の遺跡で非ロクロ土師器を出土する遺跡が多く確認されている。合わせてそれらの遺跡ではロク

ロ土師器も存在する。非ロクロ土師器は14世紀初頭には姿を消して、ロクロ土師器のみが残る。しかし、このロクロ土師器についても、13世紀後半から15世紀中頃までの時期は比較的出土量が少ない事を指摘できる。

その後、15世紀後半から16世紀にかけての時期は、城館跡などからは比較的まとまった出土が確認されている。⁽²³⁾

(2) 関東地方（第1図）

関東においては、11世紀後半までの遺物は把握されているが、12世紀前半の土器については不明な点が多い。12世紀中頃以降に関しては、東京都多摩ニュータウンNo.692遺跡⁽²⁴⁾、神奈川県宮久保遺跡⁽²⁵⁾等の遺跡がある。無高台のロクロ土師器のみである。12世紀末になると非ロクロ土師器の製品が作られ始めるが、鎌倉の編年では13世紀にならないと非ロクロ土師器は出現しないとされている。13世紀になると各地で非ロクロ土師器の製品が確認され始める。当然ロクロ土師器の製品も共伴する場合が多い。鎌倉では13世紀後半には非ロクロ土師器は消滅するが⁽²⁶⁾、常陸等の非ロクロ土師器は形も鎌倉のものやや異なり、14世紀前半まで形骸化しながらも継続したものと推測される。14世紀の資料は東北南部また甲信地域を含めロクロ土師器の出土点数も少なく、今一つ形態の把握が難しい。15世紀中頃以降の城館跡の調査例が増えているが、これらの遺構からはロクロ土師器の皿の出土量が極めて高くなる。前代に比して、遺跡における組成比も増加するものと判断される。16世紀段階になると再び、京都系の非ロクロ土師器が小田原などの特定地域で検出されるが⁽²⁷⁾、これは極く一部の例で大半はロクロ土師器であり、その系譜は近世にまで継続する。

極めて大まかに関東の土師器の概観を行ったが、この土師器生産については、古代末期以来問題とされるところであるが、畿内の深草、楠葉などのようにある特定の生産地が想定できない。自立的手工業者としての発達が考えられる畿内とは異なり、生産集団の組織も未発達であったものと想定される。またその機能について、供膳具という極めて日常的な目的でなかったと判断したが、非日常的であるが故にその対応に地域間で日常的製品以上に変化が出てきたのではないか。それが、14世紀以降の東国の土師器生産の不連続性、地域差として現れたと推測されなくもない。これらの疑問を念頭に、ここでは武蔵を中心とした土器編年について見てみたい。

I 期（12世紀中頃）

12世紀中頃に位置づけられる資料は、宮久保遺跡⁽²⁸⁾、多摩ニュータウンNo.692遺跡等極く限られた資料が確認されているのみである。東北の各地ではすでに非ロクロ土師器の検出例があるがこの地域ではない。No.692遺跡の例を見るとすべてロクロ土師器で口径15cmの皿（碗）と口径8cm前後の小皿がある。高台を有する製品は全くない。古代の土器は11世紀末まで確認されているが、その土器と比較すると器壁が厚くなっていたり、また僅かではあったが前代には

高台を有した椀などの存在も確認されたものが、この時期には皆無となる。11世紀末から12世紀前半にかけての土器が不明な事から、その変遷を的確に追うことができない。

Ⅱ期（12世紀末～13世紀前半）

鎌倉では12世紀末から13世紀初頭までの時期には非ロクロ土師器は出土せず、13世紀前半から出土し始めると言う。その他の地域では多摩ニュータウン No.22・52⁽³⁰⁾ 遺跡などがあり、非ロクロ土師器とロクロ土師器によって構成されている。非ロクロ土師器は大形で口径13～14cm、小形で9cm前後である。ロクロ土師器製品は坏状のものと小皿が存在する。体部の形状はやや途中で縊れ内湾気味となる。小皿も体部途中で稜を有する。

北関東でも栃木県下古館遺跡⁽³¹⁾、茨城県門毛経塚⁽³²⁾、埼玉県河越館跡⁽³³⁾など幾つかの遺跡で非ロクロ土師器が検出されている。但し、ロクロ土師器の出土量は河越館跡などで幾らか検出されるが、あまり多く検出されていない。14世紀以降比較的資料を多く検出させる上野国でも、この時期の土師器の出土量は少なく、実態がわからない現状である。

Ⅲ期（13世紀後半～14世紀中頃）

東京都多摩ニュータウン No.91⁽³⁴⁾ 遺跡、茨城県屋代 B 遺跡⁽³⁵⁾、埼玉県大蔵館跡⁽³⁶⁾などの資料があげられる。屋代 B 遺跡の資料は13世紀後半を主体とし、14世紀にはさほど食込まない時期と想定される。

屋代 B 遺跡で竪穴状遺構から一括して非ロクロ土師器のみが検出していた。大小二形態の坏状の製品で底部は両者とも丸みの強い形状で、口縁部は横ナデにより尖りぎみに作られている。大蔵館跡の資料はロクロ土師器製品のみの大小の皿が土壌と井戸跡から一括検出されており、その形状は底形は比較的大きく、体部はやや内湾ぎみに立上がっている。屋代 B 遺跡とは対象的な遺跡であり、伴した常滑の甕の破片から14世紀前半代のものと推測される。両者とも年代の決め手が十分といえず、今後、さらに検討を加える必要がある。

少なくとも13世紀の後半段階で鎌倉、武蔵などの地域では非ロクロ土師器の製品は消滅するものとする。しかし、常陸や下野では鎌倉などの最終段階の製品に比較して、作りも歪なものなどがあり、14世紀段階まで継続する可能性が在るように思われる。

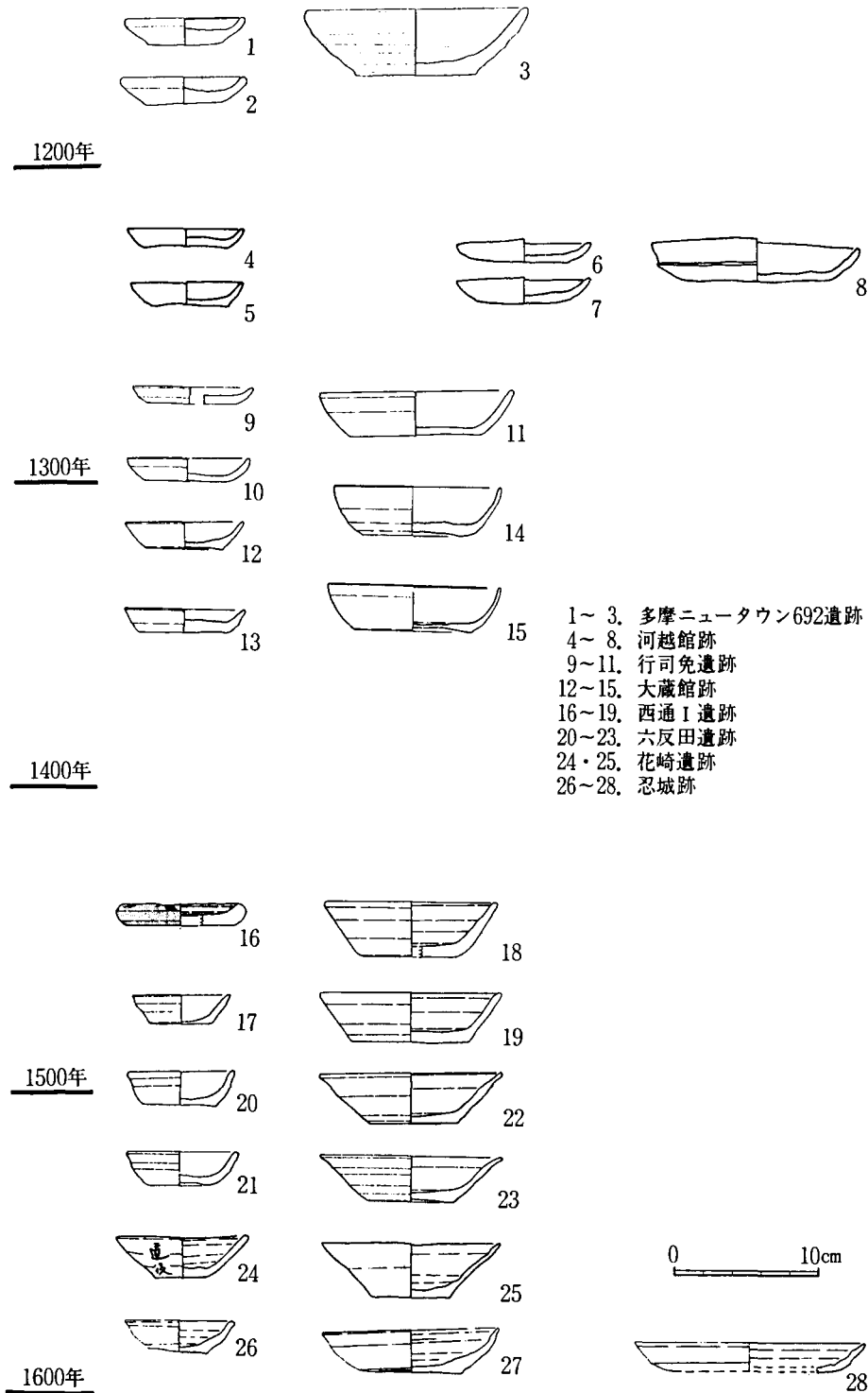
屋代 B 遺跡、大蔵館跡などのように一箇所に大量投棄された状態のものもあるが、概して集落跡と思われる遺跡からの出土量は少ないと判断される。

Ⅳ期（14世紀後半～15世紀前半）

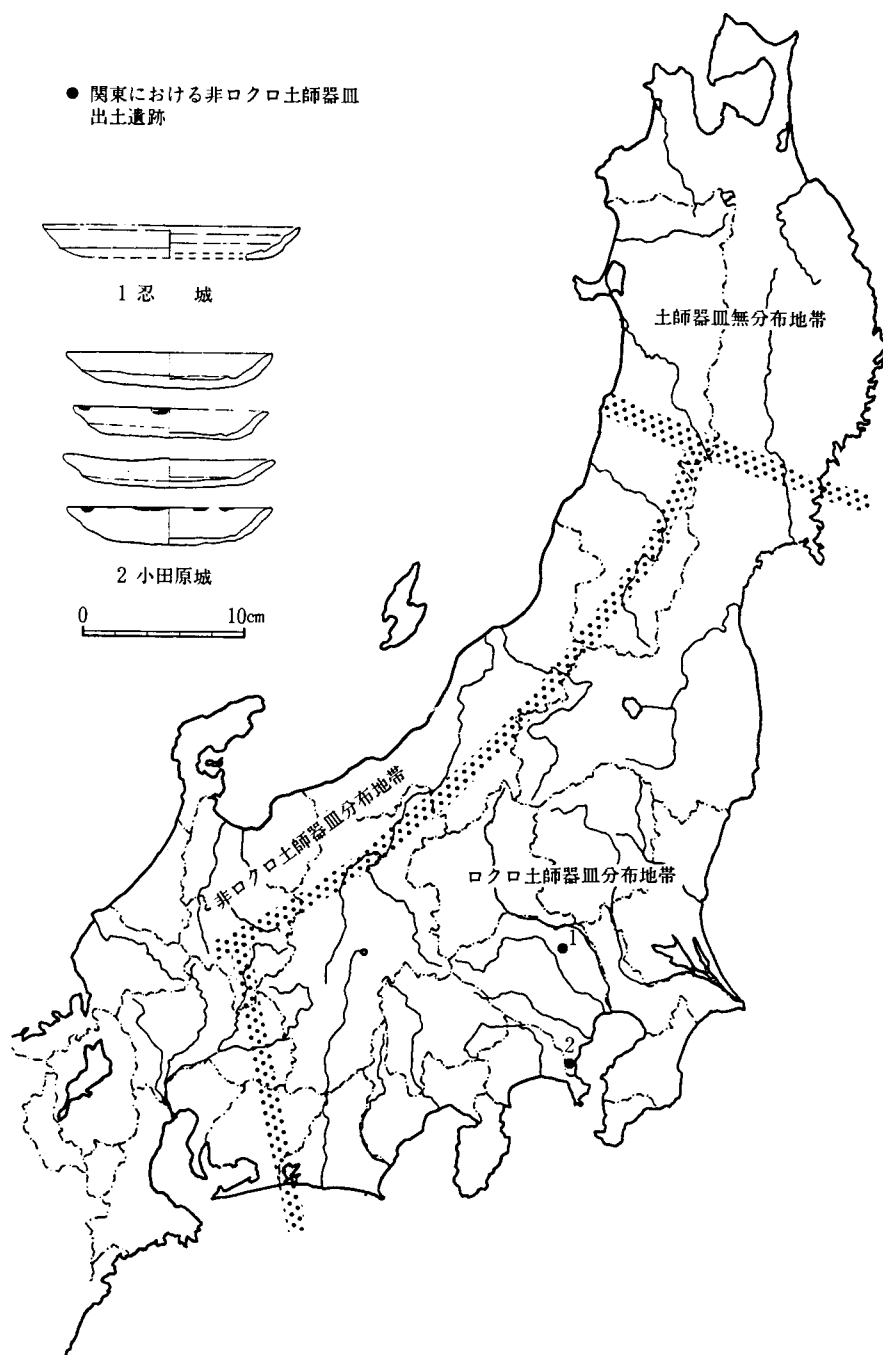
遺跡としては群馬県国分寺・国分尼寺中間遺跡⁽³⁷⁾、下古館遺跡⁽³⁸⁾、埼玉県皂樹原・檜下遺跡⁽³⁹⁾等がある。南武蔵では、多摩ニュータウン No.796・513⁽⁴⁰⁾ 遺跡等などで重複遺跡だが該期のものを出土させる。まとまった遺物を検出させる遺跡は少なく、いずれも僅かな出土量である。

非ロクロ土師器は全くなく、ロクロ土師器のみである。

Ⅴ期（15世紀中頃～16世紀前半）



第1図 武蔵国における土師器皿の編年（拠註49文献）



第2図 16世紀の土師器皿の分布

この時期から次期にかけての遺跡は極めて多く、相模から武蔵にかけては後北条氏などに関わる城跡の調査が多く、各遺跡とも比較的まとまった出土状態を示す。前代に比して、土師器皿の出土量が増加する傾向にあるようだ。

前代に比して体部が次第に直線的になる傾向にある。法量は大きなもので15cm前後のものが多く、地域的差もあるが、体部から底部にかけての器壁が厚く、ロクロ目を顕著に残すものが目立つ。

北関東などにおいてはこの時期の後半には、8cm前後の小皿、15cm前後の中皿、20cmを越える大皿なども見受けられた。体部が直線的に外反するものが多い。器壁も比較的薄い作りに成っていく。

VI期（16世紀中頃以降）（第2図）

前代から継続的に形成される遺跡が多い⁽⁴¹⁾。土師器は小田原や後北条氏に関連した埼玉県忍城⁽⁴²⁾などで、非ロクロ土師器の出土が確認されたが、大半はロクロ土師器である。⁽⁴³⁾

口径13cm前後の坏状のもの、口径7cm前後の皿などがある。体部が直線的に外反する坏、体部がやや丸みをもつ皿などが見られる。体部に漢数字を記したものが各地で認められる。⁽⁴⁴⁾

(3) 鎌倉

鎌倉の資料は12世紀から14世紀までは豊富にあることから、詳細な編年操作が行われている。⁽⁴⁵⁾服部氏の編年を参考に要約してみたい。

I期 ロクロ土師器を主体とした構成である。大小の碗、皿類によって構成されるものと推測されるが、資料が十分でなく明確さに欠ける。器種の系譜を考えると、古代以来のロクロ土師器の系譜下にあるものと推測されている。非ロクロ土師器が検出されていないことも、考えてみれば不思議な話である。東北等では12世紀後半にはすでにほとんどの地域で受入れているのであるから、鎌倉においても今後の資料の増加で、編年に変化がある可能性が強い。12世紀末から13世紀初頭の年代を与えている。

II期 小皿と無高台の碗形からなる。製作技法から二群に分けられる。非ロクロ土師器の中には口径15cm前後で外面の稜が明瞭なものも見られ、年代的にやや古い感じのものも認められる。13世紀前葉の年代を与えている。

III期 非ロクロ土師器は丸底の占める割合が増加し、全体に器壁が肥厚し始める。口縁部に縁帯状の沈線を有していたものは次第に消え、丸みのあるものとなっていく。ロクロ土師器についても器壁の肥厚が指摘でき、焼もやや甘くなる。13世紀中葉から13世紀後半に位置づけられる。

IV期 顕著な特徴として非ロクロ土師器製品が姿を消すことである。ロクロ土師器は厚手でやや浅いものが主体となる。底径は前代より小さめとなり、口径は大皿が13cm、小皿が8cmあたりにまとまる。13世紀後半から14世紀前半に位置づけられる。

V期 器壁が前代に比して薄手となる。口径と底径の差が大きく器高比率の高い器形が主体となる。大皿が口径 13cm 前後、中型の皿が 8 cm 前後、小皿が 6 cm 前後のものである。前代にはあまり見られない口縁部を内側に短く折れ曲らせる小皿製品が増加する。14世紀中葉から15世紀前半の時期を与えている。

鎌倉において、この土師器はおびたしい量が消費されたものと推測されている。そして、その生産については解明されていないが、都市近郊に形成されたものと推測される。非ロクロ土師器の生産には畿内の工人の導入も考えられ、その段階はまさに頼朝入府の12世紀末以降のことであり土器の年代とも比較的合うわけで、極めて政治的な転換とともに非ロクロ土師器の生産が始まったものと考えている。

このような導入を考えるならば、これらの工人もある程度の組織性が想定でき、畿内的な座組織も想定される。しかし、後にも述べるが、土器の性格と、支配層に対する隷属的關係も想定でき、鎌倉政権の末期には解体の方向へと向かう。在来の古代のロクロ土師器からの系譜と考えたロクロ土師器皿も、この地では爆発的な生産を行っており、古代末とは明らかに異なる生産体制をそこに見出すことができる。

(4) 甲 信 地 方

信濃では最近の吉田川西遺跡を始めとした松本平の⁽⁴⁶⁾遺跡で、12世紀代と把握される遺物が確認されている。その土器は黒色土器の碗、ロクロ土師器の碗・皿、足高の碗（盤）などが前代から継続して存在する。基本的にはこれらの遺物は12世紀前半を主体としており、12世紀後半になると、その実態は把握しにくくなる。しかし、12世紀前半に土器が少なからず把握できる⁽⁴⁷⁾点で、関東などの土器様相と異なりがある

この信濃でも12世紀後半になると非ロクロ土師器の分布が顕著になり始め13世紀後半まで資料把握ができる。松本平における集落的な遺跡では、主にこの非ロクロ土師器を主体として、⁽⁴⁸⁾逆にロクロ土師器製品の出土が極めて稀な出土状況である。この点は北関東の13世紀代の遺跡とも類似する点である。⁽⁴⁹⁾諏訪湖周辺の磯並遺跡、⁽⁵⁰⁾御社宮司遺跡、⁽⁵¹⁾御射山などの遺跡では、大量の非ロクロ土師器、ロクロ土師器の出土が確認されており、遺跡の性格は単純な集落等ではないことは既に知られている。

14世紀になると、松本平周辺の遺跡でも非ロクロ土師器は姿を消し、ロクロ土師器も極めて不明確になってくる。さらに、15世紀後半から16世紀にかけてはロクロ土師器が多くの城館跡⁽⁵³⁾から検出されている。

隣接する甲斐でも非ロクロ土師器の製品を検出する小瀬氏館跡⁽⁵⁴⁾がある。年代は13世紀中葉から13世紀後半にかけての時期が想定されている。

その後、14、15世紀段階は信濃同様に土師器製品の状況が把握しにくい。15世紀後半から16世紀にかけての勝沼館跡⁽⁵⁵⁾、岩崎館跡⁽⁵⁶⁾などではおびたしいロクロ土師器皿の出土が確認されて

いる。

(5) 東海地方

朝日西遺跡などの調査の進展に伴い次第にこの地域の土師器の様相がわかり始めた。⁽⁵⁷⁾

この地域の土器研究は、須恵器、灰釉陶器生産、中世に致っては古瀬戸、常滑等の陶器生産に極めて見るものが多いが、そのような陶器生産研究の中で土師器研究は忘れられてしまった傾向がある。このことは現在も指摘できる。

最近の研究としては、佐藤公保氏の土師器研究がある。ここでの氏の研究成果は、尾張を11世紀後半から17世紀前半まで10期に分けて編年を行なっている。⁽⁵⁸⁾

佐藤氏の編年は次のようである。

I 期 ロクロ土師器のみしか見られない時期（11世紀後半～12世紀前半）

II 1 期 ロクロ土師器に非ロクロ土師器が混在する段階（12世紀後半代）

II 2 期 ロクロ土師器が消滅し、非ロクロ土師器の組成が完成する段階（13世紀前半～中葉）

II 3 期 非ロクロ土師器の皿は口径 12cm 前後のものへと縮小する。（13世紀後半～14世紀初頭）

III 期 非ロクロ土師器で構成されるが口径に対して器高の高い製品が加わってくる。（14世紀中葉）

IV 1 期 この時期は再度ロクロ土師器の出現が認められる段階である。非ロクロ土師器は白色系土師器皿（白かわらけ）、非ロクロ土師器小形皿が認められる。（15世紀後半）

IV 2 期 ロクロ土師器皿が主体を占める段階で、大中小の器形の細分化も認められる。体部の立上がりは比較的直線的である。この傾向は遠江、関東などのロクロ土師器製品と極めて類似する。（16世紀前半～後半）

IV 3 期 前代に比して、大形製品の減少が認められる。（17世紀初頭）

12世紀前半においてはロクロ土師器を主体とし、12世紀中頃から非ロクロ土師器の分布が広がる点では、東国の各地と同様な変化を示している。但し、ロクロ土師器は12世紀後半以降激減する。この地域が京都に地理的に近いため、当然中世全般を通じて、非ロクロ土師器が主体的役割を担っている。そして、15世紀後半に再びロクロ土師器の出現と隆盛を見る。

この地域では中世全搬にわたって供膳具を土師器製品に求める必然性は全くない地域であることは説明するまでもない。それでも土師器が存在する理由は、土師器を日用品と単純に把握することができない事を意味するのではないか。また、13世紀後半に位置づけられる三好町のK-G-87号とされる窯から、土師器皿が検出された例が報告されている。⁽⁵⁹⁾ この窯から、非ロクロ土師器、ロクロ土師器が100個体ほど出土したもので、土師器が白色を呈するものが多いことから、京都の「白かわらけ」を意識したもので、非日常的な役割のために焼成したものと推測されている。また、大窯の窯からも土師器が同時に焼成された例もあり、陶器生産の窯であ

えて土師器を作ることは、当然理由があつてのことである。供膳具を、明らかに他の陶器に求められることのできるこの地域であればこそ、一層、土師器は非日常的役割として位置づけられるものであり、その生産を陶器工人が担っていたと推測される。

3 非ロクロ土師器の分布（第3・4図，第1表）

第3図は東日本の太平洋側を中心とし12世紀から14世紀前半に掛けての非ロクロ土師器の分布を示したものである。日本海側においてはこの時期は、ほぼ山形辺りまで、非ロクロ土師器を主体とする文化圏である。

さて、分布のあり方から先ず述べたい。比較的遺跡に集中する箇所があることを指摘できる。北から見てみると、現在の青森県、青森・弘前周辺の地域で、遺跡としては浪岡城・中崎館・蓬田大館遺跡などで一つ一つの遺跡での出土量はさほど多くないことが指摘できる。次は岩手県平泉から紫波町に至る周辺の遺跡である。遺跡としては平泉の毛越寺・柳之御所など藤原氏に関わる遺跡で、平泉のみならず、紫波町周辺にはここに示した以上に多くの遺跡が調査されているようである。次は多賀城周辺である。新田遺跡を初めとした幾つかの遺跡があるが、古代の多賀城以来この周辺が中心的役割を担った地域であることに変わりはない。

福島県では郡山周辺に多くの遺跡が確認されている。正直⁽⁶¹⁾B遺跡・荒小路遺跡等がある。この周辺は中世在地領主の田村氏が勢力を持っていた地域である。同じ福島の会津では新宮城跡⁽⁶²⁾がある。この遺跡に関しては既に藤原氏により詳細な分析がなされており、新宮氏との関わりが力説されている。次いで関東であるが、関東では常陸の筑波から下野の南部にかけて遺跡⁽⁶³⁾の分布が多い。

古代以来の豪族勢力の存在、また香取社などの存在が大きかったと考えられ、今後さらにこの周辺での出土遺跡が増大することが考えられる。12世紀後半から13世紀前半にかけての資料に加えて、13世紀後半から14世紀前半と推測されるものもある。比較的新しいものとしては屋代B遺跡のように竪穴状遺構からの出土もあり、非ロクロ土師器の性格を考える上で良好な資料である。この地域で少し気になる遺跡として日光男体山⁽⁶⁴⁾がある。資料を実見していないため確証のあることは言えないのだが、この遺跡では、12世紀の渥美・常滑等の製品も多量に出土していることから、非ロクロ土師器の出土もあって不思議ではないが、報告書には僅かであるが12世紀代と思われるロクロ土師器の皿があるのみである。南関東では多摩ニュータウンの幾つかの遺跡から検出されている。どの遺跡もまとまった出土量を持っていない⁽⁶⁵⁾、12世紀以来寺院の形成があつたり、領主層の館跡等の存在も指摘されている地域である。鎌倉に関しては、あえて言うまでもないが、13世紀から13世紀後半に至る時期に広く使用されていたことが遺跡からわかっている。しかし、編年で12世紀に非ろくろ土師器が遡らないで、14世紀に下らないと言う編年が一般的になっているが、今後、検討を加える必要がある。

甲信地域については、すでに多くの人に取上げられているが、諏訪湖周辺の遺跡が注目される。旧御射山遺跡・磯並遺跡などいずれも諏訪大社に関わる祭祀遺跡と考えられており、出土量は各遺跡とも大量に出土する場合が多い。松本市周辺の各遺跡は少量ずつの検出状況であり、諏訪湖周辺との性格の異なりを示しているようである。

愛知県を中心とした東海地方については、分布図に示さなかったが、朝日西遺跡⁽⁶⁷⁾を始め幾つかの遺跡で検出されている。京都との位置関係を考えれば多くの遺跡が今後確認されることが想定される。

以上東国で管見に触れた12～13世紀の非ロクロ土師器分布について触れてみたが、集中分布地が諏訪大社などの有力寺社勢力、また平泉のような領主勢力の拠点を中心とした地域にあることは誰もが感ずるであろう。

ロクロ土師器の分布は、基本的に東国全域から出土が確認されている。量的に非ロクロ土師器の製品より多くの遺跡で確認されているようだが、非ロクロ土師器の検出されている遺跡では大抵共伴するようである。しかし、北関東の遺跡ではロクロ土師器の製品は13世紀代ではあまり多く確認がなされていない。屋代B遺跡のように、非ロクロ土師器の製品がかなりまとまって検出されたが、ロクロ土師器はまったくなかった例もある。

生産跡としては、福島⁽⁶⁸⁾の馬場中路遺跡、宮城⁽⁶⁹⁾の名生館遺跡で土器焼成遺構が確認されているが、両者とも非ロクロ土師器の製品のみを焼成している。ロクロ土師器の生産跡は確実なものは東国では確認されてない。このような点などからして、両者に生産工人の異なりがある可能性もある。

4 その他の食器について

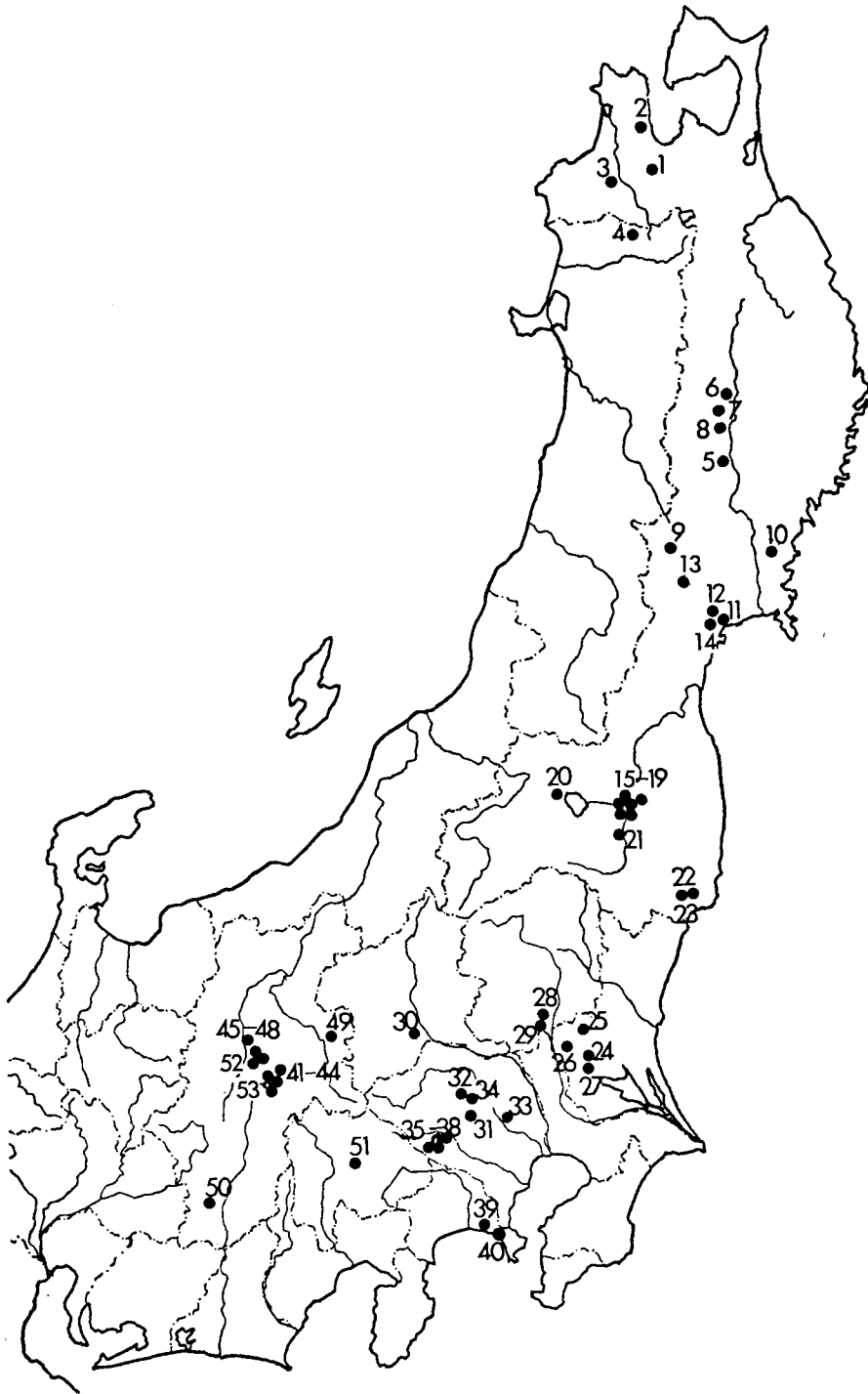
漆 器

古代以来、漆碗などの木製品が大きな役割を担ってきたことは想像に難くない。発掘調査で得られる容器はその大半が土器陶磁器類である。これは残存率が高い結果にもよるであろう。木質部などは当然朽ちて残らない可能性が強いだろう。そのような状況が、結果として木製品は遺物として少ないと認識されてしまったのであろう。

しかし、最近、従来の台地中心の調査から、低湿地の調査が多く行なわれるに致って、極めて保存状況の良い木製品が検出され始めている。

鎌倉では継続的に調査がなされていることから、既にかかなりの木製品が検出されている。東北でも平泉⁽⁷⁰⁾、浪岡城⁽⁷¹⁾、新田遺跡等のように継続的に調査の行なわれている遺跡では井戸、堀などの湿地状態の遺構などを中心に多くの木製品の遺物が発見されている。

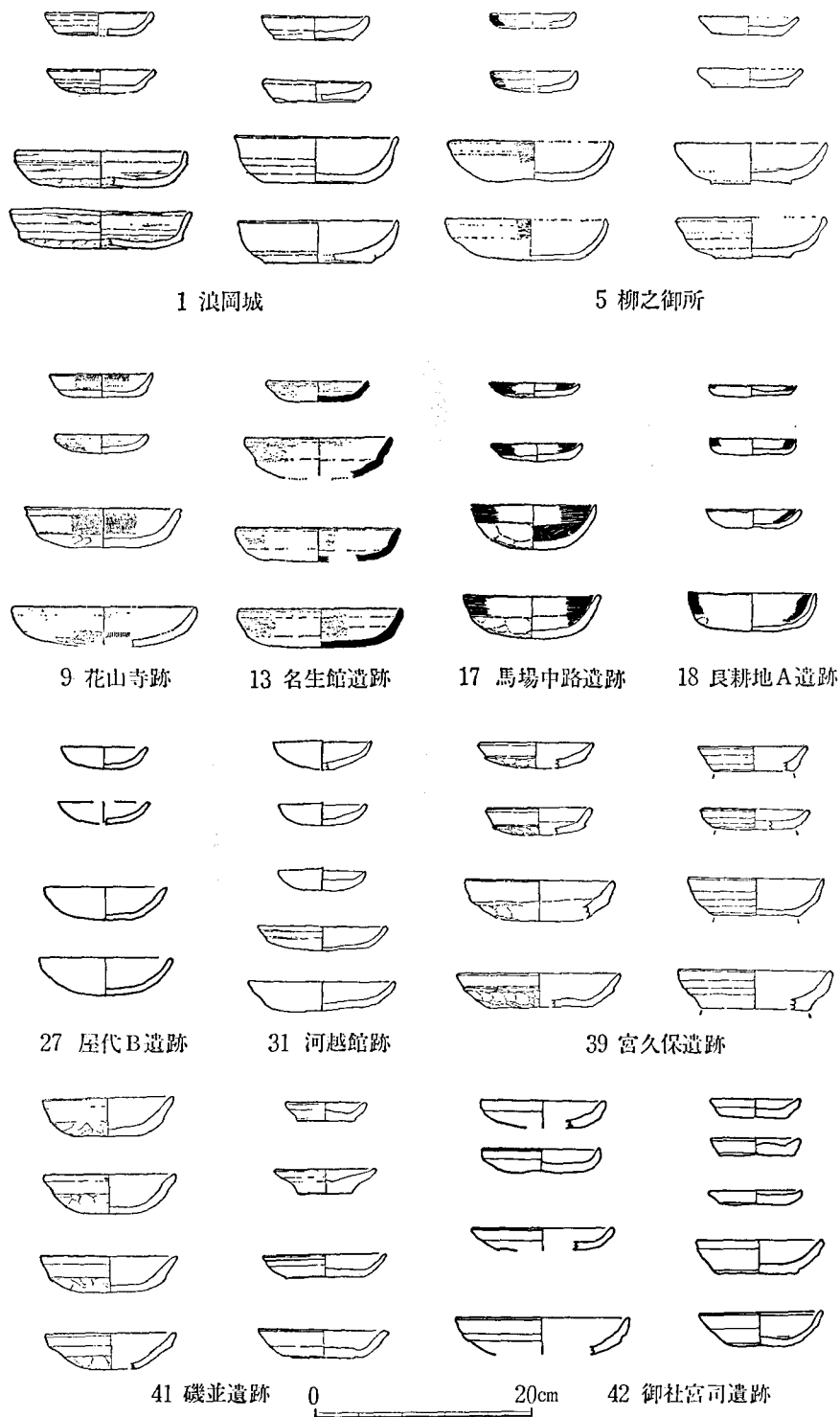
四柳嘉章氏⁽⁷²⁾や、中井さやか氏⁽⁷³⁾による漆に関わる研究がある。四柳氏は西川島遺跡⁽⁷⁴⁾を中心にして能登の漆製品の編年を行なっている。ここではその編年の要約を見てみたい。



第3図 東国における非ロクロ土師器皿の分布

第1表 東国における非ろくろ土師器出土遺跡一覧表

No.	遺 跡 名	住 所	備 考 (文 献 他)
1	浪岡城	青森県浪岡町	浪岡城跡X (1989)
2	蓬田大館遺跡	青森県蓬田村	蓬田大館遺跡 (1987)
3	中崎館遺跡	青森県弘前市	中崎館遺跡 (1989)
4	矢立廃寺	秋田県大館市	掘註10
5	柳之御所他	岩手県平泉町	毛越寺, 柳之御所ほか
6	比爪館跡	岩手県紫波町	比爪館跡発掘調査報告書 (1966)
7	大日堂遺跡	岩手県紫波町	東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書 (1980)
8	玉貫遺跡	岩手県水沢市	玉貫遺跡 (1981)
9	花山寺跡	宮城県花山村	宮城県文化財調査報告書第137集 (1990)
10	寂光寺跡	宮城県歌津町	宮城県文化財調査報告書第135集 (1990)
11	新田遺跡	宮城県多賀城市	筆者実見
12	多賀城跡	宮城県多賀城市	宮城県多賀城跡調査研究所年報 (1987)
13	名生館遺跡	宮城県古川市	多賀城県連遺跡発掘調査報告書第9冊 (1984)
14	南小泉遺跡	宮城県仙台市	筆者実見
15	正直B遺跡	福島県郡山市	母畑地区遺跡分布調査報告Ⅸ (1985)
16	荒小路遺跡	福島県郡山市	母畑地区遺跡発掘調査報告19 (1985)
17	馬場中路遺跡	福島県郡山市	郡山東部Ⅲ (1983)
18	長耕地A遺跡	福島県郡山市	郡山東部Ⅴ (1985)
19	宮耕地遺跡	福島県郡山市	郡山東部Ⅴ (1985)
20	新宮城遺跡	福島県喜多方市	新宮城跡 (1974)
21	地藏田B遺跡	福島県須賀川市	母畑地区遺跡発掘調査報告11 (1983)
22	岸遺跡	福島県いわき市	いわき市埋蔵文化財発掘調査報告第27冊 (1990)
23	番匠遺跡	福島県いわき市	中山氏より御教示を受ける。
24	日向遺跡	茨城県筑波町	日向遺跡 (1981)
25	門毛経塚	茨城県岩瀬町	門毛経塚遺物と中世陶器 (1985)
26	堀ノ内遺跡	茨城県明野町	実見
27	屋代B遺跡	茨城県竜ヶ崎市	屋代B遺跡Ⅱ (1987)
28	下古館遺跡	栃木県南河内町	自治医科大学周辺地区 (1987)
29	小山城	栃木県小山市	実見
30	大御堂遺跡	群馬県富岡市	実見
31	川越館跡	埼玉県川越市	河越氏館跡発掘調査報告 (1976)
32	山王遺跡	埼玉県嵐山町	実見
33	大久保領家	埼玉県浦和市	実見
34	代正寺遺跡	埼玉県東松山市	実見
35	多摩ニュータウンNo.22	東京都多摩市	東京都埋蔵文化財センター研究論集 (1987)
36	多摩ニュータウンNo.513	東京都多摩市	〃
37	多摩ニュータウンNo.91	東京都多摩市	〃
38	多摩ニュータウンNo.799	東京都多摩市	〃
39	宮久保遺跡	神奈川県綾瀬市	神奈川県埋蔵文化財センター調査報告 (1988)
40	鎌倉市内遺跡	神奈川県鎌倉市	鎌倉市内ではほとんどの遺跡で検出する。
41	磯並遺跡	長野県茅野市	磯並遺跡 (1987)
42	御社宮司遺跡	長野県茅野市	長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告 (1975)
43	旧御射山遺跡	長野県茅野市	長野県霧ヶ峰旧御射山祭祀遺跡調査概報 (1960)
44	十二ノ后遺跡	長野県諏訪市	長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告 (1975)
45	南栗遺跡	長野県松本市	長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書4 (1990)
46	北栗遺跡	長野県松本市	〃
47	中二子遺跡	長野県松本市	〃
48	北方遺跡	長野県松本市	〃
49	古屋敷遺跡	長野県東部町	不動坂遺跡群Ⅱ・古屋敷遺跡群Ⅱ (1986)
50	恒川遺跡	長野県飯田市	
51	小瀬氏館跡	山梨県甲府市	山梨考古学論集Ⅱ (1989)
52	吉田川西遺跡	長野県塩尻市	長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書3 (1989)
53	山寺廃寺	長野県大町市	長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書4 (1990)



第4図 各地の中世前期の土師器（数字は第1表に対応）

第Ⅰ期（12世紀代） 椀は身が浅く、かつ口縁部の開きが大きい。高台の器壁は厚く、畳付の削りは浅い。漆絵は認められない。

第Ⅱ期（12世紀末から13世紀前半代） 器種構成は椀と皿である。椀はⅠ期より身が深くなり、立上がりも急となる。また簡素であるが力強い筆致の朱漆絵を有することである。小皿は土師器と共通した器形をとるものもあるが、次第に定型化に向かいつつある。

第Ⅱ期一後期（13世紀後半） この時代は土器の組成に変化が見られ漆の同器形との関係を考えてみる必要がある。例えば、この段階は西川島遺跡では、中世土師器の椀形態が認められなくなる。この傾向は出土量からみても白磁、青磁碗の普及によるものとも思えず、漆椀の普及、特に渋下地の安価な商品の相当量の流通を考えなければ理解しがたい現象と言えるのでないか。

法然上人絵伝などに見られる「汁物には漆椀、飯には土師器皿」の配膳形態が定着しつつあったのであろう。こうした社会現象を生みだした契機は、味噌汁、豆腐等の調理法の地方普及にあったと思われ、これに連動してか中世能登の代表産業珠洲焼も挿鉢の量産化を始めている。汁物容器としての土師器椀は、耐水性一つを取上げても漆椀の比ではなく、漆器登場の舞台は着々と準備されつつあると四柳氏は述べている。

13世紀後半の漆椀と土師器椀との関係について、椀容器の素材に変化が全国的に認められるか否かは明確ではないが、東日本ではこの時期に非クロロ土師器製品はほとんど姿を消し、さらに東北北部においては供膳形態自体が極めて希薄な状況になってくる段階でもある。

第Ⅲ期（14世紀） 器種構成は椀と小皿。該期には漆器のセットが出揃い、定型化が行なわれたと見られる。

第Ⅳ期（15世紀前半） 瀬戸産の椀、皿類がかつてなく多量に流通した画期であり、漆器にとっては市場が狭められた時代と推定している。

第Ⅴ期（15世紀後半） この段階は瀬戸製品の流入も緩やかとなり、渋下地の安価な漆器が最も多量に普及する。そして賑やかなまでに朱漆絵が流行し、朱塗りの物も見られるなど、黒色から赤色へと色彩感覚の大転換が行なわれた時代でもある。椀には大小二種類と蓋も認められる。

四柳氏の能登を中心とした漆の編年を見たが、基本的にこの変化は汎日本的な変化として把握できないだろうか。漆の生産は木地師との関係が密と思われるが、中世段階には既に全国的に徘徊し、組織的なまとまりが想定され、広域的な製品の流通圏が想定される⁽⁷⁵⁾。そのことは、製品の地域的相違の少なさとして現れるのではなかろうか。

東国、とりわけ関東周辺で漆製品が各地で検出され始めるのは15世紀代以降のことであるが、それ以前は鎌倉などの出土に限られていた。東北では12・13世紀代からかなりの漆椀、皿などの確認がなされている。平泉柳之御所⁽⁷⁶⁾、最近の報告例では山形県遊佐町大楯遺跡⁽⁷⁷⁾などで、まとまった資料が得られている。

柳之御所のものは12世紀後半である。容器としての木製品は曲物、折敷、挽物などが出土している。挽物と言っても木地碗でなく、すべて漆碗であることはいうまでもない。形態は碗、皿、蓋等が存在する。碗、皿の多くは高台を有するものが多く、中に無高台のものもあるようだ。碗は幾つかの大きさが認められるが、10cm前後の小形碗、16cm内外の大形碗の大きさの物が多いようである。また、形状の上では、高台の形状、体部の立上がりの形状などにいくつかバリエーションがある。

大楯遺跡の資料は共伴する陶磁器が12世紀後半から14世紀にかけてのものであり、とりわけ13、14世紀代の遺物が多く、木製品についても年輪年代測定の結果などを見てもこの時期を中心とするものであった。漆製品もほぼこの時期のものと推測される。柳之御所と年代的隔たりはさほどなく、さらに能登の資料を比較しても形態的差は顕著でない。これは先に挙げた流通などの理由が考えられよう。ここでは焼物との関わりについてさらに考えてみたい。漆碗の性格は、一般的には供膳具としての役割を担うわけであるが、焼物とは互換製品として位置づけることができる。しかし、先に、四柳氏の指摘した点について見ると、機能的に互換されたと言うより、食生活の変化により、漆碗の出現があったものと捉えている。この時期を能登では13世紀後半と考えられ、そこでは、「汁ものには漆碗、飯には土師器皿」の配膳形態の定着の可能性が述べられていたが、各地の供膳具のあり方を見ると決して単純には割切れない状況があるようである。当時、畿内ではまだ瓦器碗が存在し、また、東海地域では山茶碗が存在する。東北から関東の地域では土師器の碗を初めとした在地土器の碗形態の存在は確認されていない。そのため、基本的に鎌倉・柳之御所・大楯遺跡のような漆碗の存在は、案外、普遍的に東国に存在したのではないかとする考えが最近強く、地域的、階層的差なども考え供膳具のあり方を考えていく必要がある。

また、この漆碗の小形皿、小形碗などの形状がロクロ土師器の皿の中に、比較的近似した形態を見つけることができる。土器と漆碗、皿等の比較検討はよく行なわれるが、ここでも両者の関係は図上の比較であるが、比較的近似した関係を推測させる。

それから、木地碗についてはよくありそうな感じもするが、その存在が遺跡の発掘例ではほとんど皆無に近いことは常識化している。「新版絵巻ものによる日本常民生活絵引⁽⁷⁸⁾」の中に見られる碗について見ると、第四巻福富草紙に、唯一木地碗と解釈したものがあるが、絵を見る限り木地碗と判断はできなく、むしろ塗物と思われ、絵巻にも木地碗は見られない。

以上漆碗を中心に見てきたが、最初にも触れたが、東国の中世遺跡の中で煮炊具とともに、供膳具の碗の欠落は未だ解決しない問題として残っている。その空白を埋めるものとして、引合に出されるものが漆碗であった。

畿内には12世紀から14世紀末～15世紀前半には瓦器碗がある。東海では、ほぼ同じ時期に山茶碗が存在する。その時期に、東国各地には殆ど碗形態の焼物の生産がなされていない。漆碗

が互換的性格のものである可能性は強いが、東国にのみ分布したと結論を下す証拠は見出せない。

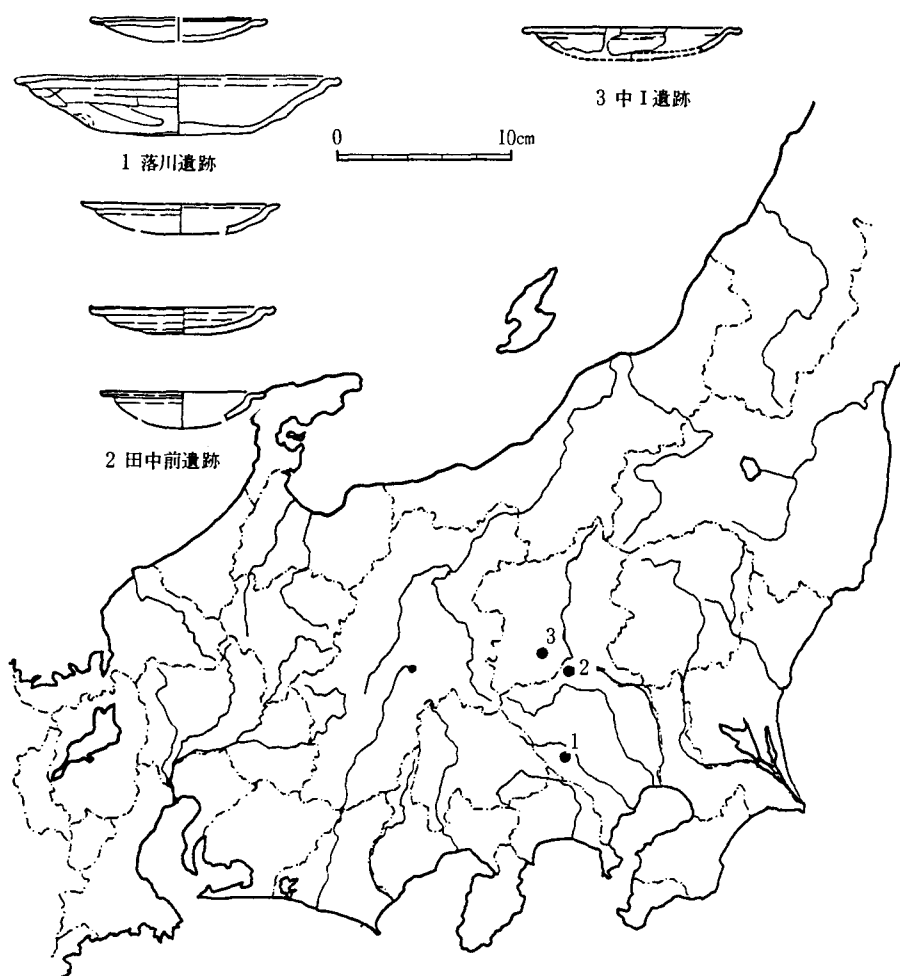
その他、古代末から中世全般にかけては中国陶磁の供給があるが、とりわけ、東北の北部地方では関東や南東北と比較にならないほどの大量供給があった事は、各地の遺跡報告により明らかである。また、中世後期には古瀬戸、大窯製品が関東から東北全域にわたって供給されていたようであるが、今回はその事実に触れるに留める。

5 小 結

非ロクロ土師器を中心に、東国の土師器について概略を述べたが、その中で、非ロクロ土師器の出現のあり方は、極めて唐突であり、極めて可及的な早さでの広がりがあったようである。従来、京都系の「て」の字土器が11世紀前半頃の時期に関東の幾つかの遺跡で検出されている⁽⁷⁹⁾が(第5図)、土壌や堅穴住居跡等から1、2点の出土である。資料的に僅かなことから各地で普遍的に模倣が行われたものとも思われず、12世紀代の非ロクロ土師器製品とは、その受入れ方に大きな開きがあるように思われる。基本的に、非ロクロ土師器の京都からの本格的模倣生産は12世紀中頃以降と想定され、東国の中でも、東北の平泉や浪岡城等には口径15cmを越える大形のものも見られ、関東甲信地域に先行する12世紀中頃に既に京都系のものが搬入されている。

問題は、ロクロ土師器である。各地の説明で述べたように、12世紀前半の土器様相がわかるところは少ない。例えば、平泉にしても館の成立は12世紀初期であり、発掘も半ばで土器はまだ十分に分類が行われていないが、12世紀前半に位置づけられ土器はあまり多いように思われず、その抽出は難しい。⁽⁸⁰⁾12世紀前半まで前代から土器の系譜を辿ることのできる信濃でも12世紀末から13世紀に至ると出現するロクロ土師器との間に異なりがある。それは土器の使用形態についても、また、組成の上でも異なりを指摘でき、連続的系譜を辿ることができないのが現状ではないかと判断される。その一つが有高台の碗形態の消滅、無高台に15cm前後の皿が比較的各地で認められるが、東北の北部のように、11世紀代に全く同種の系譜が認められない処にも出現する。また、鎌倉では、極めて須恵質的な焼成の良好なものもあり、関東の11世紀末のロクロ土師器製品とはかなり趣を異にしている。また、13世紀に至り、北関東の遺跡、また12世紀前半まで比較的、在地土器の発達が著しかった松本平の集落遺跡でロクロ土師器が希薄な分布状況を呈している。このことは、ロクロ土師器についても、本当に古代以来同一系譜上の工人により生産されたものか。また、全く機能的に異なるものに転換したため、集落などでの出土がなくなったのか、疑問が多い。この辺りについては遺跡における階層性をも考慮して考えていく必要はある。

このロクロ土師器についてであるが、先も述べたが、福田健司氏は11世紀後半のこの土器の



第5図 「て」の字土器出土遺跡（拠註79文献）

祖形について、木器・山茶碗など従来の須恵器に代り、多器種の供膳具に求めることを想定した。⁽⁸¹⁾ 十分考えられることであり、東国の古代末の非ロクロ土師器が12世紀中頃から12世紀後半に流布したとき、同様にはば東国全域にロクロ土師器もほぼ同一器形で制作が始められたことに注意する必要がある。その祖形はその類似性から非ロクロ土師器が京都土器をモデルにしたと同じように、同じモデルを模倣したものと推測される。それは、極端な事を言えば、従来より土師器生産が盛んな所、また、東北の北部のように比較的早い段階土師器の供膳具が消滅した所でも関係なく、ほぼ同時に開始されたといっても良い。その祖形は木製の椀と考えるのが、器種の類似性などから妥当であろうか。

次いで機能を中心に見てみたい。

水口氏は土師器で作られた日常的な供膳具がいつからいわゆる“かわらけ”のような使用形態のものに変化したのかということで、武蔵の栄町遺跡の例を挙げている。⁽⁸²⁾ この遺跡のF地区

第2号土坑から、一括廃棄された400点余りの土師質土器が出土している。そのほとんどは小皿であった。この出土の在り方は鎌倉などで検出される「かわらけ溜まり」に似ている。これは、宴会などに使用したかわらけを二度は使用せず廃棄してしまった行為の結果であると考え、11世紀中葉から後葉に従来の日常的供膳具のみの使用から新たな要素が見られると考えた。

12世紀の関東における土師器を検出させる遺跡を見てみたい。多摩ニュータウンNo.692遺跡⁽⁸³⁾では多量の国産陶器、舶載陶磁器とともに、ろくろ土師器の皿が検出されている。遺物から12世紀中葉第3四半期頃の年代が考えられている。遺構は斜面を段切りして削平面をつくり、そこに建物跡等が多数検出されている。遺物は建物跡などの周辺などから検出されたものであり、遺跡自身の性格は在地土豪クラスの館ないしは隣接する蓮生寺に関連した遺構と思われる。遺物の出土状況から一概に、日常的供膳具とも言えないが、「ハレ」のための遺物とも断定は出来ない。同種の12世紀の遺跡としては多少前後するが、相模の宮久保遺跡⁽⁸⁴⁾がある。宮久保遺跡では12世紀前半から13世紀前半にかけての遺物が検出されており、性格は重層的で経塚と居館跡が検出されている。ここでの遺物の出土状況は遺構に伴うものは明確でない。しかし、陶磁器の内容等から推測しても、土師器類についても、単純な供膳具としての位置づけはできない。

非ロクロ土師器が検出する遺跡ではどうであろうか。基本的に分布の時に既に触れたが、12世紀から13世紀の東北、関東などの遺跡で検出される非ロクロ土師器はロクロ土師器と共伴する例が多い。そのため、非ロクロ土師器の使用形態を論ずることはロクロ土師器の使用形態を論ずることとも相通じることである。両者は、その系譜の上で異なりを示すが、ある時期以降関東、東北では極めて類似した機能を有するものと考えられる。既に分布のところで述べたが、12世紀代では主に東北地方を中心に検出遺跡が多い。京都との距離的な位置関係を鑑みれば関東地方にもさらに多くの遺跡の分布があっても言いのかもしれないが、遺物の広がりには単に地理的な長短でないことはこの時代に限ったことではない。

さて、東北で最も同種の遺物を多量に検出させているのは平泉である。1989年の発掘調査では柳之御所でおよそ8トンの土師器（土師質土器）が検出されたと言う。本報告でないので詳細な使用等についての言及はないが、基本的に一回使用のものと推測される。そこに「ハレ」のための使用であるかは一概に断定はできないが、柳之御所の継続年数と使用階層の人口等を考えてみた場合、いかにも8トンと言う量は尋常な量ではなく、また出土場所は御所の堀を中心とした地域であることから、なおさら使用の階層、性格は限定されたものとなる。そのため、これだけの数が、日常的に再利用したとは考えにくい。

『日本常民生活絵引』第四巻「直幹申文絵詞」に店を表現したものがある⁽⁸⁵⁾。藤原氏はこの絵詞を引合に出し、「かわらけ」の使用のあり方の一端について触れている⁽⁸⁶⁾。「このまま、(かわらけ)にのった状態で持ち帰られるが故に、はじめから盛わけた、そんな想像は許されないものであろうか。」と述べ、かわらけが一過性の容器として使用されていると考え、かわらけの

使い捨てとしての一端がこの絵詞に現わされていると言う。この点では、継続的使用を行わなかったと推測される平泉や鎌倉などの出土例に共通する。しかし、日常的な生活に組込まれていた事をこの絵巻は物語っている。

基本的に両形態とも日常的、非日常的両方の機能を兼ね備えていたと思われるが、中で、非ロクロ土師器製品には非日常的な傾向が強かったと判断される。

その一つの理由として、東国では基本的にロクロ土師器は中世全期に存在するのに対して、非ロクロ土師器は次第に姿を消し始め、14世紀前半にはその姿を消してしまう。これは、両形態の生産性の問題もあろうが、基本的に非ロクロ土師器がより非日常的なものであり、その需要が支配者層などに限られていたとも考えられ、13世紀末から14世紀前半代の政治的な変動の中で、次第に淘汰されていったものと推測される。また、生産自体は各地域の在地産として考えられるが、各地の形状は極めて画一的である点も、この製品の特殊性を考える必要がある。

14世紀代においては各地ともロクロ土師器を主体とするが、各遺跡での出土量は減少傾向にある。下古館遺跡や上野国分寺・国分尼寺中間遺跡などからの出土遺物を見ても、まとまって大量に投棄されたような出土例は少なく、非ロクロ土師器とともに検出された前代のような一括廃棄の例は殆どない。

しかし、15世紀中頃以降になると再びロクロ土師器の大量出土する遺跡が確認され始め、館跡の堀や井戸などの遺構から大量に検出される。その状況は13世紀代と同じように一過性の使用で酒杯として使用され、その後、投棄されたとも考えられている。

おおまかに各地の土師器の機能について見てきたが、いずれにしても、その用途は限定できるものでなく、灯明皿・酒杯・副食を盛る皿・墓壇の埋納品など様々な用途が考えられた。それはまた、時とともに、西国からもたらされる土器を使用したり、その影響のもとに在地で生産を行ったり、在地で古代以来の土師器工人が継続して生産を行った可能性もあり、また、東海地方のように、陶器工人が生産を行った所もあり、様々な生産の可能性を含んでいた。

中世前期には、畿内に比較して生産工人の組織化が明確でないが、非ロクロ土師器の分布で推測したように非日常的な性格から、領主層の隷属的な存在として生産を行ったと思われる可能性がある。12世紀前半の供膳具の断絶の可能性とも考え合わせ、非ロクロ、ロクロ土師器を問わず、12世紀中頃に新規の生産体制の成立の可能性が強く、その点で大きな転機を想定できる。そして、その中で日常的な役割を担う碗形態については、階層的な見極めを含め、漆碗、中国陶磁器などの存在を十分想定していく必要がある。

註

- (1) 福田健司「日野市落川遺跡Ⅴ」1987、福田健司『『1986年』の考古学界の動向(古代・東日本)』『考古学ジャーナル190』1987
- (2) 笹生 衛「房総における中世的土器様相の成立過程」『史館21』1989

- (3) 大江正行 「群馬県と周辺地域の中世土師質土器Ⅲ」『群馬考古通信7』 1980
- (4) 桑原滋郎他 「須恵系土器について」『東北考古学の諸問題』 1976
- (5) 橋本久和 「中世成立期の土器様相」『日本史研究330』 1990 この中で、畿内では土師器は基本的に回転台不使用であるのに対して、畿外では回転台を使用するものが主体であると述べて、それらを回転台土師器と称している。
- (6) 三浦圭介氏より教示を受ける。
- (7) はばその範囲は現在の岩手県、青森県、秋田県などの地域である。この地域は在地の供膳具以外にも、土器生産の希薄な地域ではある。
- (8) 桜井清彦他 「蓬田大館遺跡」『早稲田大学文学考古学研究室報告』 1987
- (9) 浪岡町教育委員会 「浪岡城跡Ⅴ」『昭和61・62年浪岡城跡発掘調査報告書』1989
- (10) 三浦圭介氏より教示を受ける。報告書が刊行されたとのことであるが、筆者はまだ目をとおしていない。
- (11) 青森県教育委員会 「中崎館遺跡」『青森県埋蔵文化財調査報告書129』 1989
- (12) 青森県立郷土館 「尻八館調査報告」『青森県立郷土館調査報告第9集』 1981
- (13) 青森県教育委員会 「境関館遺跡」『青森県埋蔵文化財調査報告書102』 1987
- (14) 八戸市教育委員会 「史跡根城跡発掘調査報告書Ⅰ」 1979
- (15) (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 「平泉町柳の御所跡現地説明会資料」 1989 現在この遺跡は調査中である。
- (16) 平泉町教育委員会 「柳の御所跡発掘調査報告書」『平泉町文化財調査報告書第1集』 1983
- (17) (財)郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団 「桜木遺跡」『河内下郷遺跡群Ⅲ』 1983
- (18) 松宮茂他 「白水阿弥陀堂苑池発掘調査報告書」 内郷市教育委員会 1962
- (19) 中山雅弘 「福島県における中世土器の様相」『東国土器研究1』 1988
- (20) 前掲註19に同じ。
- (21) 郡山市および周辺で7カ所ほどの非クロロ土師器を検出する遺跡が確認されている。
- (22) 多賀城市では新田遺跡を中心に非クロロ土師器の検出が確認されている。
- (23) いわき市の龍門寺遺跡、梁川町梁川城などの比較的福島県内の遺跡での検出例が増しつつある。
- (24) 斎藤 進 「多摩ニュータウン№692遺跡出土の土器様相」『東国土器研究1』 1988
斎藤進他 「多摩ニュータウン遺跡 昭和61年度(第2分冊)」『東京都埋蔵文化財センター調査報告』第9集 1988
- (25) 國平健三 「綾瀬市宮久保遺跡出土の中世陶器について」『東国土器研究第1号』 1988
國平健三他 「宮久保遺跡Ⅱ」『神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告書15』 1988
- (26) 服部実喜 「中世都市鎌倉における出土かわらけの編年的位置づけについて」『神奈川考古19』 1984
- (27) 小田原市教育委員会 「史跡小田原城跡 城米曲輪」『小田原市文化財調査報告書15』 1984
- (28) 前掲註25文献
- (29) 前掲註24文献
- (30) 加藤修他 「中・近世陶磁器からみた多摩ニュータウン遺跡の様相(1)」『研究論集Ⅴ』 1987
- (31) (財)栃木県文化振興事業団 「自治医科大学周辺地域」『栃木県埋蔵文化財調査報告104』 1989
- (32) 阿久津久 「門毛経塚遺物と中世陶器」『茨城県歴史館報12』 1985
- (33) 川越市教育委員会 「河越氏館跡発掘調査報告書」 1976
- (34) 前掲註30文献
- (35) 茨城県教育財団 「屋代B遺跡」『茨城県教育文化財調査報告書第40集』 1987
- (36) 植木 弘 「大蔵館跡」『嵐山町埋蔵文化財調査報告3』 1987
- (37) 木津博明 「上野国分僧寺・尼寺中間遺跡」『関越自動車(新鴻線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第12集』 1986
- (38) (財)栃木県文化振興事業団 「自治医科大学周辺地域」『栃木県埋蔵文化財調査報告第71集他』 1985
- (39) 平田重之他 「皂樹原・檜下遺跡Ⅰ」『皂樹原・檜下遺跡調査会報告書第1集』 1980
- (40) 前掲註30文献

- (41) 小田原城をはじめ、八王子城、花崎城、忍城などがある。
- (42) 前掲註27文献
- (43) 塚田良道 「忍城跡の発掘調査」『行田市郷土博物館研究報告1』 1989
- (44) 栃木県教育委員会 「石那田館跡」『栃木県埋蔵文化財報告書第8集』 1975
その他、神奈川県裏八幡西谷遺跡などで検出されている。
- (45) 服部実喜 「中世都市鎌倉における出土かわらの編年の位置づけについて」『神奈川考古第19号』
1984
- (46) 原明芳他 「吉田川西遺跡」『長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書3』 1989
- (47) 原 明芳 「信濃における平安時代の黒色土器」『東国土器研究第3号』 1990
- (48) 野村一寿他 「中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書4 松本市内その1 総論編」『長野
県埋蔵文化財センター発掘調査報告書4』 1990
- (49) 浅野晴樹 「関東における中世在地産土器について」『(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団研究紀要第
4号』 1988
- (50) 守矢昌文 「磯並遺跡」 1987
- (51) 長野県教育委員会 「御社宮司遺跡」『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書一茅野市その
5一』 1982
- (52) 金井典美 「長野県霧ヶ峯旧御射山祭祀遺跡調査概報」『考古学雑誌46-1』 1965
- (53) 佐久市大井城、上田市塩田城などの例がある。
- (54) 伊藤正幸 「甲府盆地における12・3世紀の土器様相」『山梨考古学論集Ⅱ』 1989
- (55) 山梨県教育委員会 「勝沼氏館跡調査概報に」 1977
- (56) 山梨県教育委員会 「(伝)岩崎館跡発掘調査報告書」 1975
- (57) 佐藤公保 「中世土器研究ノート(1)一朝日西遺跡の様相一」『(財)愛知県埋蔵文化財センター年
報昭和60年度』 1986
- (58) 前掲註57文献
- (59) 浅田員由 「山茶碗窯出土の土師器皿について」『愛知県陶磁資料館研究紀要5』 1986
- (60) 井上喜久男氏より、御教示いただいた。
- (61) 中山正弘氏より、御教示いただいた。
- (62) 藤原良章 「中世の食器・考くかわらけ」ノート」『列島の文化史5』 1988
- (63) 後の壺の項で詳しく述べるが、水上交通の整備に加え、有力豪族の存在は、搬入陶器のみならず、
非ロクロ土師器の使用が高かったと推測される。
- (64) 前掲註35文献
- (65) 斎藤忠他 「日光男体山」 角川書店 1963
- (66) 前掲註30文献
- (67) 前掲註57文献
- (68) 吉田幸一 「馬場中路遺跡」『郡山東部Ⅲ』 1983
- (69) 宮城県多賀城跡調査研究所 「名生館遺跡Ⅳ」『多賀城関連遺跡発掘調査報告書第9冊』 1984
- (70) 工藤清泰 「北日本・浪岡城戦国城館の中世遺物」『東国土器研究第1号』 1988
三浦謙一 「柳之御所跡出土の木製品一速報一」『(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター紀
要X』 1990
- (71) 筆者実見
- (72) 四柳嘉章 「能登の中世漆器一編年と下地技法・樹種利用の特質について一」『漆工史学会第12号』
1989
- (73) 中井さやか 「漆碗」『文化財の保護第21号』 東京都教育委員会 1989
- (74) 四柳嘉章 「西川島一能登における中世村落の発掘調査一」 1987
- (75) 橋本鉄男 「ろくろ」 法制大学出版 1979
網野善彦 「日本中世の非農業民と天皇」 岩波書店 1984
- (76) 前掲註70三浦論文
- (77) 山形県教育委員会 「大楯遺跡」『山形県埋蔵文化財調査報告書第139集』 1989
- (78) 神奈川大学日本常民文化研究所 「新版絵巻による日本常民生活絵引第4巻」 平凡社 1984

- (79) 埼玉県遺跡調査会 「田中前遺跡」『埼玉県遺跡調査会報告書第32集』 1977
 福田健司他 「落川遺跡調査概報Ⅳ」 1986
 群馬県教育委員会 「中Ⅰ遺跡」『上越新幹線関係埋蔵文化財発掘調査報告書第2集』 1983
- (80) 先にも述べたが、柱状高台やロクロ土師器のなかに12世紀代のものはある。
- (81) 前掲註1文献
- (82) 水口由紀子 「考古遺物からみた中世成立期の様相」『文化財の保護第21号』 東京都教育委員会
 1989
- (83) 前掲註24文献
- (84) 前掲註25文献
- (85) 前掲註78文献
- (86) 前掲註62文献

Ⅲ 北関東の瓦質の壺について（第6図）

貯蔵具については、関東・甲信地域では東海地方に比較的近いことから、すべてその地域からの搬入品によってまかなわれていたものと推測されてきた。東北においても、12世紀代より継続的に東海諸窯の製品が搬入される一方で、須恵器系や瓷器系の在地の陶器生産が12世紀から14世紀代にかけ存在し、東海諸窯の補完品として存在したことは広く知られている。そんな中で、北関東にやや特殊な位置を成す一群の土器がある。ここでは、この土器を中心に見て行きたい。

従来この土器に関する研究は極めて僅かであった。坂詰秀一氏により「日本の考古学」⁽¹⁾の中で触れられたのが初期の事である。ここで坂詰氏は群馬県から埼玉県にかけて中世の在地産と推測される壺の存在があると述べ、それらの土器はいずれも常滑に類似する焼物と推測されていた。それ以来、両県の中世陶器とされる焼物は群馬県が「金井焼」、埼玉県が「亀井焼」と称されている。しかし、80年代以降の発掘調査の成果を見ても、両県の中世遺跡からは常滑産と推測される中世陶器は検出されても、在地産の常滑に類似する製品の存在は確認できない。一方で、瓦質、須恵質の壺、片口鉢の資料は増加の一途を辿っており、これらの土器に対して「金井焼」「亀井焼」と言う名称を使用される方が多い。しかし、生産跡、遺物とも坂詰氏が当初指摘した資料の実態を把握することができない上に、金井焼、亀井焼に用語の使用に混乱が生じている。そのため、以前この名称の使用は現状では控えるべきではないかと述べたことがある。そして、この製品を形態の特徴から「武蔵型」と「上野型」の呼称を提唱した。この二形態はその分布と、形態の特徴から分類したものである。⁽²⁾

埼玉県内の蔵骨器を中心とした中世陶器の分布を調査した折、常滑、古瀬戸、渥美等の東海諸窯の製品等とともに多量の瓦質もしくは須恵器に類似した壺が分布することを確認した。この製品は極めて限定した分布と、極めて限定された用途、即ち蔵骨器以外にほとんど使用されていない状況を確認した。その辺りにこの製品の役割と系統に関するヒントが隠されているの

かもしれない。いずれにしても東日本全体を見ても瓦質の壺形態は他に例を見ず特異な存在と言える。

ここでは、先ず、二形態の特徴について述べてみたい。

1 上野型

主にその分布は群馬県東部から栃木県西部にかけての地域である。一部、埼玉県北部にもその分布を確かめることが出来る。形状から三形態に細分できる。三形態とも比較的画一的な作りである。

A型 胴は球形を呈し、最大形はやや上位に位置する。口径は14cm前後と大きめであり、口縁は外反し、その端部は1.5cmほどの垂直の縁帯を形成させている。成形は紐輪積みである。体部の整形は肩部が横方向、胴部が縦方向に丁寧なナデが施されている。底部の切り離しは静止糸切りであった。ナデの施しが極めて丁寧であることから、器面は非常に平滑である。

栃木県⁽³⁾小山市小山城跡、埼玉県⁽⁴⁾北川辺町、群馬県⁽⁵⁾尾島町東照宮地内古墓からこの形態が検出されている。口径14.4cm、器高21.5cmと全く同法量の製品が確認されている。先に述べたようにこの製品は極めて画一的であることが、この例を見れば一目瞭然であり、生産の単一的な状況を推測させる。製品の特徴は当時の瓦と比較すると、焼上がりは近似する。

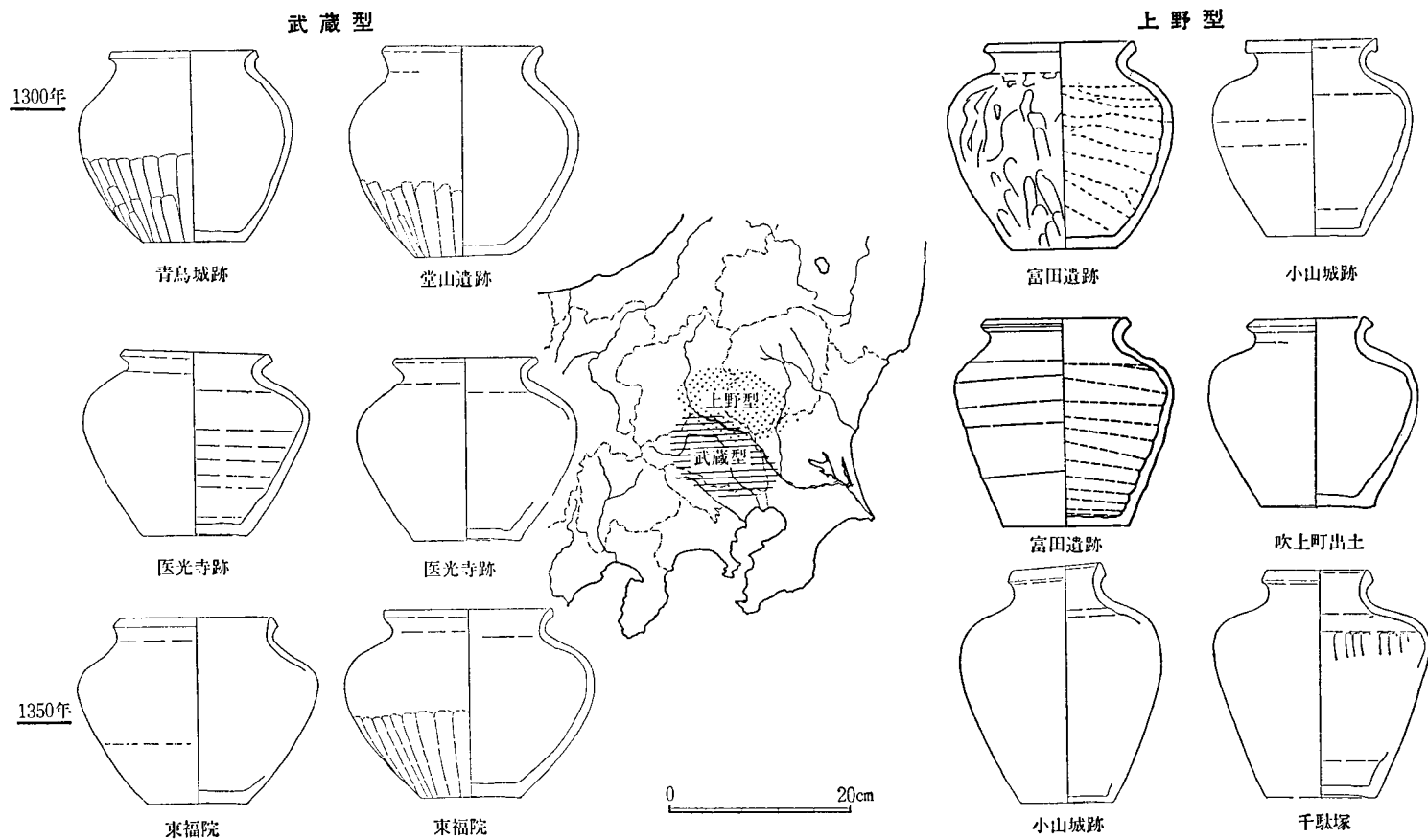
B型 基本的な形状はAに類似するが、口縁部の折返しはA型ほど外反しておらず、口縁端部も斜方向に縁帯を形成している。器表面の状況もA型に類似しており、灰色を呈している。

C型 胴は前者に比してやや長胴のものである。体部は直線的に延びて肩の張りは強い。口縁部は折返しがあり強くなく、端部がやや肥厚し、傾斜した短い縁帯を形成している。頸部はAからC型に行くに従って立上がる傾向を示している。整形は肩から口縁部にかけて横方向にナデ、体部下半は縦方向にナデが施されていた。前二者同様に灰色の瓦質の物もあるが、やや焼き上がりの悪い製品が見受けられる。

2 武蔵型

主な分布は埼玉県の北部から西部にかけての分布が主体で、器形の不揃いさが目立つ⁽⁶⁾。形状から、上野型同様三形態に分けて考えられる。

A型 明らかに須恵器的な焼き上がりを示す一群である。現状ではその数は少ない。器壁は比較的厚めである。紐輪積み成形で、整形は口縁部から肩部にかけて比較的丁寧なナデが施されている。胴の最大径の下部から底部にかけては縦方向に2段ほどにわたってケズリが施されている。全体的な形状は丸みが強い球胴形を呈している。頸部から口縁端部にかけては折返しも少ない。器高はおよそ22cmから24cm、胴径は23.7cmから26.8cmを測り、器高÷胴径×10はおよそ9.2から9.9ほどを示している。



第6図 北関東における壺二形態（拠註2・6文献）

B型 この型とC型は須恵器的な焼き上がりとはならず、個体差を認めながらも、概して瓦質的な製品と表現できる。ただ中に焼成不良な物があり、土師器的な焼き上がりの物もある。整形は口縁部から体部上位にかけてはナデ、体部下半は明確に観察されるものは少ないが、基本的にはA型同様に縦方向にケズリもしくはナデ状の整形が施されていたものと推測される。口縁部の形態は短く外反するが、A型よりやや長めである。器高は20cm前後、胴径24cm前後を測り、器高÷胴径×10は8.3を示す。

C型 瓦質の壺形態である。器壁はやや薄めで、焼き上がりは基本的に軟質でB型と大差ない。器高は21cm前後、胴径は27cm前後を測り、胴径の肥大化傾向がある。器高÷胴径×10はおよそ7.5であった。

このタイプの最大の特徴は、A型の焼成が極めて須恵器的な点である。後に述べるこの製品の系譜を遡る上で重要な指標となるものと考ええる。

両者とも三形態ほどに分けて考えられ、上野型が比較的画一的な作りで、瓦質の焼き上がりのものが多い。そして球胴型から長胴型へ変化する。武蔵型も同様に三形態に分けられ、球胴型から一層扁平な形状を示す方向へ変化する。

3 系譜について

このような壺形態は、当初述べたように使用形態としては、圧倒的に蔵骨器としてである。筆者が埼玉県内で収集した限りでは、館跡等の集落跡での壺の検出を殆ど認められず、この形態は13世紀から14世紀にかけての蔵骨器の多用の風習の過程で、常滑、古瀬戸の国内産陶器の補完的な役割の基に発生したと推測される。このような補完的役割を強調すれば、自ずとこの壺は常滑もしくは古瀬戸等の壺形態の模倣と推測される。しかし、武蔵型は常滑などの形態と比較した時、明確な類似性は認められず、説得力に欠ける。第一に武蔵型と上野型では形態の説明で行なったように、極めて形状の上で異なりがあり、両者には成立の背景に異なりがあるものと推測される。ただ、底部の糸切り離しの方法、体部下半の縦方向のケズリ、ナデの技法は他にあまりない整形法技であり、共通性を見出すこともできる。

さて、そこでその系譜についてであるが、現状では生産跡なども検出されておらず、不明な点が多い。筆者も以前この製品をまとめる際に、須恵器生産の延長上に存在する焼きものと考えたが、そのような単純な分類では系譜を追うことはできない。

基本的に、古代から中世にかけて瓦生産が残存することは、幾つかの調査例などから明らかで、この瓦生産工人との関わりが想定される。それは、壺の底部整形に見られる静止糸切りや、焼成後の質感などの類似性である。もしくは須恵器の壺・甕生産工人の残存した可能性である。須恵器の主たる生産物である供膳形態は関東では10世紀代に消滅したものと認識されており、須恵器の中で甕等はその後の11世紀代の遺跡でも確認されることから、碗・皿等の供膳具の生

産と甕などの貯蔵具を生産する工人とは分離され引続き生産が継続されたものと推測できなくもない。そこで、思い当たる資料として、埼玉県本庄市東谷中世墳墓群から出土した須恵器系の甕が2点ある。両者とも器面に斜めの叩きが施されており、口縁端部は断面三角形に作られている。一点は広口の甕で、底部に糸切り痕をとどめ、さらに体部下半に縦方向のケズリが認められる。この手法は武蔵型に普遍的に存在する手法であることから、何らかの関連性があるものと思われ、基本的に焼成の良さなどから武蔵型に先行する13世紀前半から中頃のものとして推測した。しかし、先に述べたように、これ以前に甕・壺の製品を遡って追うことは11世紀代に至るまで確認できない。例えば、12世紀代の経塚資料が、周辺でも検出されているが、経塚外容器として確認されているものは、いずれも東海諸窯の製品に限定されるようである。武蔵型については、可能性として、祖形を東海諸窯に求めながらも、在来の須恵器工人の系譜上の瓦工人などが想定できなくもない。

一方、上野型では、武蔵型のような須恵器の製品を認めることはできない。その画一的な形状から、一面で新規の生産体制を想定することが出来る。器形上の類似性や、整形などについては体部上位のナデ、下半の縦方向のナデについても類似する手法である。しかし、この製品の焼き上がりが表面が黒色に仕上り、十分燻べられたと推測でき、他地域には見られない壺を生み出している。

焼成等は東海諸窯の製品とは著しく異なり、一概に常滑等の影響を想定することは危険であるが、上野型は全体的な形状から常滑製品が最も身近なモデルであった可能性が強い。上野型は須恵器の色彩が全くなく、瓦工人か新規に生産工人を招請した可能性もあり得る。瓦器もしくは瓦質土器の工人を求めるとすると、畿内の可能性も否定はできない。

4 蔵骨器としての位置（第2～3表）

蔵骨器の使用を見たとき、その使用階層はある程度以上の支配層と考えられる。それでは北関東で認められる瓦質土器の蔵骨器の主たる需要層は如何なるものであろうか。第2表は埼玉県における蔵骨器の器種構成である。管見に触れたもののみであり、さらに現在は各地で中世墳墓の発掘も行なわれており、その量はさらに増大するものと思われるが、大おまかな傾向は把握できる。中国陶磁は2.4%、古瀬戸は8.9%、渥美10%、常滑34%、それに備前の片口鉢を使用したものが一点確認されている。これらに加え、上野型とするものが1.6%、武蔵型が実に50%近く検出されている。在地産の数が全体の5割以上を占めている。年代的には12世紀後半に位置づけられる型式の渥美が最も古く、新しいものは15世紀代の古瀬戸、常滑であるが、その大半は13世紀後半から14世紀前半に位置づけられる。12世紀代から13世紀前半の時期は渥美、古瀬戸、常滑などの東海諸窯の製品に限定される。これらの生産地以外のものとしては、13世紀代では下野小山城から珠洲の壺T種⁽⁸⁾が、同じく下野田沼町からは東播系の甕と推

測される蔵骨器の検出例がある。実際、鎌倉においては珠洲こそは確認されていないが、東海諸窯の製品以外では、備前、東播系を初めとした畿内周辺から以西の瓷器系、須恵器系の生産地の遺物が蔵骨器として使用されており、驚くに当たらない。

北関東の下野、上野に分布する上野型は報告されたものでおよそ20数点になる。⁽⁹⁾北武蔵出土の武蔵型の60点と思うとかなりの差があるが、武蔵型の資料採集にかなりの時間を要しており、上野型についても詳細に採集を行えば、さらに資料の増加は望むことはできる。それは搬入品として最も多くもたらされたと思われる常滑についても同様なことが指摘でき、埼玉の例を参照すると、下野、上野では上野型に次いで、点数が把握されるであろうが、現在では古瀬戸と大差ない状況を呈している。常陸については、現在のところ確実に中世在地産と思われる焼成の蔵骨器は検出されていない。このような状況のため常陸の蔵骨器は東海諸窯の製品にほぼ占められており、古瀬戸のみで20数点を数え、他の生産地を圧倒する状況である。安房、上総、下総の千葉県でも量的な割合は把握できていないが、在地産の壺は把握できておらず、常陸と大差ない状況と判断される。北関東では古瀬戸の蔵骨器は50数個体確認しており、その内半数近くが常陸のものであり、古瀬戸の搬入に関わる特別な政治的、経済的背景が考えられなくもない。加えて、埼玉の搬入品の傾向から考え、常滑製品の今後の増大が十分推測される。

さて、内陸の上野を始めとした三国、常陸・下総を始めとした海岸線の4国との違いは蔵骨器の種類の中で搬入品と在地産品の比率に象徴される。

網野氏は当時の常陸・下総などの諸国には、古代以来の有力豪族の存在に加えて、海民の存在があり、単に漁撈に従事するもののみでなく、広範にわたって舟による水上交通に携わっていたと見なくてはならない。また、香取社の存在は海民には重要な位置をなすものであったと位置づけている。⁽¹¹⁾

当然、東海諸窯の製品の流通の段階で何らかの形でこれら海民が重要な位置をなした可能性は高い。やや、強引かも知れないが、これら海民の存在が濃厚な地域、常陸、下総の霞ヶ浦周辺、霞ヶ浦北部の結城から小山にかけての一带に特に分布の多さが目立ち、有力豪族の存在とともに、比較的東海諸窯の製品が手に入れやすい条件が整っていたと推測される。

一方、内陸の上野、北武蔵においても、内陸である点から東海諸窯の搬入が少なかったため、在地産土器が補完の意味合いで生産を始めたと述べたことがある。基本的にそのような状況から生産が始まったことは間違いなからう。生産地を問わず、蔵骨器の分布する範囲は上野、下野が利根川、鬼怒川沿を中心とする一帯であり、武蔵は北武蔵の丘陵部一帯であった。⁽¹²⁾基本的に当時の有力領主層の存在した地域でもある。そして、下野・上野・北武蔵は利根川の水上交通を利用したり、北武蔵の丘陵部は俗に言う鎌倉街道を利用したりして、常陸・下総ほどでないにしても、相当量の東海諸窯の製品がもたらされている。このような状況から、蔵骨器の分布と在地産の蔵骨器の成立に、内陸のため搬入品があまりもたらされなかったという一面と、

第2表 埼玉県における蔵骨器の生産地別内訳

産地等 世紀	中国陶磁	古瀬戸	渥美	常滑	須恵器系	上野型	武蔵型	備前	計
12			3	2					6
13		3	7	11	2				22
14	2	7		20		2	61	1	93
15	1	1		1					3
計(%)	3(2.4)	11(8.9)	10(8)	34(27.4)	2(1.6)	2(1.6)	61(49.2)	1(0.8)	124

第3表 埼玉県における蔵骨器器種別内訳

産地等 器種	中国陶磁	古瀬戸	渥美	常滑	須恵器	上野型	武蔵型	備前
四耳壺	2	3						
梅瓶	1	7						
壺			9	28	2	2	61	
甕				2				
三筋壺			1	2				
片口鉢								
水注		1						1
不識壺				2				

第4表 栃木県における蔵骨器の生産地別内訳

産地	中国陶磁	古瀬戸	渥美	常滑	土師器系	上野型	その他	計
点数	4(6.7)	27(45.7)	2(3.3)	11(18.6)	2(3.3)	11(18.6)	2(3.3)	59

合わせて、次に述べる需要の増大と政治体制を考える必要がある。

全国的な葬制の流れを見ても、13世紀後半から14世紀代に蔵骨器を使用する例が多いことがわかっている。⁽¹³⁾このことは焼物生産にも影響を与えたとされる。例えば、常滑の鳶口小壺、古瀬戸四耳壺、瓶子の生産は蔵骨器専用に生産されたとも考えられている。⁽¹⁴⁾それら東海諸窯の製品は一定量もたらされるが、蔵骨器需要層の拡大の中で、次第に階層的にも拡大し始めたとも思われる。まさに、ここに在地産の壺は主たる目的として、蔵骨器専用として、多分に東海諸窯製品の補完品として、階層的使用の拡大に対する対応のために生産が開始されたものと推測される。

政治的な体制と、生産関係を同一レベルで論ずる危険性はあるが、峰岸氏の考えに次のよう

東国における中世在地系土器について

(15)
なものがある。

「領主制の存在形態から、概略利根川を境として二つの地域にわけられる。すなわち(A)鎌倉以来の伝統的豪族の守護職を改替し得ず、従ってこの地域に足利一門による支配権力を通して直接的に及ぼすことが出来なかった。その結果、千葉・結城・佐竹・小田・小山・宇都宮などをはじめとする足利一門以外の豪族は在来の守護職ないし所領を維持し、その地位を改変させることがなかったと言う伝統的豪族の蟠踞する上野・下野・常陸・下総・上総・安房、これに対して、(B)伝統的豪族層は殆ど存在せず、中小国人層が一揆の結合形態で存在する地域で上杉氏の守護領国となった上野・武蔵・相模・伊豆などの二つの地域である。このような二つの地域は歴史的に規定されたもので、(B)地域が鎌倉時代後期において得宗権力の基盤となり畠山・和田・横田・三浦・安達などの諸豪族氏があいついで滅亡されたのに対して、(A)地域では前期の諸豪族が概ね存続することができた。東上野の新田庄の新田義貞が南北朝内乱初期に滅亡するが、その跡は庶家の新田岩松氏によって継承されている。また(B)地域が、武蔵に代表されるように、武蔵七党などと言われる中小武士団の連合的性格が強かった。」

少々長くなったが、二つの地域は支配状況に鎌倉時代以降かなりの異なりを示していることがわかる。当初にも述べたように政治的体制と生産活動を同次元で論じて良いものか疑問は残るが、この体制の異なりは「上野型」に見られる画一制、「武蔵型」の不揃いな状況に相通じるものがある。また、要素の異なるものを提示するが、15世紀代の板碑に結衆板碑がある。この板碑の分布も利根川を挟み武蔵側には極めて多く分布するが、上野にはあまりその分布を見ない。二つの地域の支配力の差がやはり板碑の分布にも現れたと解釈出来なくもない。⁽¹⁶⁾

つまり、在地領主層が、遠隔地流通を積極的に行なう一方で、蔵骨器などの需要の増大に即応すべく、在地産土器の生産を始めたと解釈され、その際、在地領主層などの階層が顕著な形で生産に介入したのが上野型であり、武蔵型については比較的小単位での支配層の支配による生産活動が想定される。

このような使用形態、生産の歴史的背景についての可能性を述べたが、このことから12世紀後半から13世紀に求心的遠隔地流通が、次第に顕著になってくることが蔵骨器の面からもわかり、それが北関東では鎌倉を核とした流通の形態も考えられるが、一方で在地産の土器に見られるように、13世紀後半から14世紀に明らかに地域需要に基づく狭域流通のみを前提とした土器生産が開始される。これは、遠隔地流通の一方で地域経済の浸透が深まったことを意味するとともに、一層領国支配、在地領主層の力の増大を意味し、合わせて、遠隔地流通について鎌倉を介在しない流通も、次第に増大して行ったものと推測される。それは、鎌倉幕府滅亡以降は、一層、領国的な狭域流通への方向性に進んで行ったものとも考えられる。それが次の項で述べる片口鉢や鍋の生産体制を物語っている。

最後に、蔵骨器の使用を見たとき、その使用階層はある程度以上の支配層と考えられる。実

際、蔵骨器のみで階層差がわかる訳ではない。例えば、小山氏は当時在地領主層としての立場であったと思われるが、この墳墓に関しては、実に下野で検出されている古瀬戸蔵骨器の半数を占めており、中に、上野型の瓦質の壺も2点ほど検出されていた。また、群馬県尾島町東照宮地内古墓からも上野型の製品が検出された。一方、武蔵型の壺の出土遺跡は、現在のところ明確な形で、被葬者の階層を明示できるような墳墓での出土例はない。例えば、(伝)畠山重忠墓では、幅10m、長さ20mほどの範囲に一族の集団墓が形成され、その一箇所から石で1mほどの方形に区切られた小区画がありその中に埋葬されていた。これらの例で、判断することは難しいが、傾向として、まず、搬入品と在地産の数量的な関係などを考慮するならば、搬入品は小山の墳墓のように在地領主層クラス、庄郷・村落領主層、在地産については上野型と武蔵型によっても多少の差のある可能性もあるが、搬入品よりは幾らか下層の支配層が主たる需要層と想定できようか。しかし、多分に財力、被葬者に対する供養の度合いなども十分考慮する⁽¹⁷⁾必要はある。

註

- (1) 坂詰秀一「古代・中世における手工業の発達(東北・関東)」『日本の考古学Ⅵ』 1967
- (2) 浅野晴樹「埼玉県出土の中世陶器(2)」『埼玉県立歴史資料館紀要第5号』 1983
- (3) 小山市「小山市史 史料編・中世」 1980
- (4) 前掲註2文献
- (5) 大江正行「長楽寺遺跡」 1978
- (6) 浅野晴樹「埼玉県出土の中世陶器(1)」『埼玉県立歴史資料館研究紀要第3号』 1981
- (7) 前掲註6文献
- (8) 前掲註3文献
- (9) 橋本澄朗「下野の蔵骨器について」『栃木県立博物館研究紀要第1号』 1984
- (10) 浅野晴樹「北関東から出土した古瀬戸」『月刊考古学ジャーナル217』 1983
- (11) 網野善彦「常陸・下総の海民」日本中世の非農業民と天皇 岩波書店 1984
- (12) 前掲註11、「常陸・下総の海民」の注15の中で、網野氏は、現在、霞ヶ浦に小野川の流れ込む入り口、信太荘古渡・東条荘古渡に当る地に、鎌倉河岸に地名が残っており、東京神田にも鎌倉河岸があり、葛飾区の鎌倉、埼玉の鎌倉をこれに繋げると、現在の霞ヶ浦・利根川・江戸川を通ずる水の「鎌倉道」があったことが推定できる。海夫がそこで果たした役割は大きかったと思われ、香取社大禰宜長房はこの水の道を押えようとしたものと考えられる、と述べている。
- (13) 埋蔵文化財研究会「古代・中世の墳墓について」 1983 全国各地の古代・中世の墳墓についての集成が行われており、この時期の蔵骨器の資料の多さは明瞭である。
- (14) 藤沢良祐「古瀬戸中期様式の成立過程」『東洋陶磁8』 1982
- (15) 峰岸純夫「上州一揆と上杉氏守護領国体制」中世の東国一地域と権力所収 東大出版会 1989
- (16) 1987年の埼玉県立博物館の企画展『板碑』ののりの講演会の記録に詳しい。民間信仰板碑の出現は、年代的に蔵骨器の隆盛した時期より、新しい事であるがこのような民間信仰板碑の出現する背景には前代以来の政治的体制があつての事と思われる。峰岸純夫「中世東国社会と板碑」埼玉県立博物館『板碑』展 1987
- (17) 吉岡氏は中世墳墓の階層構成は墓域の占定(立地)、群構造、特に後期には石塔類の有無規格差に明示され、蔵骨器による区分は陶磁器の種別による所有関係を把握するの必ずしも有効でない。大づかみに、(A)中国陶磁・瀬戸陶器を含む中世陶器を潤沢に購入・消費しうる庄郷ときに村落領主層、(B)日常用器を陶棺・陶製蔵骨器に転用しえた名主層、(C)墓制の実態未詳ながら陶製蔵骨器使用の

形跡が認めにくい小百姓層以下、の大別に留めると述べている。吉岡康暢「北東日本海域における中世陶磁の流通」『国立歴史民俗博物館研究報告第19集』 1989

Ⅳ 調理具について

調理具として考えられる考古遺物に、搗鉢、石臼等の製品がある。この製品は用途の上で、鍋とともに東西日本の違いを示すのに注目すべき多くの問題を投げかける遺物である。この製品の名称については、搗り目のないものに対しては片口鉢、捏ね鉢、大平鉢などの表現がされ、搗り目のあるものに対して搗鉢または摺鉢と称されたり、表現されたりする。荻野氏は基本的に搗り目のないものもすべて摺鉢と称している⁽¹⁾。すなわち、搗り目のない片口鉢も出土品を見る限り、機能として搗ることに主眼がおかれていたと思われ、機能的に搗鉢（摺鉢）と何等差を認められないと判断されたものであり、その考えに何等異論はない。しかし、ここでは、形態的な分離を行うことから、一応、搗り目のあるものを搗鉢（摺鉢）、搗り目のないものを基本的に片口鉢とする。しかし、搗り目のあるものにも片口があったり、搗り目のないものにも、片口が付されない場合も考えられることからこの分類も決して適切な言葉でないかもしれない。用語の問題は今後の課題としたい。

1 各地の調理具について

(1) 関東地方

12世紀段階においては、経塚遺跡などの特殊な遺跡等での常滑等の片口鉢の検出例があり、最近では館跡と推測される遺跡からも確実にその資料は増加している。それに先行する調理具として類似形態の資料を水口氏が二、三紹介しており⁽²⁾、11世紀代と思われるもので、土師質のものと瓦質のものがあるという。しかし、中世成立期においては鉢の未発達が東日本では見られると規定し、その理由を次の二点として掲げている。一つは石皿、すり石の存在、縄文時代のように石を利用した調理の存在があったのではないか。二つ目として、内面平滑な灰釉陶器の存在をあげている。この灰釉陶器の平滑な状態は、この製品を搗鉢的な機能と想定した。この2つの理由により、鉢の独自の発達が遅れたと推測した⁽³⁾。しかし、鉢生産の未発達な地域は、関東のみでなく、全国各地に存在する。このことは、広域流通品の搬入度合いにも関わることであろう。

概ね13世紀代を中心に各地に限定された地域であるが、在地産の片口鉢や搗鉢の焼成が始まるようである⁽⁴⁾。一般的には関東では、12世紀以降には常滑系などの東海諸窯の製品が大量に搬入されており、在地産の未発達な状況は東海諸窯の大量搬入によるものと見られている。また、東海諸窯のほか13世紀後半から14世紀にかけては東播磨、備前などの製品も鎌倉以外の地域で

も検出され始めている⁽⁵⁾。

14世紀代における搬入品は、引続き常滑の製品が目立つが、前代の高台を有する常滑・山茶碗系のものに比較すると、その出土点数は減少傾向にある。北関東では13世紀末頃から瓦質の片口鉢の生産が開始することもあり、在地生産体制の確立は搬入品の減少と呼応する現象で、主要な消費地であった関東の一部に在地産片口鉢の生産開始を誘引したものである。この時期の集落、居館跡遺跡では次第に在地産の片口鉢の占める割合が多くなり、14世紀代には半数以上が在地産となる。

在地産の片口鉢は15世紀のある時期に播鉢に転換して、16世紀まで継続する。搬入品は15世紀中頃以降から、次第に古瀬戸の播鉢が主体となり始める。これ以降16、17世紀に至る段階まで瀬戸・美濃の大窯、登窯の播鉢が継続的に搬入される。

ここで、北関東の片口鉢・播鉢の分布と変遷について詳しく述べてみたい。

ア 片 口 鉢 (第7図)

片口鉢の分布については、極限られた地域での分布が確認されているのみである。先に述べた在地産の壺の分布は上野、武蔵、下野にほぼ限定された地域であったが、この壺と良くセットで片口鉢が蔵骨器の蓋として利用されることがある⁽⁶⁾。このことは、明らかに壺と同時期のものと考えられ、加えて壺の分布範囲と似通った地域での分布である。ただ、壺と大きく異なることは、集落遺跡、居館跡等での出土が圧倒的である点だ。壺の需要層は村落名主等のあるクラス以上の階層を考えていたが、果して片口鉢もその階層で良いのであろうか。荻野氏は「播鉢類は財産目録にも顔を出さないほど、安価なもの」と述べており⁽⁷⁾、その様な考えが当時の状況を現しているならば、壺とは異なりさらに下層の小百姓以下の階層にも流布していたものと推測できなくもない。壺は東海諸窯の補完品として生産が行なわれたもので、片口鉢も広域流通品の模倣として生産が始まったものと推測できる。しかし、在地産の流布しない地域である南関東、甲信地域では中世前半には在地産の片口鉢・播鉢は存在しておらず、常滑などの製品に大半を頼ったものと推測されている。そして、貯蔵具と異なり、低階層まで流布していたと考えられている。西日本・東日本を問わず、少なくとも13世紀後半には広域流通だけでなく、狭域な流通を目的と播鉢生産が始まっていることがわかっており、北関東を除く、関東周辺のみ空白が認められることは、現在まで資料が検出されていないものか、また、十分な常滑等の製品の大量搬入があったものと判断せざるを得ない。

基本的に須恵質のものはほとんど認められない。瓦質のものが主体で、僅かながら土師質のものもある。壺に認められたような上野、武蔵両型のように、地域で明確な分離を行なうことは出来ない。

口縁部の形状は大きく3タイプに分けて考えられる。一つは端部を上方に尖ぎみにつまみ上げ仕上げるもの、一つは口唇部を内側に僅かに折り曲げやや丸みをもつもの、また端部を方形

に仕上げるものなどが見られる。これらの中で最後のものは後出する器形と考えられる。前二者については的確には把握できないが、内湾ぎみのものが後出のものと判断した。成形は粘土紐巻上げまたは輪積みによるものである。体部は、一部にナデなどの整形が加えられるが、基本的にあまり器面調整がおこなわれていない。底部は糸切り痕を残し、底部周辺をケズリ整形する。13世紀から14世紀にかけ常滑の片口鉢の搬入はあるが、明らかに14世紀から15世紀前半にかけての時期にはその搬入数は減少する。この製品は常滑の補完品としての役割が極めて強いものと推測されることから、実年代は13世紀末から14世紀前半に出現して、14世紀末から15世紀前半に隆盛するものと思われる。⁽⁸⁾

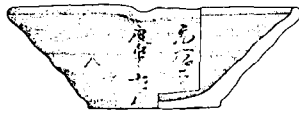
鋤柄氏はこれらの北関東の瓦質土器、須恵質土器について次のように述べている。⁽⁹⁾「小形壺に関しては常滑窯三筋壺または壺形態に近い。さらに、これらの土器を広域流通品の模倣として把握し、西日本以上に複雑な様相を示している。そのありかたとして考えられることは、器種別に模倣が異なる場合（鉢は須恵器、壺は瓷器など）、同一器種内で模倣系の変更が見られる場合（鉢が須恵器から瓷器へ）、同一製品が複数の模倣を採用している場合（魚住窯型三口鉢）、同一製品に二次的な模倣系を設定できる場合（畿内瓦器の模倣）等である。そして、その原因については西日本と異なり、原形の入手が困難であった故の結果であろうが、現象としてこの時代を、またはこの状況を意識することによりすなわち模倣系土器生産の終焉に近似的な色彩を抽出することが出来るかもしれないのである。」

この中で氏は在地土器の壺・片口鉢を仮定として西国の東播系などの製品を含めた模倣系の可能性を示している。しかし、これらの考えについては正当に評価出来ない点がある。先ず、鋤柄氏も述べているように、魚住、珠洲を考えたとき、距離的に確かに離れすぎている事実に加え、北関東地域に現在まで確認されている両窯の製品を見て頂きたい。両者とも僅か数点である。珠洲の甕は一点、魚住窯の製品は甕が一点、その他は播鉢が2、3点である。このような製品に対して、圧倒的な量の常滑、古瀬戸、渥美等の東海諸窯の搬入の事実があり、一概に模倣の祖形が少ないわけではない。

ただ、常滑製品と決定的に異なる点は、高台の無い点である。この点を考え合わせるならば、鋤柄氏の言うように体部形状、口縁部形状は魚住窯、珠洲窯の製品に確かに類似性が認められる。しかし、模倣を考えたとき、西日本の土器との器形上の類似性のみで、果して模倣関係を関連づけることが正当なのか判断しかねる。また、胎土の悪さが、高台を付けることによる耐久性の低下をもたらすことも想定でき、一概に西日本との模倣による類似性でなく、結果として類似したものが生まれた可能性もある。いずれにしても東日本では、中世全般を通し、在地産の瓦質の壺、片口鉢がまとまって生産された例は現在のところ北関東のみであり、特殊な状況と判断できなくもない。今後、生産跡の解明、また製作工人をどのように評価するかによって、土器の評価を明らかにすることが出来るものと推測される。

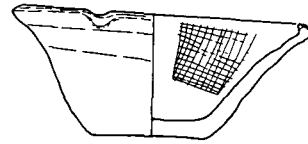
1300年

上野



長楽寺遺跡

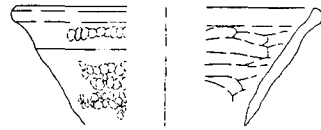
武蔵



東谷中世墓址

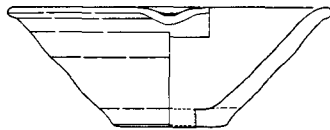


吹屋遺跡

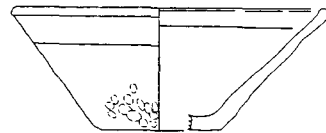


皂樹原遺跡

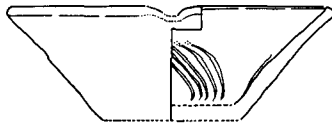
1400年



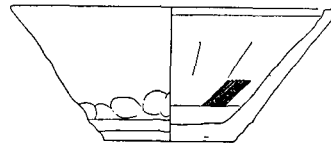
下佐野遺跡



皂樹原遺跡

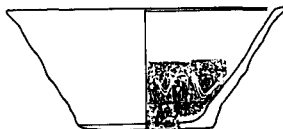


御布呂遺跡

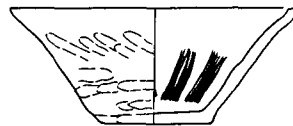


岩比田遺跡

1500年



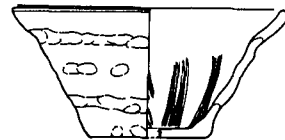
浜町屋敷内遺跡



花崎遺跡



浜町屋敷内遺跡



花崎遺跡

0 20cm

第7図 上野・武蔵の片口鉢・播鉢の変遷（註8文献他より作製）

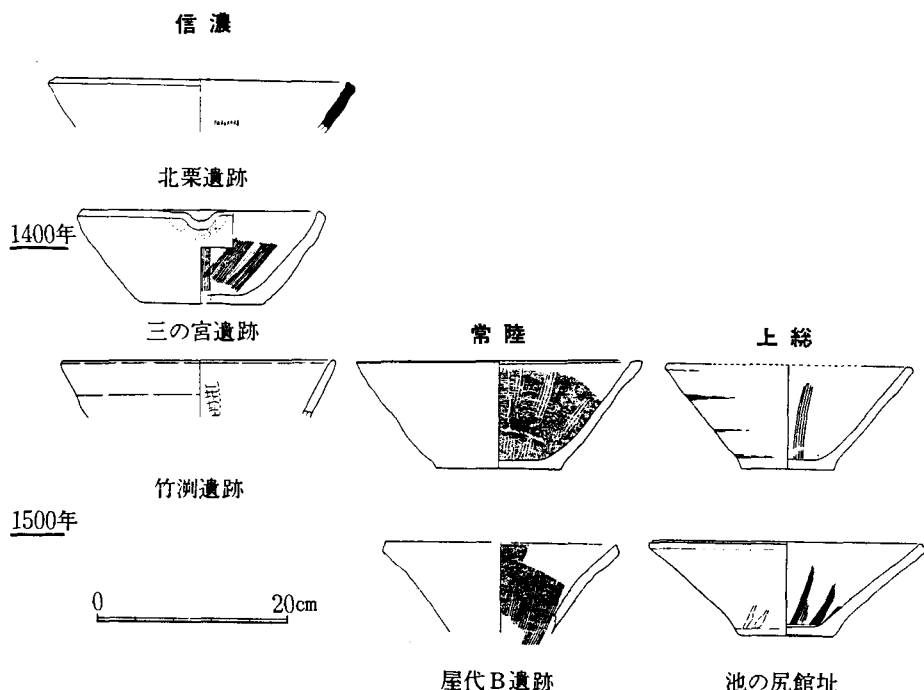
イ 播 鉢 (第8図)

片口鉢の分布がかなり限定されていたのに対して、播鉢は関東でも広範囲に認められる。そこで出土国別にその特徴について見てみたい。

下総⁽¹⁰⁾ 池の尻館跡を始め、在地産の製品の出土件数が増えつつある。池の尻の製品を見ると瓦質のものと土師質のものがあるようだ。形態の上での器高の低いもの、高いものとに分れるようである。口唇部に溝を有し、器内面には7、8条の播り目を有する。15世紀後半には出現し、16世紀にかけて存在したものと推測される。

常陸⁽¹¹⁾ 常陸でも南の霞ヶ浦周辺での遺物の検出例が多い。竜ヶ崎市にある屋代B遺跡の資料が比較的まとまりをもっている。器内面には5本の播り目をかなり細かく施している。胎土はすべてのものに多量の雲母が混入しており、土師質で赤褐色を呈する。共伴する鍋も同様であったが、両者とも瓦質のものはない。年代は15世紀中頃から16世紀前半にかけての時期が考えられる。16世紀後半段階は良くわからない。常陸でも南の霞ヶ浦付近で、下総境の資料が多いことから、下総の遺物との比較検討が必要かもしれない。

相模・南武蔵⁽¹²⁾ これらの地域は14世紀段階以降の遺跡調査例としては相模では小田原、南武蔵でも多摩丘陵周辺で比較的多く行なわれている。北武蔵などの地域に比して在地産の検出例は少なく、相模の方では内耳鍋とともに検出例をほとんど見ない。南武蔵では、葛西城で出土している。その製品は播り目は9本単位で17、8本施され、灰褐色で良く燻べられた瓦質土器



第8図 各地の播鉢の変遷 (註11・15文献他より作製)

もあるが、大半の在地産播鉢は土師質のものであった。搬入品としては大窯製品が多く認められ、在地産と搬入品の割合では大窯の方がはるかに多いように思われた。15世紀後半から16世紀前半の時期のものであろうか。

下野 播鉢は瓦質のものより、土師質の製品の方が目に付く。下野の南部地域を中心に多くの遺跡から検出されている。⁽¹³⁾口唇部を僅かに窪ませるものが主体である。口唇部を内側に僅かに折るものなどもある。瓦質のものもあるが、土師質に近いものが多い。

北武蔵・上野 15世紀中頃から後半にかけての時期に播り目の無い片口鉢から播鉢に転換するものと思われる。初期の播鉢は瓦質のものが多く、大きめで体部の開きも緩やかである。口縁部には片口鉢に見られたような、内側にやや折れるものもある。

15世紀後半以降になると口唇部が平坦となり、縁帯部に溝をもつ形状となる。器内面の播り目は縦方向に入れるもの、交差させるもの等様々である。また、製品としては瓦質のものが圧倒的に多いように思われる。

16世紀に成ると次第に製品のばらつきが見られる。前代に比してやや小振りのものが多くなり、体部の立上がりが急な製品が多くなる。瓦質のものより土師質のものが主体となってくる。底部の整形は、私市城跡の資料を観察した限りでは、片口鉢の様な糸切り跡は認められず、丁寧なナデが施されている。次第に製品に歪みの著しいもの多くなり始めるが、粘土紐輪づみ成形の後、ロクロなどによる成形が十分成されなかった結果が底部のナデ整形を行う点や形状の歪さに現れたのではないか。また、糸切りの全く認められない点から、片口鉢とは成形および整形方法に変化があった可能性もある。

関東各地の播鉢を見たが、概略すると次のようである。

15世紀中頃から後半にかけ、片口鉢は播鉢に転換する。播鉢の初期形態のものは片口鉢の後半代のものに類似する。片口鉢から播鉢への転換は、明らかに東海諸窯の搬入品の変化に呼応するものである。常滑の片口鉢の搬入は14世紀以降減少することは遺跡での出土例で明らかであり、また、古瀬戸後期の土器生産の変化は明らかに消費地でも現れており、⁽¹⁴⁾15世紀中頃以降さらには大窯段階に至るとおびただしい数の播鉢が搬入されており、この状況に呼応して、在地産の播鉢が搬入播鉢の補完品として生産されたものであろう。

この播鉢は、初期の製品は片口鉢からの転換であることから、類似点が多く、例えば瓦質の焼き上がりで、口縁端部が内側に僅かに折り曲る形態のものである。そして口縁部の一端には同様に片口を付している。次第に口縁端部は平坦な縁帯をもつ形状へと変化をする。器高と口径の長さの比がおよそ1対3ほどあり、やや偏平な形状を呈する。16世紀段階になると次第に瓦質のものは無くなり、土師質のものが主体となる。口径と器高の比がおよそ1対2ほどとなり、深めな感じの形態に変化する。口縁端部の縁帯に僅かに溝を有するものが主体となる。ほぼ16世紀後半まで継続的に使用されている。ただし、常陸・下総などの地域では片口鉢の発達

がほとんどなかった地域では、その出現は15世紀中頃以降で、最初から土師質と想定される。

(2) 信濃（第8図）

研究者間で多少見解の異なりがあるが、須恵質と土師質（瓦質）の播鉢と片口鉢の存在が確認されている。須恵質のものは底部は砂底と報告されている。⁽¹⁵⁾ 体部外面下半は工具により、縦のナデが施され、口縁部は横ナデが施されている。口縁端部は個体差もあるが、概して肥厚するものが多く、内側に折れ曲る形態が目につく。須恵質のものは14世紀に出現する。土師質のものは、体部外面は指オサエののち不定方向のナデを行なうが、底部下半は須恵質に見られる幅広のナデは認められない。底は砂底である。口縁部は須恵質に類似する。土師質製品も15世紀段階に出現したとの認識である。そして、古瀬戸、大窯製品の多量の搬入の前に次第にこれら在地の製品は消滅して行ったとされる。

鋤柄氏は北信、東信地域を珠洲の流通圏と考え、中信、南信地域を常滑・中津川などの東海製品の流通圏と考えた。⁽¹⁶⁾ その両者の接点付近で在地産の播鉢が分布することを述べている。最近の調査例をみても基本的に松本平を中心に在地産の分布があるようだ。

須恵質の胎土分析なども行なわれているが、須恵質製品が果して在地産であるかは疑問の余地もあるようだ。土師質のものの中には、内耳鍋と同じ焼き上がりのものもあり、内耳鍋と同一工人が作成したものもあるようだ。これらの製品は胎土分析の結果からも在地産の可能性が示唆されている。⁽¹⁷⁾

土師質もしくは瓦質の製品は、基本的に珠洲系の播鉢の模倣の中から派生してきたものと推測されるが、中に掘り目を有しない片口鉢の存在を認められ、一概に珠洲系の影響のみとは言えない。また地域的に諏訪周辺でもこの在地産の片口鉢の存在があり、なおさら東海系との関わりの方が近いと思われる。

いずれにしても模倣の時期は模倣の祖型が隆盛する段階から同時期かさほど離れない時期を考えるべきで、例えば三の宮の土師質の製品などは15世紀でも早い時期か14世紀に位置付けても良いのではなかろうか。

在地産の中で変遷がある程度把握できることは消費に裏打ちされた生産の継続性があることであり、その中ではじめて在地産製品の変化があるわけだ。十分資料が把握できていない現状では、須恵質播鉢から土師質播鉢へと変化を想定するには、資料的に不十分と言わざるを得ない。

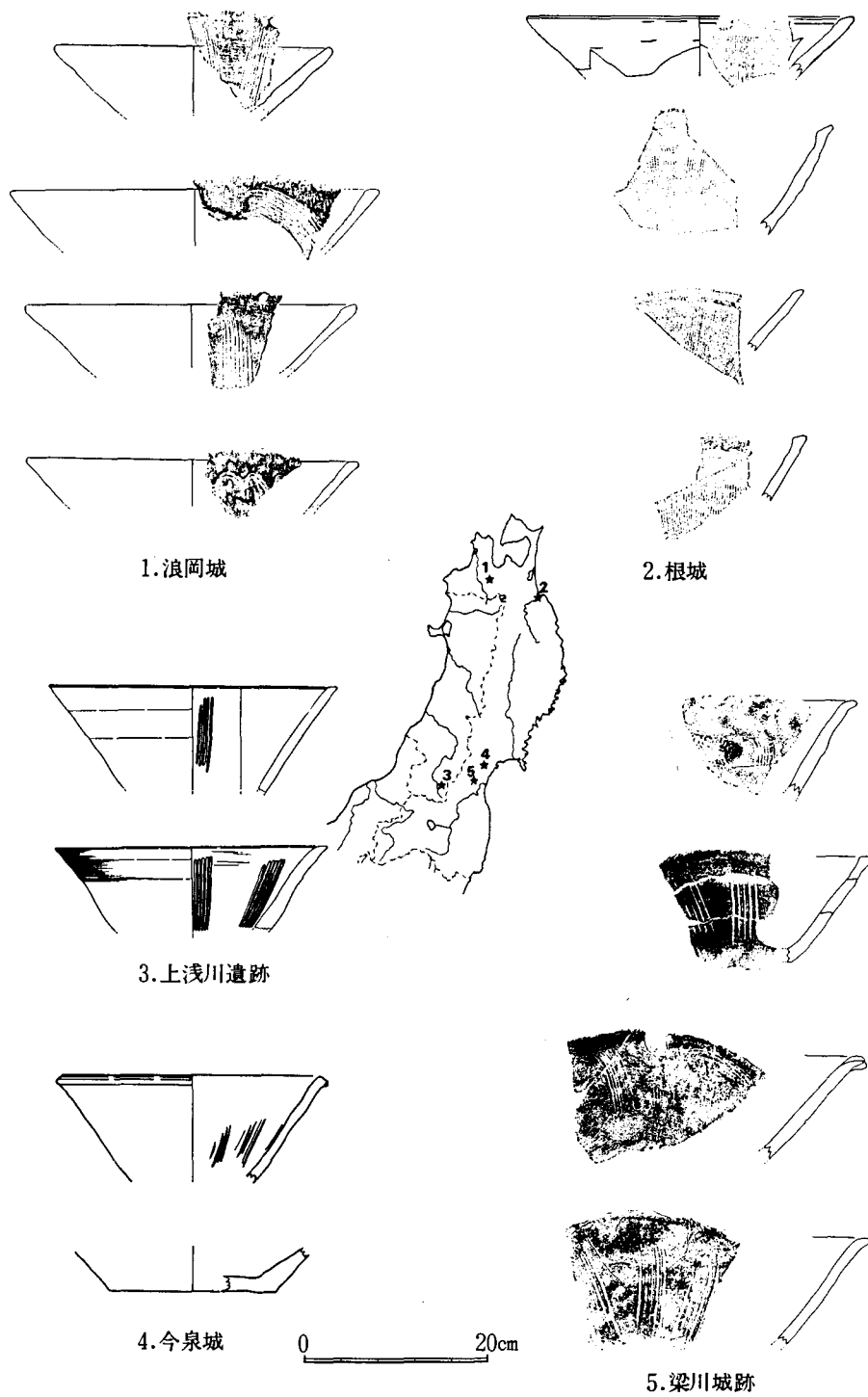
しかし、この地域の特徴的な一つは16世紀代の在地産の播鉢の存在がほとんど確認されていないことである。松本平のみならず、東信の大井城、⁽¹⁸⁾ 塩田城、⁽¹⁹⁾ 南信の各地で検出されている城跡等の調査でも同様の結果を得ている。北関東ではこの内耳鍋と播鉢の共伴は至極、普通の現象と捉えられるが、むしろ大窯の播鉢が共伴する場合の方が多い。この事は信濃の中世後半の在地土器生産を考える上で、大きな特徴の一つでもある。

(3) 北東北地方（第9図）

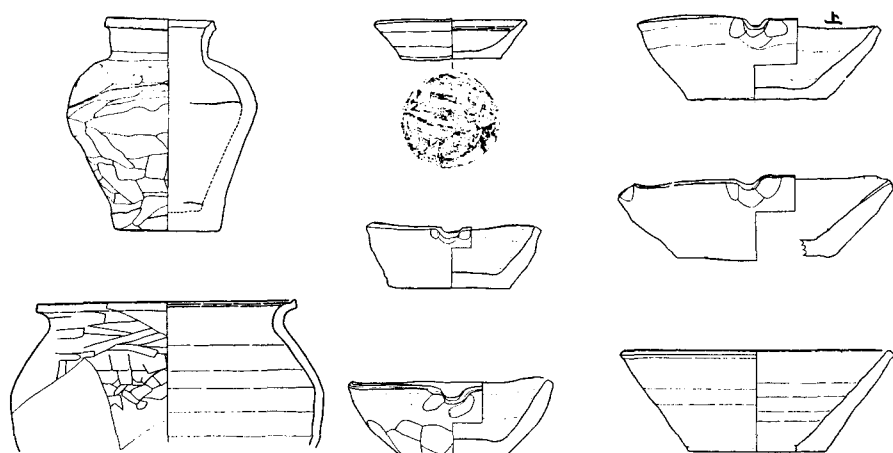
東北北部の日本海側では15世紀代は圧倒的に珠洲製品が搬入されていることがわかっており、その比率は国産貯蔵・調理具で尻八館が72%、境関遺跡で93%であると言う。その中で、さらに片口鉢の占める割合は尻八館で83%、境関で77%と高い比率を占めることがわかっている⁽²⁰⁾。16世紀になると異なる様相を示すことが知られている。それは、珠洲窯自体の変化も在り、広域流通品としては次第に、越前窯製品が増加してくる。しかし、それにも増して、瓦質の生産地不明の播鉢が大量に検出される。浪岡域では産地不明の播鉢で、実に播鉢全体の八割近くを占めている⁽²¹⁾。口縁部の形状、焼成等に幾つかの変化が認められるが、概して器壁が厚く、器表面を真黒に仕上げたものもある。播り目も器内に非常に細かに縦方向に施したものが多く、口縁部付近に波状に加えられたものもある。この様な在地産と思われる播鉢は、北陸・東北各地で珠洲および越前播鉢をモデルとして生産されたものと推測される。しかし、出現の時期と以後の推移は不明な点が多いとされる⁽²²⁾。東北太平洋側青森から岩手にかけての地域は基本的に15世紀代に珠洲等の製品が僅かに搬入されているが、その他の資料も極めて少ない。16世紀代は根城では大窯や備前の播鉢、また産地不明の瓦質と思われる播鉢が検出されている。瓦質の製品は量的に決して他の製品を圧倒する数ではなく、大窯製品同様に客体的なものと考えられる。すなわち、生産地を控えているならば、遺跡の中で瓦質の播鉢が占める割合が他の産地のものを圧倒するほどの量の検出があってもよい気がするが、それほど出土量でもない。この事は、他の東北各地と異なって、この地域のみ中世前半に中世窯の成立が認められなかった地域であり、中世後期に至っても生産活動を開始する下地がなかったのではなからうか。さらに、言うならば、中世初期より、瓷器系と須恵器系の二系統の製品が継続的に搬入された地域とも推測できる。

(4) 南東北地方（第10図）

すでに知られているように、宮城、福島両県にかけ瓷器系の在地産窯跡の確認がなされている。そのような中で須恵器・瓷器折衷型の飯坂窯を除き、その他の瓷器系生産地の実態が次第に明らかに成りつつある⁽²³⁾。八郎窯跡群⁽²⁴⁾、大戸窯跡群などは少し先行する様であるが、ほぼ13世紀中頃から14世紀前半に比較的短期間に営まれたものと推測されている。窯跡では主に片口鉢、壺、甕を主体として生産が行われているが、窯跡によって組成の比率が異なるようであり、飯村氏は「これは単なる資料的な制約の問題なのか、それとも東南北部の諸窯として十把一からげに論ずるのではなく、この地域内での生産器種の相違が何等かの小地域差ないし小地域分業が在ったのかなどの検討を要する今後の課題と言える。」と述べている。さらに、これらの製品を常滑などの広域流通品を補完する形で生まれた一国・半国程度の狭域流通と述べて、消費地での器種の比率や他の窯製品との競合関係も可能性があり、その辺りの解明の必要性を説いている。実際、八郎窯の製品については福島県の梁川城跡、国見町金谷館跡など福島盆地を⁽²⁵⁾

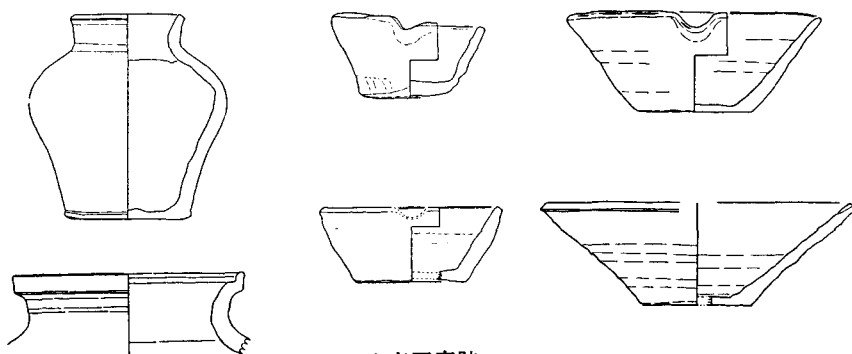


第9図 東北地方における15世紀後半～16世紀の在地産播鉢（抱註21・25文献他）

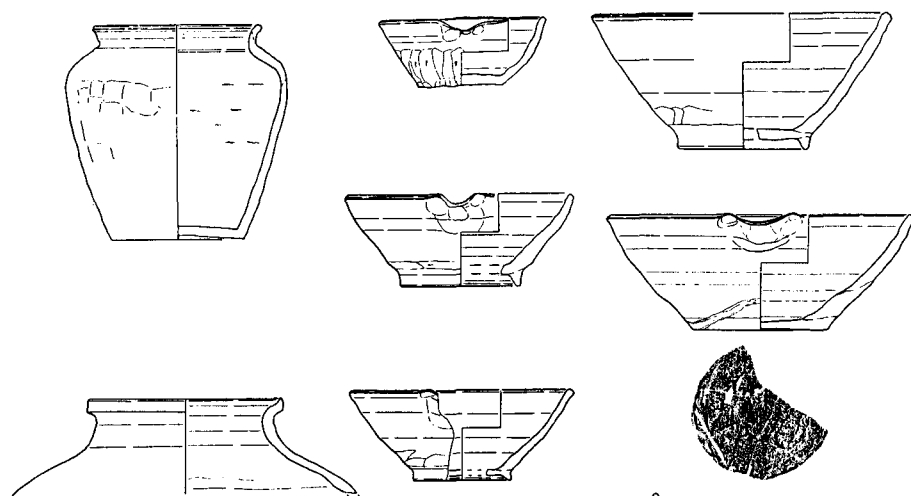


0 5 10 20 30cm

熊狩窯跡



多高田窯跡



八郎窯跡

0 20cm

第10図 東北中世窯出土遺物（拠註22・26文献）

中心に供給されていたようであるが、宮城県の三本木窯跡群の多高田窯⁽²⁶⁾の製品も宮城のみならず、福島県に至る地域にまで分布することが知られている。また、これら瓷器系諸窯に先行する折衷窯の飯坂窯の製品については、平泉の柳之御所にも類似品が出土しているようであり、これらの製品が広域流通品の補完として重要な役割を担っていたことは容易に推測されるものである。

さて、仙台から福島にかけての地域については、極めて量的には少ないが15世紀から16世紀代の播鉢が梁川城⁽²⁷⁾、今泉城⁽²⁸⁾、新田遺跡⁽²⁹⁾などから検出されている。いずれの製品も瓦質もしくは土師器であった。その特徴は、幾つかの口縁部の変化と、播り目の形状にある。口縁端部が内側と外側に少し張出す形状、口縁端部が外側に張出す形状のものなどがあるが、後者のものが多い。器内の播り目は5～8本単位で基本的に縦方向に施すが、なかに口縁部下に波状に横位に施すものも見られる。この傾向は東北北部の播鉢に多く認められたもので、一つには珠洲の製品に普遍的に認められたものであることから、成立段階に珠洲の影響があった可能性もある。器壁は比較的薄く、黒褐色を呈する瓦質のものが多いが、黄褐色の土師質のものも見られる。この点は北関東のあり方と類似する。しかし、北関東などと比較したとき、先の東北諸窯の瓷器系の諸窯が遅くとも14世紀中頃には消滅するわけだが、その後、普遍的に集落などの遺跡で播鉢などが検出され始めるのは15世紀中頃のことではないかと思われる。そうなると、瓷器系製品消滅以降少し空白が生じる。

しかし、最近の調査が行われている大戸古窯のなかでは、新しい窯跡は14世紀後半から15世紀前半に位置付けられている。新しい時期とされる窯の調査は未だ行われていないが、このような例から考え、15世紀段階に瓦質の播鉢に転換した間まで、さほど年代的な空白を想定しなくてもよいのかもしれない。新田遺跡などの資料中には極めて焼成の良好な焼瓦質播鉢と認定できる製品の検出が認められ、瓦質土器とするより、焼の悪い陶器と表現できる製品もあり、年代的に検討の余地がある。この点は、今後、さらに14世紀から15世紀に至る生活遺跡の調査の進展をみて考える必要がある。

(5) 鎌倉

消費遺跡としての鎌倉は12世紀から14世紀前半代にかけて継続的に西日本を中心とした生産地の須恵器、陶器を中心とした焼物に頼った状態に終始した。これは、まさに鎌倉が遠隔地間流通の核としての存在であったわけであるからだ。時期によって異なりを示すが、初期の段階では、常滑および山茶碗系の片口鉢を主体として、時期が下るとともに東播系のものや備前などの西国の製品の搬入が認められ、流通の発達と、都市としての消費形態を具備した鎌倉の複合的な食器構成が顕著に現れている。

2 小 結（第11・12図）

前段まで、各地の片口鉢、擂鉢の大まかな変遷と分布について見てきたが、ここでは簡単にまとめてみたい。

東北北部日本海側においては、時代とともに珠洲、珠洲系、越前の広域流通圏に組込まれ、在地産の擂鉢生産については終始主体的活動が見られなかったことが特徴であるが、浪岡城などに見られるように16世紀段階に越前などに混じり、生産地不明の瓦質の擂鉢が存在しており、新たな資料の集積をもって分析がなされるべきだが、多分に在地製品の存在が大きかったと思われる。

12世紀以来、東海諸窯の流通圏に組込まれていた東北南部も、東海諸窯の補完品として、13世紀後半の瓷器系を主体とした生産が始まった。しかし、この瓷器系製品の生産地も14世紀中頃には次第に姿を消してしまう。その消滅以降、15世紀後半までの100年近い間は、明確な在地産片口鉢の資料の認定が難しいとされている。しかし、先にも述べたように、大戸などの窯の年代が14世紀代の後半まで下がり、14世紀から15世紀代の資料が明確になってからの事かもしれないが、一つの可能性として、この時期の全国的な転換に合致し、陶器生産工人が瓦質の擂鉢生産などに転換した可能性が想定できなくない。

また、16世紀段階になると形態の上では大窯の擂鉢に類似したものもあり、模倣の祖形に大窯製品なども考えられなくはない。しかし、この地域の15世紀から16世紀にかけての在地擂鉢の遺跡の幾つかを見ると、数量的な把握までは十分でなかったが、大まかに見て、擂鉢の量は在地産が北関東のように遺跡全体の5割以上を占めるようには思われず、その割合は少ないような印象を受ける。

関東甲信地域に見られる片口鉢の出現は13世紀末から14世紀初期に出現し、14世紀から15世紀にかけて生産されたものと思われる。分布のあり方は、各地に普遍的に生産地を想定できるほどの広域的な分布状況は把握できない。上野、北武蔵、下野の三国に限定され、壺同様地域限定での東海諸窯の補完品としての位置づけができる。壺と異なる点は、きわめて日常的な製品であることだ。そのため、生産工人を支配したと推測される体制の変化があったとしても、需要に変化はさほどない。むしろ14世紀代の常滑製品の供給減少は、生産の拡大に一層拍車をかけるものであったと推測される。

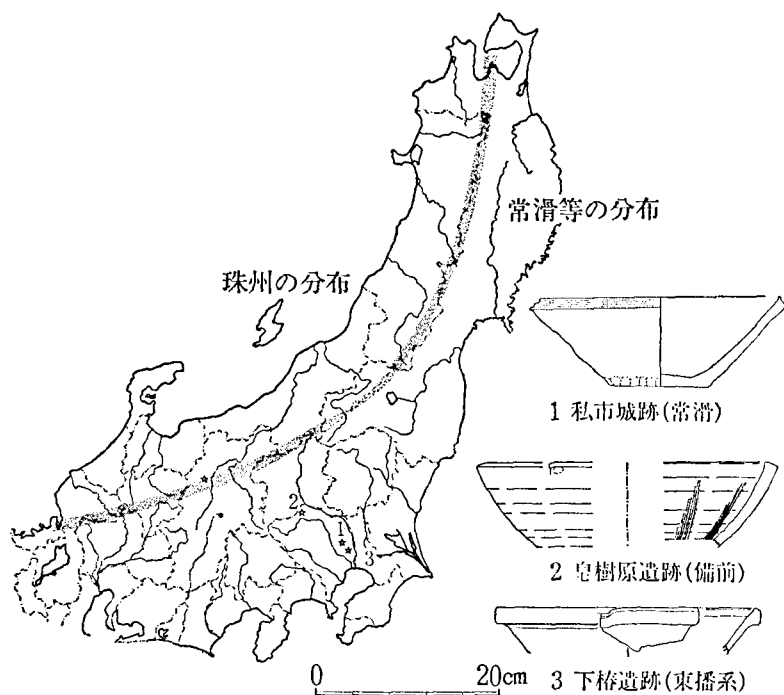
一方、全くと言って良いほど中世前半において在地産の片口鉢を出土しない南関東、下総、安房、上総、常陸などの地域ではどのように考えたらよいであろうか。服部氏は南関東のこの時期については、常滑等の片口鉢、備前の擂鉢、瀬戸の卸皿を想定されていた。⁽³⁰⁾しかし、その量は少ない。いずれにしても、在地産のものが無いことが想定されるならば、この地域は広域流通品によって賄われていた可能性が高い。その一つの理由には度々述べるように、沿岸地域

であることから、海上流通により製品の大量搬入が想定されることは、鎌倉同様に13世紀から14世紀にかけ南関東全般の動向と考えざるを得ない。

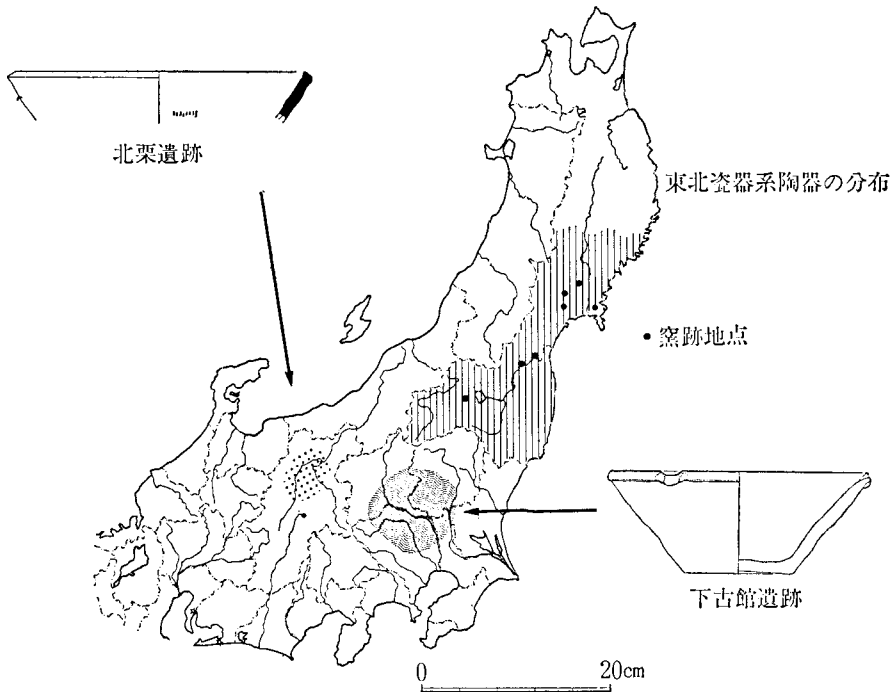
15世紀代でも中頃以降になると瀬戸の播鉢の大量搬入が行われ始めるが、それら搬入品にもまして在地の播鉢が各地で確認され始める。その地域は従来片口鉢の生産を行っていた地域に加え、下総や常陸でも確認でき、また東北南部の地域でも検出される。関東に認められる在地系に播鉢は瓦質のものと土師質のものがあり、初期のものほど瓦質のものが多く、時期が下るとともに器高が高くなることは先に述べたが、当時の大量搬入が認められる古瀬戸、そして大窯製品を模したものと判断できる。

このような一国ないしは半国程度の分布を示す播鉢生産は、西国では比較的普遍的に認められている⁽³¹⁾。その背景には、領国経済的生産物と考えられ、狭い範囲での流通状況を呈している。

従来から片口鉢の生産を行っていた地域などでは生産の系譜を追うことは比較的容易であるが、他地域ではどのような系譜の基に生産が開始されたのか、この点が問題である。西国でも地域的には従来からの瓦器生産工人、須恵器工人などの変質が想定される地域が多いがそれでは収まらない地域もあるようで、同様な点が常陸や下総で指摘できる。常陸で出土する播鉢は、内耳鍋同様にすべて土師質である。北関東などのように前代からの瓦質的なものがほとんどないことから、土師器工人による播鉢生産が想定できる。下総においても実見資料がないため断



第11図 14世紀の広域流通の片口鉢・播鉢（武蔵国出土の搬入品）



第12図 14世紀の在地産片口鉢・播鉢の分布

言はできないが、報告書などでは土師質のものが多く、常陸同様な状況が想定される。土師器工人と明記したが、土師器工として位置づけられる工人は土師器の供膳具を生産していた者達だけである。この工人系譜の解明は今後の課題である。

また小田原に近い南関東においては、流通体系も比較的整備されていたためか、古瀬戸・大窯の播鉢は多く認められるが、在地産の製品は全く認められない。階層差とも想定されるが、例えば同じ後北条氏の関連遺跡である八王子城では在地産の播鉢・鍋など認められないが、同時期北武蔵の私市城、花崎城などでは在地産の播鉢が多く検出される。さらには上野でも北武蔵同様に多くの類似した在地産の播鉢が認められ、一概に領国経済のなかに包括的に土器生産が行われたとも言いきれない状況も認める必要がある。

註

- (1) 荻野繁春 『財産目録』に顔を出さない焼物』『国立歴史民俗博物館研究報告』25 1990
- (2) 水口由紀子 「考古遺物からみた中世成立期の様相」『文化財の保護』21 1989
- (3) 河野真知郎 「シンポジウム収録 古代末期から中世における在地土器の諸問題」『神奈川考古』23. 1986 鎌倉時代においても山茶碗が同様な使われ方をしたと述べている。
- (4) 基本的に北関東の上野・武蔵・下野の三国で、これら以外ではほとんど認められない。
- (5) 鎌倉における出土が圧倒的に多いが、最近、南関東を中心に出土量が増しつつある。
加藤修他 「中・近世陶磁器から見た多摩ニュータウン遺跡の様相(1)」『東京都埋蔵文化財センター研究論集』V 1987 などの資料がある。
- (6) 浅野晴樹他 「伝島山重忠墓」1984
- (7) 前掲註1文献。

- (8) 木津博明 「上野国分僧寺・尼寺中間地域」『関越自動車道（新潟線）地域埋蔵文化財発掘調査報告書』12 1986
木津博明 「上野国に於ける在地生産土器に就いて」『中近世土器の基礎研究』V 1989
浅野晴樹 「関東における中世在地産土器について」『財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団研究紀要』4 1988
- (9) 鋤柄俊夫 「北関東における平安時代以降の生産と流通の諸段階Ⅰ（在地土器を中心に）」『中世土器研究』第52号 1988
- (10) 中の遺跡調査団 「下総国四街道地域の遺跡調査報告書」1986
- (11) (財)茨城県教育財団 「屋代B遺跡Ⅰ」『竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書』13 1986
(財)茨城県教育財団 「屋代B遺跡Ⅱ」『竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書』15 1987
(財)茨城県教育財団 「屋代B遺跡Ⅲ」『竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書』17 1988
- (12) 葛西城址調査会 「葛西城」1983
- (13) 上三川町教育委員会 「大町遺跡」『上三川町埋蔵文化財調査報告』5 1985
橋本澄朗他 「石那田館跡」1975 ほか
- (14) 藤沢良祐 「古瀬戸中期様式の成立過程」『東洋陶磁』8 1982
- (15) (財)長野県埋蔵文化財センター 「中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書」4『(財)長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』4 1990
- (16) 鋤柄俊夫 「中世信濃における土器・陶磁器の諸様相」『信濃』38-4 1986
- (17) 前掲註15文献
- (18) 佐久市教育委員会 「大井城跡（黒岩城跡）」1986
- (19) 長野県文化財保護協会 「塩田城跡」1982
- (20) 吉岡康暢 「北東日本海域における中世陶磁の流通」『国立歴史民俗博物館研究報告』19 1989
- (21) 浪岡町教育委員会 「浪岡城跡Ⅰ」『昭和60年度浪岡城跡発掘調査報告書』1988
前掲註20文献など
- (22) 東北歴史資料館 「東北の中世陶器」1983
飯村均 「福島県における中世陶器の様相」『東国土器研究』第1号 1988
- (23) 飯村均 「八郎窯跡群」『梁川町文化財調査報告書12集』1987
- (24) 会津若松市教育委員会 「大戸古窯跡群分布調査報告書」『会津若松市文化財報告書』12 1988
- (25) 梁川町教育委員会 「遺跡梁川城本丸・庭園」『梁川町文化財調査報告書』第6集 1986
- (26) 三本木町教育委員会 「多高田窯跡調査報告書」『三本木町文化財調査報告書』4 1978
- (27) 前掲註25文献
- (28) 仙台市教育委員会 「今泉城」『仙台市文化財調査報告書』第58集 1983
- (29) 筆者実見
- (30) 服部実喜 「関東地方における中世土器群の構成とその特質について」『神奈川考古』22 1986
河野真知郎 「鎌倉における中世土器様相」シンポジウム『古代末期～中世における在地系土器の諸問題』『神奈川考古』21 1986 などに触れられている。圧倒的に常滑・山茶碗系製品が多いが、他の土器類同様に在地生産はまず考えられない。そのため、東海諸窯や西国の製品が大量に搬入される。
- (31) 前掲註1文献

V 煮炊具について

冒頭で述べたように、東国の中世土器研究で供膳具とともにこの煮炊具の欠落が最も重要なキーポイントである。

在地生産の煮炊具で特徴的なものとしては瓦質内耳鍋、土師質内耳鍋の分布が中世後半の関東、東海地方を中心に確認されることである。

12～13世紀の中世前半については、在地産、搬入品を問わず煮炊具は極めて不明確である。ただ、最近馬渕和雄氏により鎌倉における煮炊具の研究が報告された。⁽¹⁾ その種類は滑石製石鍋・伊勢鍋といった搬入品、産地の定かでない羽釜・土鍋等、それに鉄鍋を挙げている。意外にその種類が豊富であるのと、また数も多く出土されていることが報告されている。当然周辺の関東各地でも石鍋・伊勢鍋・羽釜などの確認例が増加している。東海地方でも尾張三河あたりまでは地理的な近さもあり、中世前半から中頃までは伊勢鍋の流通圏に組み込まれていたものと推測されている。鉄鍋の発見も次第に増加し始めている。この時期の土製煮炊具の欠落は11世紀後半以降、鉄鍋の使用に次第に転換したことに負うものとする考えが最近強くなってきたが、その一方で、鎌倉以外の地域では煮炊具に限らず、中世前期に遺跡自体も中世後期ほど確認されていない事実も考えてみる必要もある。

中世後半では先の鍋類に加えて、最近辻真人氏により都内の羽釜の資料が紹介されたが、⁽³⁾ 概ね14世紀後半から15世紀代に至る年代のものであり、北関東から信濃にかけては14世紀後半以降内耳鍋が爆発的に検出されるが、この一方で南関東から伊豆、駿河の地域では内耳鍋の確認がされていない状況がある。この地域では先の羽釜が互換製品として発達した可能性もある。

一方東北では、北と南ではかなり様子が異なるわけであるが、北では12世紀以来中世全般を通して土製の煮炊具は極めて少ない。ただ注目すべき点は、内耳鍋についてである。擦文時代⁽⁴⁾の終末期と思われる時期、津軽等では鉄製の鍋とともに土製の内耳鍋が検出されている。この製品については戦前から論議の対象になっており、関東周辺の内耳鍋との比較も行なわれたり、その終末期については年代的な混乱を来している。

東南北部、宮城県、福島県等ではどうか。中世前半では全くと言って良いほど土製の煮炊具は確認されていない。しかし、15世紀段階以降になると鉄鍋等の検出が確認され始め、その鉄製の煮炊具と同じくらい極めて量的には僅かであるが、土製の内耳鍋が検出され始めた。出土地は福島県梁川町、山形県米沢市などである。

1 各地の内耳鍋について（第13図）

大まかに東国の煮炊具の状況について触れたが、中でも内耳鍋が比較的広く東国に分布する製品で、15世紀を特徴づける遺物と言える。そこで、ここでは各地の内耳鍋を中心に触れてみたい。また、この内耳鍋は鉄製鍋との関わりが考えられることから、鉄鍋についても少し触れてみたい。その他の鍋・釜類については十分な資料の蓄積を行っていないため別の機会に行うこととする。

(1) 東海地方

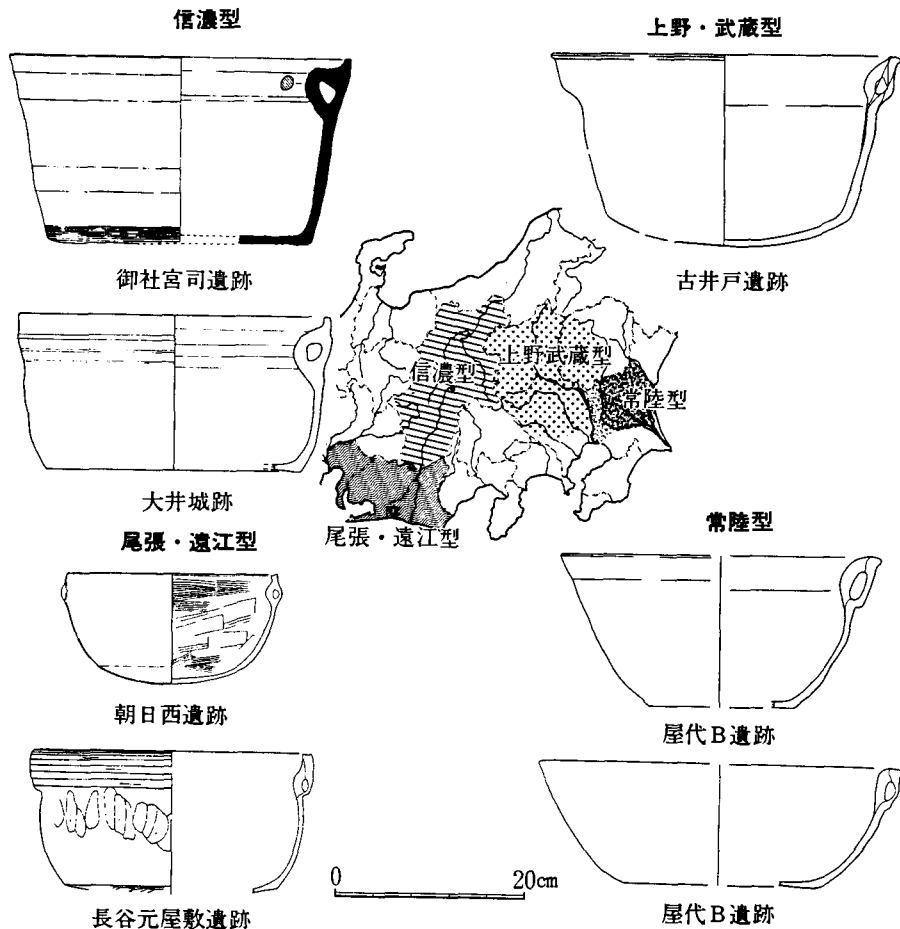
ア 尾張・三河

東海地方でもとりわけ尾張・三河周辺では、中世前半から中頃にかけて伊勢鍋が広く分布して

いた可能性がある。この鍋は新田洋氏の分類による第5・6類であり⁽⁵⁾、13世紀から14世紀代を主とするものである。その後の15世紀代末から17世紀に掛けては内耳鍋・羽釜等の分布が知られるが、いずれも土師質の半球形を呈するタイプのものが多い。

佐藤公保氏の分類では15世紀末に初めて内耳鍋の出現を見るものとして、15世紀代後半までは新田洋氏の言う6類が搬入していたと考えている。そして、15世紀末に出現する内耳鍋は、半球形を呈し、口縁部は直立するものと内湾するものがあり、16世紀後半まで継続的に使用される。16世紀後半から17世紀になると前代に見られた鍋に加わり、浅めのほうろく、羽釜などが加わってくるという。この後、前代に見られた釜類は姿を消し、15世紀末に出現した内耳鍋は17世紀後半まで継続したとされる。

関東周辺の鍋のあり方と比較すると年代的にかなりの異なりがある。例えば朝日西遺跡SD 11の一括資料があるが、ここでは大窯資料と内耳鍋、茶釜形などの土製品が共伴しており、16世紀後半と位置づけられている。



第13図 各地の内耳鍋の分布（拠註10文献他）

形状から見て、次の遠江の鍋と基本的に同一形態として包括してよいものとする。

イ 遠江・駿河（第14図）

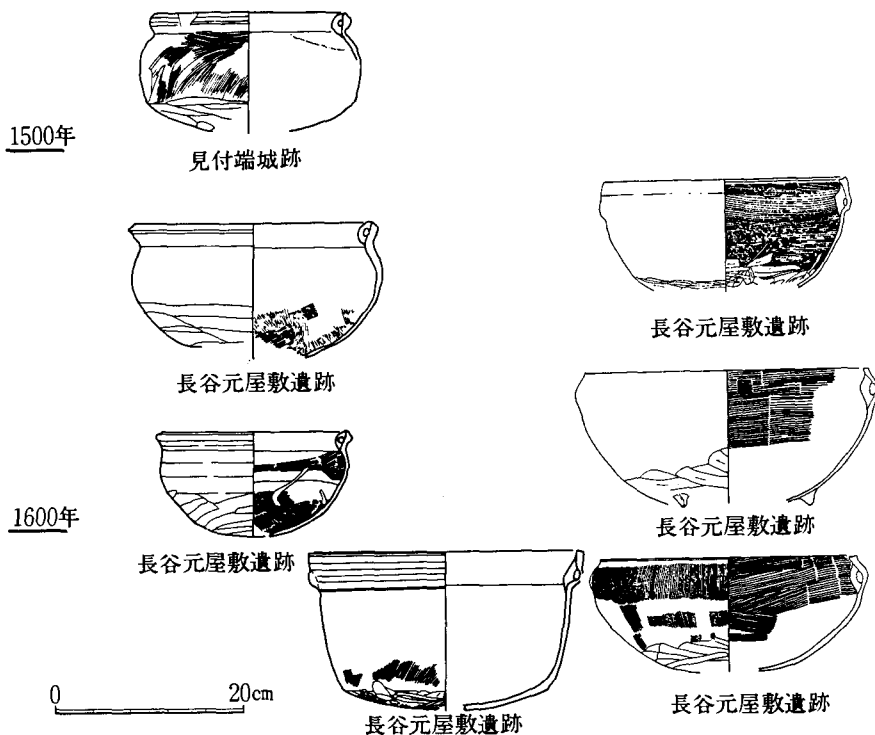
遠江・駿河でも内耳鍋の出土例が極めて多い。⁽⁸⁾とりわけ遠江に分布が著しい。⁽⁹⁾

口縁部が「く」の字状に外反する形態を呈し、丸底のタイプのものと、体部から口縁にかけて内湾し、半球形を呈するタイプとが普遍的に認められる。

基本的に「く」の字状に外反するタイプが初現のもので、次第に内湾タイプに変化するが、「く」の字タイプも消滅せず、共存していたとされる。

初現とされる「く」の字タイプのものは掛川市原川遺跡において古瀬戸後期の製品と共伴しており、15世紀後半代の年代を与えている。消滅は尾張などと同じく17世紀後半頃に置いて、隆盛期は尾張同様15世紀後半以降16世紀代のことである。

「く」の字タイプは、三河でも出土しているが、これは遠江からの紛れ込みと考えられているが、この遠江から三河の内耳鍋の出現は「く」の字タイプをもって考えられるのではないか。鍋の外面にはハケメの調整も見られ、15世紀の前半頃まで搬入されたとされる伊勢鍋に形状や整形が類似する点を指摘できる。また耳の存在などには鉄鍋の影響なくては考えられず。このような模倣のもとに15世紀代に形成されたものである。関東、畿内などが14世紀から15世紀に



第14図 遠江の内耳鍋の変遷（註9文献より作製）

瓦質土器鍋・釜の生産の隆盛を迎えるのに対して、この地域では15世紀代後半代の画期にこの変化を設定されている。土師器製品が主体である点からすれば、15世紀後半に内耳鍋などの出現があっても不思議はないが、他地域に比して鍋の出現が遅すぎることから、今後さらに検討の余地がある。

駿河に関しては資料が少ないが、興味ある事例が長久保城跡で認められた。二の丸と外郭を区切る大溝から大窯Ⅱ、Ⅲ期の製品とともに土師器の羽釜が主体に出土し、僅かに内耳鍋が発見された。一方、伊豆では長久保城跡と同形の羽釜が御所の内遺跡で認められたが、内耳鍋は発見されなかった。調査事例がないので静岡平野以東の状況は不明であるが、駿河東部と伊豆さらに相模にかけては、先に触れたように内耳鍋でなく羽釜が煮沸容器であった可能性がある。

(2) 関東地方

その特徴は基本的に瓦質の焼成であり、土師質に近い製品は比較的少ない点⁽¹⁰⁾が、他地域の製品と異なる点かもしれない。以前、筆者もこの土器の年代について触れたことがあるが、その時はその初現を15世紀中葉もしくは15世紀前葉と考えたが、さらに遡り14世紀後葉にすでに存在した可能性がある。上野、武蔵の資料を中心に少し詳しく分類を加えてみたい。

ア 上野・北武蔵（第15図）

この地域は出土量も極めて多いため、研究はかなり以前から行われ、大江正行氏⁽¹¹⁾、木津博明⁽¹²⁾氏などにより、かなり詳細な分類がなされている。この中で興味ある点⁽¹³⁾がその初現についてである。鉄鍋に祖形を求めていることは一般的であるが、木津氏は唐突に鉄鍋から出現したとは考えず、出現期に同様な器種の存在があるとして、それを土製の盤に求めている。この盤は本来物を盛るものであるが、瓦質のものの中には木津氏の言うように煮炊具に転換したものもあるのかもしれない。例えば上野で検出される盤の中には口縁部付近に有孔のものもあり転用した可能性もあるが、それが普遍的なものへと転換して行ったとは証明できない。また、内耳鍋の耳の付け方について、口縁部の一部に円柱状の棒状工具により孔を上下2箇所⁽¹⁴⁾に施し、この孔にCの字状の断面形の粘土紐を挿入し、脱落防止を兼ね基部の部分を太くして整形して、付したものと考えられている。この点も有孔の盤を受けて成立したものとも判断される。いずれにしても、盤から内耳鍋への生産段階での移行は不明な点が多い。但し、氏を始めとして、内耳鍋の出現背景には食生活の変化などの要因なくして、出現が考えられないと言う指摘があるが、この点は力のおよぶところでないので今回は触れない。

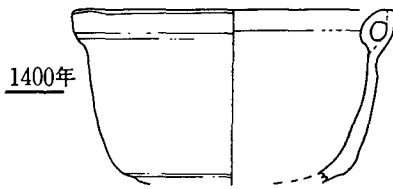
さてこの土製内耳鍋の変遷についてであるが、第15図に沿って述べてみたい。

基本的な流れは資料の豊富な上野国分寺・国分尼寺中間遺跡や北武蔵の皂樹原・檜下遺跡などで詳しい編年が行われている。⁽¹³⁾ただ、皂樹原・檜下遺跡⁽¹⁴⁾に関しては細分に無理な点が指摘できる。

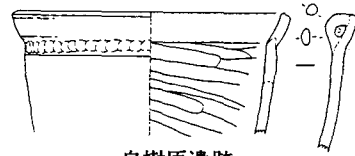
I期（14世紀末～15世紀前半） この時期のものは、口縁部が短く、体部は比較的丸みのもの

上野

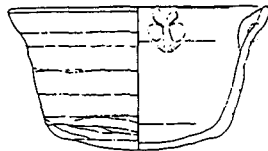
武蔵



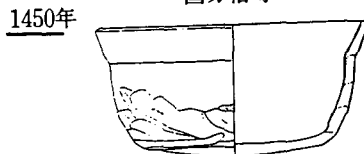
清里・陣馬遺跡



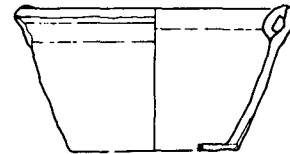
皂樹原遺跡



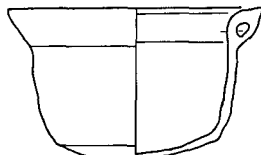
国分僧寺



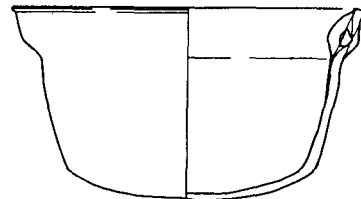
寺の内遺跡



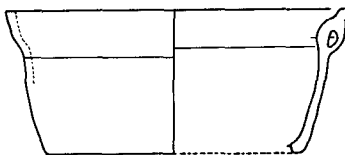
ミカ神社遺跡



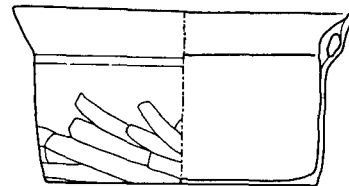
浜町屋敷内遺跡



古井戸遺跡



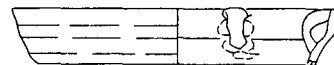
浜町屋敷内遺跡



三ヶ尻遺跡



浜町屋敷内遺跡



花崎遺跡



浜町屋敷内遺跡



花崎遺跡

0 20cm

第15図 上野・武蔵の土製内耳鍋の変遷（註10・11文献より作製）

が多い。耳は小さく口縁端部から丸みをもって付けられている。耳の部分における外形もあまり外に反っていない。焼成は概してよく、良好なものは灰色を呈し瓦質となっている。最終段階の片口鉢に口縁形状が類似することが指摘できる。上野では口縁部の付近が長く外反するタイプをこの時期の新しい段階として位置付けている。

Ⅱ期（15世紀中頃） 口縁部の外半は強くなり始める。器壁は前代と大差無くやや厚めである。体部が前代ほど丸みが強くなり、直線的に立上がっている。この頃片口鉢は擂鉢に転換する。

Ⅲ期（15世紀後半） 口縁部に見られる耳はやや縦長となり、体部は直線的となっている。器壁は極めて薄くなっている。焼成、胎土が前代に比して著しく異なり、やや土師器に近いものもある。鍋の器形に大中小の形態差があったり、底部が丸底のものもあり、鉄鍋を忠実に模倣したものと思われる。一概に鉄鍋模倣が初期の段階とみるのではなく、継続的に鉄鍋模倣を繰返したものともとれる。

Ⅳ期（16世紀前半） 器高もやや低くなる傾向がある。体部は直線的に成っている。焼成胎土はⅢ期と同じである。この時期に、焙烙の初現的なものが出現したと考えられ、この後、近世に至るまで継続的に生産が行われる。

少なくとも、Ⅰ期においては内耳鍋と先に触れた片口鉢は同一工人が作った可能性が高い。しかし、15世紀後半に至ると木津氏が指摘したように、製品に変化が認められる。この時期から16世紀にかけての擂鉢の中には土師質に転換するものもあり、両者が同一工人によるものとは思われなくなり、生産の分業的な兆候が認められる。

下野の製品は土師質のものが多く、形状は上野の製品に比較的類似することが指摘できる。⁽¹⁵⁾

イ 常 陸

常陸でも南部の地域に分布し、代表的遺跡として屋代⁽¹⁶⁾B遺跡がある。雲母混じりの胎土で、割れ口は赤褐色の土師質のものがほとんどである。一部の製品は極めて焼成が良いものも認められた。上野等の製品と異なる点は、体部の開きが大きく、外への開きが顕著である。また、体部が直線的に開くだけでなく、丸みをもって半球状に成るものも多く認められる。底部は離れ砂を使用している。体部の整形は横方向にナデを行なっている。器高は18cm前後のものから10cm前後の低いものもある。体部の形状の異なり、また器高の差などが年代的異なりを示すものかは、現在の資料では判断しかねる。ただ共伴する搬入陶器は古瀬戸後期の製品を主体として、一部大窯製品を含んでいる。このような状況からこの鍋も15世紀中頃を主体とするものと推測される。

この地域に隣接する下野でも内耳鍋の分布が多く確認されているが、主体となる製品は主に土師質のものが多く、常陸などの製品に形状の上で類似する点もあり、上野の中間的な様相を呈する。

(3) 甲 信 地 方

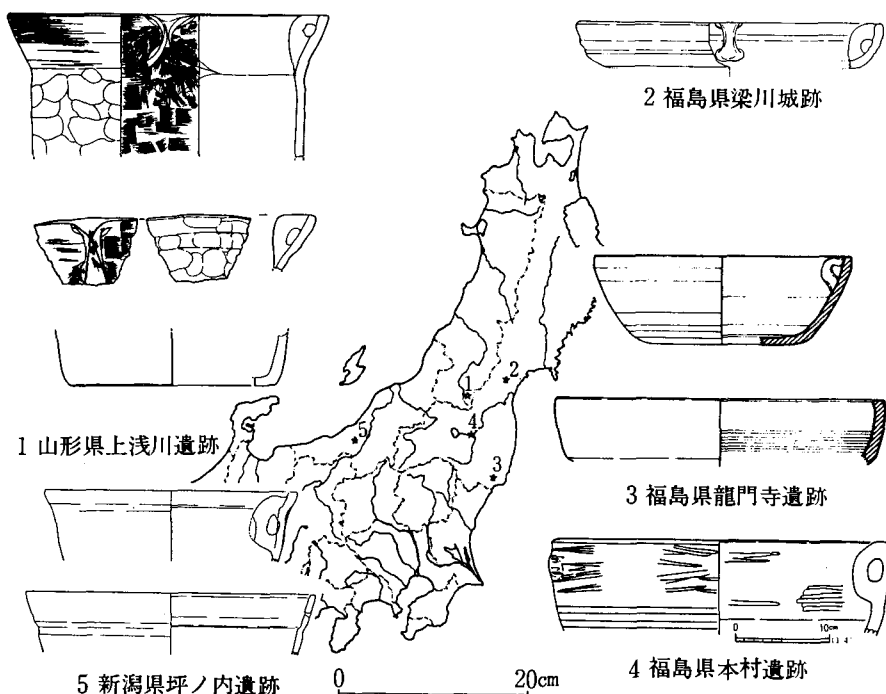
比較的初期の研究としては、小林秀夫氏による御社宮司遺跡での分類がある。⁽¹⁷⁾その後佐久市の大井城等の報告でも編年の考察が加えられた。⁽¹⁸⁾しかし、ここの遺跡では十分な資料も得られないことから編年を構成させるまでに至らなかった。その後松本平を中心に資料の増加もあり、最近の中央自動車道路長野線埋蔵文化財発掘調査報告書4に編年が提示されている。⁽¹⁹⁾以前、信濃の鍋は、15世紀から17世紀にかけて存在すると長野の研究者に伺っていたが、関東の年代とに開きがあった。今回の編年はおおよそ14世紀後半にその初現があり、16世紀中葉まで存続するものとされ、ほぼ関東の編年観と同じような状況である。ここではこの資料をもとに長野の鍋を見てみたい。

瓦質の製品は少なく、形態は関東の製品に近いが、土師質の製品が主体である。三形態五種の分類が行なわれている。Ⅰ類は口辺部を強く「く」の字状に外反させるもので、口唇部は丸みをもたせて面を作らないものと、平坦面をもたせるものがある。Ⅱ類は口辺部内面に工具（あるいは指）によって横方向のナデを行ない、一周する凹凸の調整痕を明瞭に残すものである。この調整痕の凹凸が一周のもの、二周のもの、三周のものがある。Ⅰ類に比して体部が内湾ぎみになるようだ。Ⅲ類は口辺部に一周の調整を行なうが、調整痕が幅広く行なわれ口辺部全体を外へ強く引出している。口縁断面の屈曲が著しい。以上のような分類がなされているが、全体に変化の乏しさも指摘されている。年代は共伴遺物などから15世紀前半から17世紀前半まで存在することが考えられており、Ⅰ類が15世紀前半、Ⅱ類が15世紀中頃から16世紀前半、Ⅲ類が16世紀前半から17世紀前半と位置付けられている。ただし、Ⅲ類については出土点数も少なく年代的に検討の余地がある。焙烙製品が近世段階ではかなり流布するわけだが、北関東などの例を見ると16世紀段階に既に見られることなどから、信濃でも遅くとも17世紀には検出されても良いと考えられる。しかし、Ⅲ類にはほとんど焙烙が共伴していないことから、やはり16世紀前半段階で鍋の終了を考えるのが妥当であろう。

(4) 東北地方(第16図)

東北北部の煮炊具は、冒頭に述べたようにほとんど皆無に近い状況である。その中で、青森県蓬田大館遺跡では、住居跡の覆土から内耳鍋が出土している。口径18.6cm、器高10.4cmを測る。同時にこの住居跡からは、鉄鍋の破片も検出されている。そして、この遺跡の報告では時期を平安時代の後半にしている。11世紀後半から12世紀前半位であろうか、擦門文化のものである。

東北南部では山形県米沢市上浅川遺跡、⁽²⁰⁾福島県の郡山市本村館遺跡、⁽²¹⁾梁川町梁川城等である。⁽²²⁾上浅川遺跡の資料は土師質の製品であり、体部はやや外反ぎみに立上っており、口縁部付近でさらに外に反る。外面は丁寧なナデ、内面もナデが加えられている。梁川の例は基本的に瓦質の土器で北関東の製品に類似するものである。15世紀代後半から16世紀代前半のものであろうか。本村館遺跡の資料は土師質で口縁部の破片である。このように最近、内耳鍋の資料が増



第16図 東北南部・北陸の土製内耳鍋出土遺跡（拠註20・21・22文献）

えつつあり、福島から米沢にかけての一帯は15世紀から16世紀の時期に、土製の内耳鍋が普及した可能性が高かったものと推測される。憶測であるが、関東から甲信地域に分布する鍋と時期、形態の上で類似しており、多分に関東との関係の中での発生した可能性が高いと考えられる。中通りの出土品とやや異なる製品が、浜通りにも存在する。いわき市の龍門寺遺跡出土のものであり、浅めの形態で体部は丸みが強い。前者の製品とは趣を異にすることから近世の製品とも思われる。

(5) 西国における鍋

菅原氏により詳細な分類が行なわれているが、東国と大きく異なる点は、西国全体で古代から中世にかけ量の多寡はあるが、連面と土器製の煮炊具が存在することである。基本的に土師器鍋・釜、瓦器鍋・釜によるものであるが、大和のように土師器製品が中世全般に使用される地域、近江等のように瓦器製品が使用される地域、両者が並存される地域など様々な変化を示している。また、東日本との異なりは釜の発達に極めて多いことである。

2 鉄鍋について（第17図）

鉄製の鍋・釜は、文献によって遅くとも平安時代末期以降、鋳物師により広域的な交易・配給が行なわれていたことが明らかにされつつある。⁽²⁴⁾ また平民百姓の日常雑器の目録の中にも、鉄製と見られる鍋・釜が見出せるにもかかわらず、遺物としてはほとんど発掘されていないの

が現状である。当然、鉄が鋳直せば再利用できる点、また、比較的短期に腐食し、消滅することも誰もが指摘する点である。しかし、想像以上に鉄器の普及があったと考えられ始めている。例えば黒田日出男氏や網野善彦氏⁽²⁵⁾は今昔物語や東大寺文書等から、かなりの低階層まで鉄鍋などの行渡っていた事を述べている。事実発掘の調査例においても鉄鍋類の出土が増加しつつある。また、この鉄製鍋の年代的な位置づけは土製内耳鍋の発生に大に関わると推測されることから、避けて通ることのできない重要なものである。

(1) 東北地方

東北地方の鉄鍋の研究は、北海道を含めて、比較的古くから進められてきた。西日本の鉄生産の研究が、文献に先行される形で行なわれたのに対して、アイヌ文化および擦文文化などの先史文化の年代を模索する過程で内耳鍋とともに鉄鍋の研究が進められ、現在に至るまで模索⁽²⁶⁾がなされている。

最近では越田賢一郎氏により東北北部から北海道にかけて出土した鉄鍋の詳細な研究が発表⁽²⁷⁾されている。中世から近世にかけての鉄鍋を内耳鍋、吊耳鉄鍋、片口鉄鍋に分類し、その年代等について論が進められている。この鍋を出土する段階は擦文文化終末段階以降に大量に搬入されたものと考えられている。擦文文化等の年代については議論が多いわけであるが、越田氏は北海道における内耳鍋の盛行期は15～16世紀と考えられており、擦文終末段階はその直前とされる。

出土品は東北各県で確認されている。その年代は概して古い年代のものが多く、共伴物等から年代の推定できるものが数例ある。岩手県玉貫遺跡⁽²⁸⁾のものは竪穴住居跡から検出されたもので、鉄鍋の他ロクロ土師器、常滑製の甕の口縁部が共伴しており、常滑の甕の形状から12世紀後半代と推測される。最近の調査例では平泉町柳之御所の調査地においても鉄鍋の完形品が検出⁽²⁹⁾されている。この製品は堀跡の最下部層から出土し、地点、層位から12世紀に位置づけて間違いないと考えられている。形状は口径 33.6cm、器高 16.5cm の完形品であり、耳は縦耳で2個一対であると言う。青森県古館遺跡⁽³⁰⁾でも比較的古いと思われる内耳鍋が出土している。また、蓬田大館遺跡では、住居跡から土製内耳鍋と共伴していることは先に述べた。

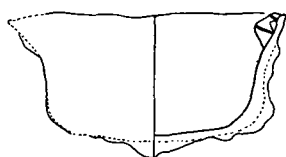
福島県仙台南前遺跡⁽³¹⁾では中近世の墓壇跡が確認され、その中の一つから宋銭と鉄鍋が検出された。報告者は東北地方の類似製品から中世後半（16世紀）のものと考えられる。根城においても同様な内耳鍋が墓壇跡から確認されている。

また、尻八館遺跡・浪岡城などでは、吊耳鉄鍋の出土が確認されている。年代的は共伴遺物などから尻八館遺跡が14～15世紀、浪岡城が16世紀代と考えられる。菅原氏は尻八館遺跡のものなどは三足と吊耳を取除けば、河内型の鉄鍋の形態と同じであり、河内国から陸奥国や北海道に運ばれた可能性を示唆されている。

最近東北の古代においても大規模な製鉄遺跡が存在したことが次第に明らかになりつつあり、⁽³²⁾

世紀

12

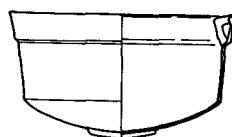


岩手県玉貫遺跡

13

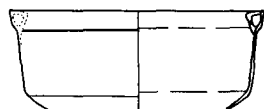


14

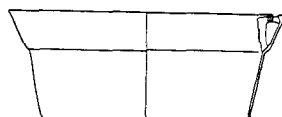


鎌倉御成町228-2地点遺跡

15

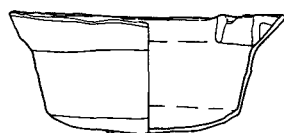


北海道中ノ島1遺跡



長野県松本市中山千石出土

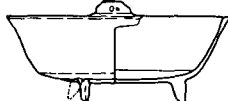
16



青森県根城跡



千葉県鹿島前遺跡



青森県浪岡城跡



福島県仙台内前遺跡

17



北海道末広遺跡



千葉県鹿島前遺跡

0 20cm

第17図 東国を中心とした鉄鍋の変遷（註27文献他より作製）

中世においても、独自に鋳物生産が行われていたことも十分考えていく必要があるのかもしれない。

(2) 関東・甲信地方

信濃においては更埴の屋代遺跡⁽³³⁾において9世紀後半から10世紀前半頃と推測される羽釜の報告がされている。類似品は現在のところ確認されていないが、群馬県沼田市周辺では9世紀後半の窯跡および周辺の集落跡から土製で底部に突起をもつ羽釜が検出されている⁽³⁴⁾。この鉄製羽釜製品は底部に湯口と思われる突起が残っており、土器製もそのまま湯口を模倣をしたものと思われる。この例は少なくとも、10世紀代の北関東を中心に広く分布する羽釜の祖形に鉄製の釜があった可能性を示唆するとともに、鉄製の釜がすでにこの段階に存在したことを意味する⁽³⁵⁾のかもしれない。また、東京都日野市落川遺跡等においても11世紀代と推測される鉄製鍋の破片が検出されている。これは三足の脚のつくものである。このような例は10世紀代から11世紀にかけ煮炊具の中で鉄製の鍋の存在が次第に重要な位置を占め出したことと推測されなくもない。

いずれにしても古代後半から末期においては鉄製品の資料は少なく、生産活動はまったくわからない。しかし、12世紀代に日用品以外の中に次第に明らかになりつつあるものがある。例えば、林宏一氏によっても明らかにされたように藤原姓鋳物師の活動が武蔵を中心に盛んであったことが解明され中世前半においての鋳物師の活動が伺われ、各地の同名の経筒出土がある⁽³⁶⁾。

網野善彦氏は、西国に比して東国の鉄器生産には不明な点が多いとしながら、古代における上総の轡、武蔵の鐙、伊豆の鍬の貢進が行われていた点などからみて、東国においても鍛冶が独自に活動していたことは間違いないとしている。また、鎌倉幕府が番匠等とともに、諸種の「芸能」民が京から招かれたのと同様、鍛冶・鋳物師の場合も、京下りの人々が多かった事は、事実と言わなくてはならない。さきの武蔵の鋳物師にしても、その可能性は一例として考えられる。そして、その生産には河内・和泉等の鋳物師の移住が存在したこと等が考えられようが、この点に関しては今後の課題である⁽³⁷⁾。

ここでは、関東・甲信地域で鋳物師関連遺跡と鉄製内耳鍋について見てみたい。

鉄鍋を生産した遺跡として可能性のあるものとして、群馬県本宿・郷土遺跡⁽³⁸⁾、埼玉県金井遺跡⁽³⁹⁾がある。

本宿・郷土遺跡では井戸跡から鋳型が検出されており、生産遺構は確認されていない。井戸の覆土の上半部から鋳型の破片が検出されたもので、井戸が半分ほど埋没した段階でこれらの鋳型は投棄されたものと推測されている。鋳型は数点検出されており、いずれも鍋と考えられ、その大きさから大・中・小の三種あると推測されている。発掘者は付近の歴史的環境等から、15～16世紀のこの付近に存在した光明院、貫前神社等の社寺、付近に形成されていた一宮氏、小幡氏等の城館跡等に供給されたものと推測されている。また、土鍋の大量出土から、一般的

に使用されたのは土鍋で鉄鍋は特殊なものと位置づけ、主な供給先を支配層などと考えている。

ついで金井遺跡であるが、1989～1990年にかけて調査が行われた遺跡で、主に銅製品を主体とし、梵鍾、磬、仏像等の鋳型とともに鉄製鍋の鋳型も検出されている。遺構は溶解炉を始めとしたものである。生産跡の年代であるが、共伴遺物などから判断すると13世紀後半から14世紀代に至る時期のものと推測される。

次に、集落などの生活遺跡での出土例を見てみたい。この地域で確認された中世段階の鉄鍋は比較的少なく、その大半が14世紀以降のものと推測され、最近その出土例を増している。

年代的に古いものとしては鎌倉出土のものであろう。鎌倉では千葉地東遺跡、御成町 228 番 2 他地点遺跡等を始め幾つかの遺跡でその確認がなされている。千葉地東遺跡のものが比較的(40)古く12世紀末から13世紀初頭に位置づけられ、その後13世紀後半以降には多量に出土する傾向にあると言う。御成町 228 番 2 他地点遺跡から検出されたものは比較的残りがよく、第2方形(41)堅穴建築址から常滑の小壺、ろくろ土師器等と共伴しており、発掘者により常滑の編年から14世紀前半代の年代観が与えられている。第2方形堅穴址の西側から銅製の鉉も検出されており、この鍋の鉉と推測される。

信濃では、下伊那郡阿智村杉の木平(42)、松本市中山千石(43)の他幾つかの遺跡で破片が確認されているようであり、完形品はない。

千葉県我孫子市鹿島前遺跡(44)においては中世後半から近世前半の墓壇跡が検出されており、鉄鍋が蔵骨器として使用されている。東北の根城などと同様な遺跡であり、鍋使用の意義についてはすでに民俗事例などを含め議論されていることである。

以上のように東北、関東地方の鉄製鍋の例を幾つか見てみた。その例は破片資料を含めてかなりの数が検出されている。西日本で検出された中世鉄鍋もその形態に中世前半と後半ではやや異なりが認められるが、かなりの数が確認されつつある。

最後になったが、第17図は東北・関東を中心に出土した鉄鍋の変遷図である。基本的に口縁部の反りの長さ、耳の大きさなどに変化が認められるが、今回は詳細な分類を検討するに至らなかった。今後の資料の蓄積を待って正確な分類を行う必要がある。

3 小 結

先ず、東海地方における内耳鍋を中心とした煮炊具についてみてみたい。東海地方において、13世紀から15世紀代にかけて土製の煮炊具は、主に伊勢鍋の存在がある。また、常滑等でも羽釜の生産が行われていたようである。これらの土製品がどれだけの供給量を占めていたものか、当時の集落遺跡の調査も不十分なことから断定はできないが、鎌倉などへの供給量を考えるならば地理的に近い尾張などにはかなりの割合で供給されていても不思議ではない。しかし、15世紀中頃以降、地域的な色彩の強い土師質の内耳鍋出現を見る。胴部にハケメ調整などを持ち、

伊勢系の鍋に類似する。一方、口縁部に耳を有しており、この点で鉄製の内耳鍋に類似することを指摘でき、基本的に鉄製内耳鍋の模倣製品と考えたい。伊勢鍋も室町後半には伊勢一国以外にその製品が出ることはなくなり始めるといい、この時期に呼応するかのように内耳鍋の出土が増すことを考えれば、その成立は伊勢鍋との関わりを考える必要もあるのではないか。そして、その生産体制として、伊勢鍋工人の移動、また山茶碗工人の変質、従来から在地の土師器工人の存在があったなどその可能性は幾つか考えられるが、どの考えも断定はしかねる。また、畿内、関東などの煮炊具の転換が14世紀末から15世紀前半であるのに対して、この地域は15世紀中頃から15世紀後半とやや遅れることも特徴であり、今後検討の余地がある。

さて、関東地方であるが、古代以来の煮炊具である土師器の甕は、11世紀中頃から11世紀後半にはほぼその姿を消し、在地産としての明確な煮炊具の出現は、土製の内耳鍋が出現すると思われる14世紀後半から15世紀前半を待たねばならない。西国でも、例えば伊勢鍋は11世紀前半に古代以来の甕から、画一化された鍋に転換するとされる。畿内を中心とした地域でも、11世紀から12世紀に至る時期に古代的な甕から鍋・釜に転換する。しかし、東国と異なり煮炊具の形態的变化を認めながら、生産工人の消滅までは考えられない。系譜として継続性をそこに認めることができる。古代末から中世に継続的生産体制をもたないことが関東の大きな特徴である。

12世紀後半以降から14世紀にかけての煮炊具の状況は鎌倉のものが参考となる。鎌倉で確認されている煮炊具は伊勢鍋、滑石製石鍋、鉄鍋などがある。その量的な比率はわからないが、伊勢鍋が比較的多いようである。しかし、この伊勢鍋も主に鎌倉時代中頃以降のことであり、その前はわからない。いずれにしろ、消費地として成立している鎌倉では煮炊具の多くは遠方からの搬入品であり、在地産と推測されるものは検出されていない。このことは、土師器製の鍋すら付近には生産体制が確立していなかったことを意味する。さらに、言うならば、最近僅かずつだが、鎌倉のみならず下総、北武蔵などの地域でも伊勢鍋や石鍋が確認され始めており、想像以上に搬入品の占める割合が多かった可能性もある。

古代の土器製煮炊具は11世紀代に消滅するが、その後は鉄鍋の存在もある。このことは西国の生産地の存在ばかりでなく、東北地方にかなり大量の鉄生産を行う体制が古代以来からあった可能性を示している。東北各地の鉄鍋の出土はそれを証明するものと思われる。それらの搬入、さらに金井遺跡などに見られるように、次第に生産体制が確立したことを意味している。この鉄鍋の存在は土製の煮炊具との間に補完関係にあったのか。また、階層的な異なりによる使用製品の使い分けなども考えられよう。現状では不明な点が多いが、鉄鍋についても多様な煮炊具の一角を担って、中世前半の関東各地に分布していたと思われる。

14世紀の後半に北関東から信濃にかけて土製内耳鍋の出現がある。これは、中世前期には認められなかった新たな煮炊具の出現である。土製内耳鍋の分布が顕著な地域は上野から北武蔵

の地域であり、この地域は13世紀後半から14世紀にかけ瓦質の片口鉢・壺生産が盛んになったことは前章で明らかにしたが、その生産工人が引続きこの鍋の生産に携わったことは、その特徴から明らかである。13世紀後半から14世紀前半においては、鉄鍋とともに土製の鍋や石鍋もわずかながら存在したが、14世紀中頃、鎌倉幕府廃絶以降ではかなり流通体系の変化があり、そのような製品の搬入は減少したと考えられる。搬入土製煮炊具の減少過程で、壺生産などの下地のある地域には次第に鉄鍋模倣、また、西国の羽釜を模倣する在地煮炊具が生産し始めたものと思われる。それは、一つに搬入煮炊具の途絶えに加え、鉄製内耳鍋の地域的に供給の減少傾向なども考えられよう。

信濃においては、中世前期は不明な点が多いが、中世後期においては北関東とほぼ同様な変遷を辿ることができる。

一方東北では、津軽地方などの擦文文化の影響を受けた所では、古代末期より土製の内耳鍋の存在が認められる。ただ、模倣の原形として、鉄鍋でなく、他の製品に祖形を求める考えもあり、単純に解決できない面を持っている。また、同時に蓬田大館や玉貫遺跡などの例を見ると12世紀代には鉄鍋のかかなりの普及があったと考えざるを得ない。東北の南部の福島周辺には中世後期に土製内耳鍋の出現があるが、その出現は関東などの出現と同様なものであろう。

16世紀に至ると、鋳物師は各地に転住し、また、戦国大名は鋳物師の一国規模の組織と商圏を支配しようとし、次第に鋳物師集団の再編成が行われていくとされる。⁽⁴⁵⁾これらの鋳物師は日常的な鋳物のみならず、武器などの生産も鋳物師の製作である。このような中で、鉄鍋の生産も増大したのか安定的に供給されるようになったのか、16世紀前半においては東海等の地域を除き、土製の鍋は次第に姿を消して行き、焙烙形の浅めの製品のみが残る。使用の頻度にもよるのであろうが毎日使用する鍋はやはり耐用度の高い鉄に優位性があることは当然である。焙烙に見られるように、耐久性をあまり要しないもの、また、火鉢のように大量需要に対応すべき大形の製品は、在地の瓦質製品で十分であったと思われる。

そして、近世にいたっても焙烙の他、火鉢・焔炉などの低下度焼成の製品は引続き在地産として焼成されたことは、既に江戸の遺跡の発掘や、最近の江戸在地系土器研究会の研究に詳しい。

註

- (1) 馬淵一夫 「中世年鎌倉の煮炊様態」『青山考古』5 1987
- (2) 新田 洋 「三重県における古代末～中世にかけての土器様相」『マージナル』9 1988
- (3) 辻 真人 「羽釜の変遷とその性質について」『文化財の保護』第21号 東京都教育委員会 1989
- (4) 菊池徹夫 擦文文化の終末年代 古代探叢一滝口先生古稀記念考古学論集一 1980
- (5) 前掲註2 文献
- (6) 佐藤公保 「尾張の土師器煮沸具」『マージナル』9 1988
- (7) 遠藤才文 「人・獣骨類の出土した大溝」『(財)愛知県埋蔵文化財センター年報』昭和60年度 1986
- (8) 足立順司 「内耳鍋の研究」『静岡県埋蔵文化財研究所研究紀要』Ⅱ 1987 足立氏は静岡出土の内

耳鍋を中心に、広域的に鍋の研究を行っている。

- (9) 後藤健一他 「長谷元屋敷遺跡」『国道1号線潮見バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書』 1986
- (10) 浅野晴樹 「関東における中世在地産土器について」『(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団研究紀要第4号』 1988
- (11) 大江正行他 「清里・陣馬遺跡」『昭和50年度県営畑地帯総合土地改良事業清里西部地区埋蔵文化財発掘調査報告書第1集』 1981
- (12) 木津博明 「上野国分僧寺・国分尼寺中間地域」1『関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財調査報告書第12集』 1986
- (13) 前掲註12文献
- (14) 皂樹原・檜下遺跡調査会 「皂樹原・檜下遺跡Ⅰ」『皂樹原・檜下遺跡調査会報告書第1集』 1989
- (15) 調査例が増加しつつあるが、次の2遺跡の資料が比較的まとまった出土である。
岩淵一夫 「赤塚遺跡」『栃木県埋蔵文化財調査報告第36集』 1981
上三川町 「大町遺跡」『上三川町埋蔵文化財調査報告第5集』 1985
- (16) (財)茨城県教育財団 「屋代B遺跡Ⅱ」『竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書15』 1987
- (17) 長野県教育委員会 「御社宮司遺跡」『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書一茅野市その5一』 1982
- (18) 佐久市教育委員会 「大井城」 1981
- (19) 野村一寿他 「中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書4一松本市内その1一総論編」『(財)長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書4』 1990
- (20) 米沢市教育委員会 「上浅川」『米沢市埋蔵文化財調査報告書第14集』 1985
- (21) (財)福島県文化センター 「東北横断自動車道遺跡分布調査報告1」『福島県文化財報告書第223号』 1990
- (22) 梁川町教育委員会 「遺跡梁川城本丸・庭園」『梁川町文化財調査報告書』第6集 1986
- (23) 菅原正明 「西日本における瓦器生産の展開」『国立歴史民俗博物館研究報告』第19集 1989
- (24) 網野善彦 「中世再考」日本エディタースクール 1986
- (25) 黒田日出男 「中世農業技術の様相」『講座・日本技術の社会史(農業・農産加工)1』 1983
網野善彦 「中世の鉄器生産と流通」『講座・日本技術の社会史(採鉱と冶鉄)5』 1983
ここで網野善彦氏の意見を引用してみる。
「黒田日出男氏が触れているように(中世農業技術の様相)」「今昔物語集」巻26—10話や1170(嘉応2)年の摂津国河南荘住人の家内雑物などによって、住人、名主クラスの人々の手許に、平安後期、馬鍬、辛鋤、鎌、鍬などの農具、斧、たつき等の山仕事の道具、鍋、釜などの炊事具が所持されていたことを知りうる。
こうした事例は、1101(康和3)年、大和国石名荘住人村永が馬鍬一具、手斧一支を奪い取られていることや(「東大寺文書」『平安遺文』4—1445)、吉野山郷人五人がそれぞれ、ヨキ、タツキ、シハキリ、マカリカネ等を取られた事実(「金剛峯寺」)によって補足することが出来る。山の民とも言うべき人々にも、この様な鉄器が普及していたのである。さらにまた『古今著聞集』巻16、興言利口第25(549話)に現れる遊女は、「かたかま」だけでなく、かまどに「わきかま」に備えようとしており、『一編聖絵』をみると、乞食もまた鉄鉢や五徳(金輪)を持っていた(『日本常民生活絵引』2)。
もとより財物として貴重視されていたとしても、鉄製品はこのように、鎌倉時代に成れば社会の隅隅にまでゆきわたっていたとみなくてはならない。」
- (26) 石附喜三男 「エゾ地の鉄」『日本民俗文化体系3』小学館 1983
宇田川洋 「イオマンテの考古学」『UP考古学選書8』東大出版会 1989
菊池徹夫 「擦文文化の終末年代」『古代探叢一滝口先生古稀記念考古学論集一』 1980
- (27) 越田賢一郎 「北海道の鉄鍋について」『物質文化42』 1984
- (28) 鈴木恵治 「玉貫遺跡」岩手県埋蔵文化財センター 1981
- (29) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 「平泉町柳之御所跡一現地説明会資料一」 1989
- (30) 青森県教育委員会 「碓ヶ関村古館遺跡」 1980
- (31) 福島市教育委員会 「仙台内前遺跡」『福島市埋蔵文化財調査報告書第25集』 1988
- (32) 寺島文隆 「古代・中世の製鉄遺跡(東日本)」『月刊考古学ジャーナル313』 1989

- (33) 岡田正彦 「長野県更埴市屋代馬口遺跡調査報告書」『信濃23-5』 1971
- (34) 中沢悟他 「月夜野古窯跡群」 群馬県利根郡月夜野町教育委員会 1985
- (35) 水口由紀子 「考古遺物からみた中世成立期の様相」『文化財の保護第21集』 1989
- (36) 林 宏一 「藤原守道の経筒」『埼玉県立博物館紀要1』 1974
- (37) 前掲註25文献
- (38) 富岡氏教育委員会 「本宿・郷土遺跡発掘調査報告書」 1981
- (39) 筆者実見
- (40) 千葉地遺跡発掘調査団 「千葉地遺跡」 1982
- (41) 千葉地東遺跡発掘調査団 「御成町228番-2他地点遺跡」 1987
- (42) 長野県教育委員会 「杉の木平遺跡」『長野県中央自動車埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告』 1971
- (43) 前掲註19文献
- (44) 我孫子市教育委員会 「鹿島前遺跡」 1981
- (45) 笹本正治 「近世の鋳物師と鍛冶」『日本技術の社会史（採鋳と治鋳）5』 1983

Ⅵ その他の瓦質土器（第18図，19図）

今まで述べてきた在地土器以外にも多くの製品が存在する。その器種としては瓦質の火鉢・風炉・盤・茶釜・甕，土師器の香炉・羽釜などである。主なものについて若干触れてみたい。

火 鉢 中世全般にわたって存在するものと考えられる。鎌倉では多量の火鉢類の破片が出土しており，中世前半，多くの火鉢類が畿内からもたらされた可能性があるが，その一方で少なからず在地産のものも生産を開始していたと考えられる。直接鎌倉のものに当たっていないが，北武蔵の東谷中世墓址出土のものでは深めの火鉢が蔵骨器として使用されており，この火鉢は武蔵型の壺に焼成や胎土が類似していることから同一工人の製作と考えられる。しかし，多くの火鉢が，各地の遺跡から出土するのは，14世紀後半から15世紀以降のことである。平面形が方形・円形のものが多く，口縁部は直立するもの，内側に折れ曲るものなどがある。そして，口縁部には菊花文や雷文などをあしらったものが多く，底部には足を貼りつけている。器面調整は比較的丁寧にナデられている。

先に触れたように，多く分布し始めるのは14世紀後半以降の事と思われ，内耳鍋や片口鉢の隆盛期ともほぼ軌を一にする段階に多量に生産が開始されるものと判断される。

奈良火鉢が中世前半の鎌倉に大量に搬入されたことは事実であり，在地産の火鉢が中世中頃以降積極的に生産されたことも事実と思われる。奈良火鉢については，その生産と流通について研究は進んでいることから，それらとの比較を通して，在地の火鉢生産の位置を検討していく必要がある。今回は，資料の十分な収集を行えなかったため，存在の事実を記すに留める。

茶 釜（第18図） この形態の焼物は畿内から関東にかけて多く分布するが，東北にはあまり出土例を見ない。風炉とセットとして使用されるものと考えられている。鉄製の茶釜の模倣と推定される。西国では球形で，底部は丸底のことが多い。体部には幅の狭い鰐を巡らし，肩

部に一對の耳を貼りつけている。関東周辺のものは、鉄製の茶釜と比較するとかなり形態が異なる。球形に近いが、底部は平底のものが多い。体部に鐐を巡らせるものは少なく、一對の耳の下部に耳を受けるような形状の張出しを作っている。尾張から遠江にかけて分布するものは概して西国のものに近く球形で鐐が巡るものが多く、与えられている年代も15世紀末から16世紀代を主体とする。北関東のものは出現は15世紀前半で内耳鍋とはほぼ同じ時期が想定され、16世紀前半頃まで確認される。ただ、常陸国屋代B遺跡出土⁽⁴⁾のものは、尾張辺りのものとはほぼ同形状を呈しており、年代的もほぼ15世紀末から16世紀代であり、関東でも年代が新しくなると、鐐を所有する可能性もある。この製品も16世紀後半にはあまり認められず、形態と年代の上で東海地方とは隔たりがある。

香 炉（第19図） この製品は最近、群馬、埼玉などにおいて多数の資料が検出されている。基本的に土師器のものが主体である。口縁部に菊花文などを配しており、古瀬戸などの製品の模倣製品と考えられる。

その他、風炉、盤、甕などの存在があるが基本的に殆どの器種は中世前半に鎌倉にもたらされていたものと考えられるが、東国全域にその消費が拡大し、生産を本格的に開始したのは火鉢などと同様に15世紀前半以降の瓦質土器の増産が進んだ時期のことと推測される。

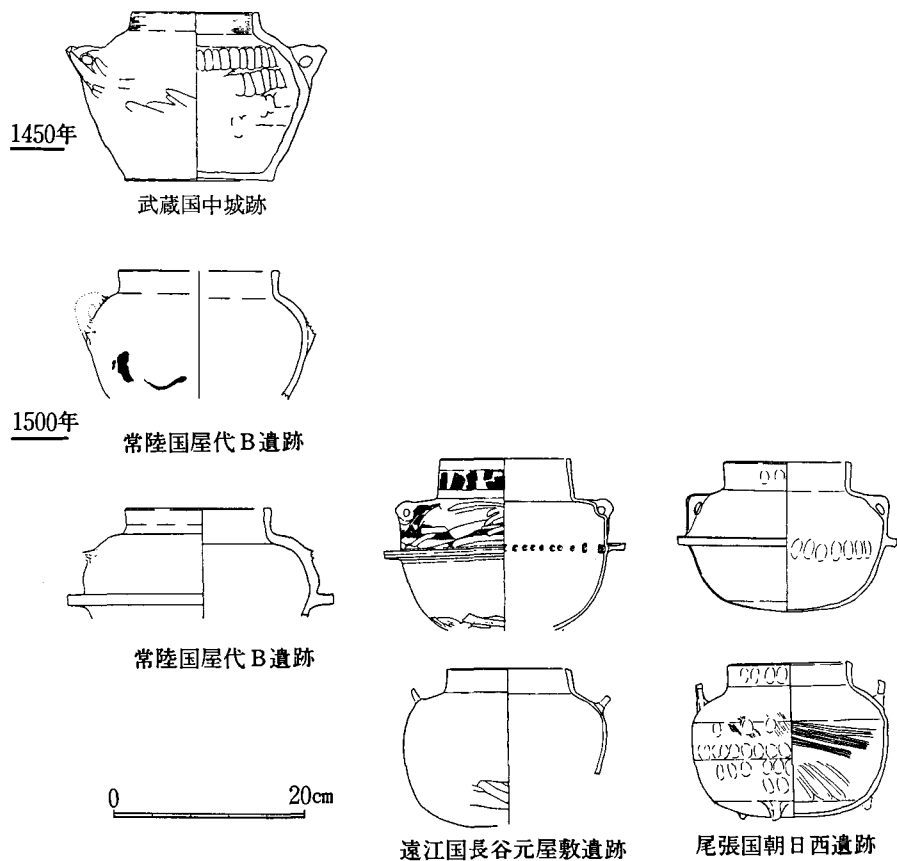
註

- (1) 国学院大学考古学資料室編 「蔵骨器」『国学院大学考古学資料室要覧』1974
浅野晴樹 「埼玉県出土の中世陶器(1)―蔵骨器を中心に―」『埼玉県立歴史資料館研究紀要第3号』1981
- (2) 菅原氏は胎土分析等で、奈良火鉢が全国に供給されていることを述べているが、鎌倉などでは、焼の悪い奈良火鉢とは異なる製品なども存在するようである。
菅原正明 「西日本における瓦器生産の展開」『国立歴史民俗博物館研究報告第19号』1989
- (3) 梅沢太夫 「中城跡発掘調査報告書」1981
- (4) (財)茨城県教育財団 「屋代B遺跡Ⅱ」『竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書17』1986

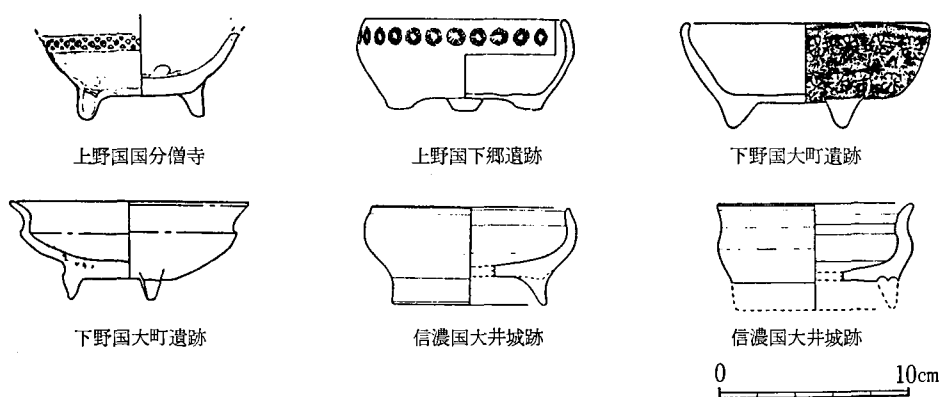
Ⅶ 結 語

供膳具である土師器皿、北関東の瓦質の壺、調理具の片口鉢・播鉢、煮炊具以上4つの形態について見てきた。最初に、これらの土器が汎日本的な土器生産の画期と比較した時、良く呼応する状況を想定できることを述べた。しかし、東国の土器生産は東海諸窯さらには、畿内以西の土器生産とは異なる状況が、生産の工人の系譜や搬入品との関わりでかなり存在することも明らかになってきた。ここでは、関東の在土器の生産を中心にその変遷と特徴を要約してみたい。

ロクロ土師器については、古代では、須恵器模倣としての観点から解釈されてきたが、東国



第18図 各地の茶釜型土器



第19図 各地出土の香炉型土器

では大半の地域で10世紀後半には須恵器生産が消滅し、その後、このロクロ土師器は模倣の祖型を少なくとも須恵器以外の供膳具に求めて行ったことは明らかである。それは、灰釉陶器、漆器、山茶碗等様々な器種が想定されている。このような須恵器模倣から脱却し、他器種の模倣をし始めたのが11世紀代中頃を中心とする段階で、土器組成と器形に大きな変化を見出すことができる。

そして、12世紀段階は京都系土師器模倣の非ロクロ土師器の可及的な広がり、ロクロ土師器は11世紀末以降の漸移的变化を経た後、この時期に完成されたものと推測されている。この非ロクロ土師器生産の開始と、11世紀代に供膳具の完全に消えた地域を含めてのロクロ土師器生産の二者が、東国全域に広がっていることに注目する必要がある。それは一面で、非ロクロ土師器新規搬入品模倣、ロクロ土師器は在地品と言う構図は成立たなく、両者とも12世紀段階に新たに出現したものと考えてもよいほどの分布状況である。そして、その用途については、単純に日常的供膳具としての把握はできない。

生産形態のあり方まで把握できないが、少なくとも畿内の中世的な座のあり方とは異なるものをそこには見出せる。それは、東国では古代末の須恵器工人、さらには土師器工人の解体する過程を経て、中世土器生産に移行する過程が畿内のように明確でない。非ロクロ土師器の分布と使用形態で明らかのように、その生産は使用者層（領主層）との結びつきが強い形で生産であったと想定でき、合わせてその組織化ができなかった点が、その後の土器生産にも影響を与えたものと推測される。

貯蔵具や調理具については、12世紀段階より東海諸窯の製品が継続的に大量に搬入されることは、商品流通が極めて十分であった背景を想定できる。その様な広域的な流通の発達のため関東を中心とした地域では、同種の土器生産は、12・13世紀代には殆ど発達を見ない。例に挙げた、北関東を中心に分布する壺の生産は13世紀後半以降のことである。一方東北では、12世紀後半、さらに13世紀中頃以降に陶器生産が出現する。

北関東の壺の出現の背景を推測したが、ここでわかる点は、その使用や分布のあり方から、特定階層のための商品と規定できた。その生産の背景は二つの形態に多少の異なりを認めながらも、新興の工人の出現も想定でき、領主層の強い支配の関わる生産とも考えられた。東北の瓷器系製品については、消費遺跡での状況を十分把握するに至らなかったもので、今後の課題としたい。ただ、最近の大戸窯跡などの調査で明らかのように、想像以上の陶器生産が想定でき、東海諸窯のみに依存した関東などとは異なる消費形態、さらには生産形態が想定される。

関東において14世紀代に壺と共に生産を開始した片口鉢は、壺とは異なる使用形態を示すことを述べた。この製品は、生活必需品として初めての瓦質土器生産の開始と規定できなくもない。いずれにしても、14世紀代に内陸の北関東において、常滑などの補完品としての片口鉢が出現し、その後の在地土器生産に多大な影響を与える。

東国では、供膳具の一部以外の在地土器は、基本的に東海以西の土器の模倣の上に成立していると言って過言でない、その流れの一つが東北における中世前期の陶器生産であり、他方は北関東を中心に成立した瓦質土器の生産などである。後者は瓦質を中心とした土器生産であり、その器種には壺・片口鉢・播鉢・内耳鍋・茶釜・火鉢・風炉などの器種があったことを述べた。その中で、東国として主体的な成立を見た器種は壺と内耳鍋である。

片口鉢の出現以降、次第に生産の拡大と新たな器種の増大を生み出した。それは、関東を中心とした地域に分布する内耳鍋に象徴される。煮炊具を含め多分に西国の土器陶器に頼っていた中世前期の構造の中で、東海諸窯の土器生産の構造的変化や領国的な流通形態への変化に、次第に在地土器の器種の増大があった。その時期は14世紀末から15世紀前半代で、西国でも瓦質土器の生産に変化を見出すことのできる時期でもある。

15世紀中頃以降東国各地で播鉢の生産が始まる。また、東海地方では土師器製の煮炊具が新たに生産を開始する。東国の各地の播鉢の出現は、前代からの系譜を辿ることのできる地域と全く系譜を辿ることのできない地域とがあり、ここでまた新たに土師器皿工人の変質などの播鉢工人の出現を想定できる。いずれにしても、領国経済の発達の中での、土器生産の地域拡散であり、それとともに、大量消費へ向けてのためか、製品の土師器化現象などの粗悪化が強くなる。

東海諸窯における供膳具を初めとした生産の増大する15世紀中頃、さらには大窯成立以降の15世紀後半から16世紀における東国では、遺跡において、搬入陶器の出土量が増大する。このようなあり方は、近世の江戸などに見られる供膳具を美濃瀬戸製品や肥前製品に殆ど占有される兆候への一步と考えられる。

在地土器については、16世紀後半代になると内耳鍋の消滅などの一部製品の淘汰が見られるが、火鉢、焙烙などの瓦質製品、土師器皿など継続して近世に至っても生産されるものもある。器種の淘汰を行う反面、江戸と言う大消費地を控え、中世以上の器種の豊富さと大量生産を想定できる。

東国の中世土器において、地域的に供膳具の碗形態、煮炊具の鍋類の生産の欠落等特徴的な点もあり、各地に独自の様相を見出すことができる。しかし、広域流通の発達の中で、比較的連動した関係をそこに見出すこともできる。即ち、関東を中心とした東国では、流通体系の比較的発達した状況の中で、東海以西の土器を搬入する一方、それらの補完関係の中から分業的意味合いでの在地土器生産が次第に発達する状況にあり、基本的には汎日本的な共通した動向を見出すことができる。しかし、ロクロ土師器工人や瓦質土器生産工人の成立と支配のあり方などに東国の独自性が指摘できる。

資料の採集と分析が十分でなく、多分に憶測の点が多くなってしまった。本来搬入陶器を含めて各地の土器組成を把握し、在地土器の位置づけを明確にするべきであった。

また、在地土器の中でも火鉢など比較的多量に検出されている土器について、殆ど触れることができなかった。それらは畿内の瓦質土器生産とも大に関わるものであり、畿内の中世土器生産を含めた形での検討を行っていく必要がある。多くの課題が今後に残された。

謝 辞

この小論まとめるにあたって御指導，御助言いただいた下記の方々に厚くお礼申し上げます。

吉岡康暢・小野正敏・井上喜久男・服部敬史・福田健司・服部実喜・水口由紀子・長谷川厚・千々和到・菅原正明・四柳嘉章・百瀬正恒・橋本久和・鋤柄俊夫・白鳥良一・工藤清泰・三浦圭介・本澤慎輔・高野芳宏・千葉孝弥・飯村均・中山雅弘・田代隆・伊藤嘉章・島村範久・原明芳・坂井秀弥・笹生衛・足立順司・佐藤公保の諸氏。

本稿は，1987・88年度国立歴史民俗博物館特定研究「日本歴史における地域性の総合的研究一中・近世における東国と西国」の成果の一部である。

（財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団主任調査員・現埼玉県教育局文化財保護課主任本館共同研究員）

Regarding Local Pottery in the Eastern Part (Mainly Kanto) of Japan

ASANO Haruki

A great number of locally-produced pieces of pottery have been found through research excavations of the remains from the middle ages in the eastern part of Japan, but no serious studies have been made on them until recently.

In this report, four kinds of local pottery are described to show the characteristics of pottery in the middle ages in the east: Haji ware dishes for serving food, vases found in the northern part of Kanto for storing food, Katakuchi-bachi and Suri-bachi (bowls with pouring lips and earthenware bowls with inner textured surface used as mortars) for preparing food, and inside-handled pans for boiling food.

The first point is that Haji ware dishes that are classified into wheel-made ones and non-wheel-made ones started to spread in the east to signify the medieval society in the east. Incidentally, Haji ware in the east was produced in a different style from one in Kinai in the west.

The Second one is that Ga ware (tile-clay) vases that are found widely in the northern part of Kanto signified increased production of original earthen ware in the east.

The Third one is that Katakuchi-bachi bowls represented greatly increased production of local earthen ware in the latter half of the middle ages while Suri-bachi represented diversified centers of production and the appearance of locally domineering lords in the latter half of the middle ages.

The Fourth one is that Inside-handled pans, like Katakuchi-bachi and Suribachi, represented the increase of locally produced goods, and they also represented the germinating division of labor in production of Ga ware products such as flat pans and braziers that were popularly used in the pre-modern days.

Earthen ware products such as briefly mentioned above are only part of the pottery in the east in the middle ages. The complete variety of them are still to be investigated.